興善寺 I

一熊本県八代市興善寺町所在興善寺馬場遺跡の調査一

1980

熊本県教育委員会

興善寺 I

一熊本県八代市興善寺町所在 興善寺馬場遺跡の調査一

1980

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴ない、日本道路公団の委託により、昭和50年度から昭和54年度にかけて松橋~八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本報告書は、この間に実施した八代市の「興善寺遺跡」に関するものであります。

興善寺は昭和35年に熊本大学松本雅明教授により調査され、法起式の伽藍配置が復原されていたもので、自動車道はこの一隅および周辺を通過することになりました。調査の結果、築地の東南隅や周辺の関連遺構等が確認されました。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸いであります。

発掘調査の実施に当たりましては、日本道路公団当局の御理解と御協力をは じめとして、調査指導の先生方、地元の方々からの御協力を賜りました。

昭和55年3月31日

ここに心からお礼を申しあげます。

熊本県教育長 井 本 則 隆

1. 本報告書は九州縦貫自動車道(松橋一八代間)建設に伴い、日本道路公団の委託を受けて熊本県教育委員会が実施した八代市興善寺町所在興善寺馬場遺跡の発掘調査報告書であり、熊本県文化財調査報告第45集として刊行するものである。

なお熊本県文化財調査報告第45集は、 興善寺廃寺関連の四郎丸・馬場・志水の 3 遺跡の調査報告を収録するが、編集の 都合上、遺跡の一部が寺域内に包括され ると思われる馬場遺跡を『興善寺 I』と し、寺域のそれぞれ北側と南側に隣接す る四郎丸・志水の2 遺跡を『興善寺 II』 として分冊した。

- 2. 調査は昭和52年3月10日から12月28日 まで実施し、引き続き昭和54年度事業と して、出土遺物の整理および報告書を作 成した。
- 3. 中世墳墓の発見に伴って、人骨の調査 を長崎大学内藤芳篤教授、松下孝幸同教 室助手の諸氏にお願いし、この調査の成 果を付論として収録した。
- 4. 本書に使用した図の作成は、野田の他に桑原謙治、中山清美、池田栄史、森山 栄一、中原幹彦が行ない、製図は野田が 行なった。また、古森政次、高谷和生氏 の協力を得た。
- 5. 掲載写真のうち、遺物写真の一部について白石巌氏の協力を得た。
- 6. 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で 行ない、野田が担当した。

本 文 目 次

第1章		
	遺跡の位置および環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	調査にいたる経過	3
3.	調査の組織	3
4.	発掘調査の経過	4
5.	興善寺廃寺の調査・研究史抄	6
第2章	遺跡	
	遺跡の層序	1
2.	遺構······	1
(1) I 区の概要	1
. (2	:) II区の概要	1
	1. 築地状遺構	10
	2. 井戸状遺構	10
	3. 中世墳墓群	2
	4. 掘立柱建物址	23
(3	8) III区の調査概要	2
	1. 流路	23
	2. 掘立柱建物址	25
第3章	遺物	
(1	.) 軒瓦·····	2
	1. 軒丸瓦	2
	2. 軒平瓦·····	3
(2	2) 平瓦・丸瓦	38
	1. 平瓦・丸瓦の類別	38
	2. 瓦の出土状態	39
	3. 平瓦・丸瓦の観察	4(
	4. まとめ	45
(3		
	1. I 区出土土器······	
	2. II 区出土土器······	
	3. III区出土土器·····	
	その他の遺物	
第4章	調査の成果と課題	
	寺院の建立まで	
	寺域について	
	出土遺物における二・三の問題	
4.	軒す瓦の製作技法	38

図 版 目 次

図版 1	(1)興善寺馬場遺跡遠景(東から)	図版18	(1) [[区井戸状遺構遺物出土状態①
	(2) [区全景(北から)		(2) [[区井戸状遺構遺物出土状態②
図版 2	(1)Ⅱ区全景(南から)	図版19	⑴ [○] 区井戸状遺構遺物出土状態③
	(2)Ⅱ区調査風景(南から)		(2) Ⅲ区井戸状遺構遺物出土状態④
図版 3	⑴Ⅱ区五輪塔群	図版20	(1) II 区井戸状遺構遺物出土状態 (猪牙) ⑤
	(2)Ⅱ区全景(南西から)		(2) [[区井戸状遺構遺物出土状態
図版 4	(1) [区調査風景(東から)	図版21	(河風) (到 (1) (猪下顎骨) ⑦
	⑵Ⅲ区調査風景(北から)		(2) II 区井戸状遺構遺物出土状態 (猪下顎骨) ⑧
図版 5	(1) [区([-5)遺物出土状態	図版22	(1)
	(2) [区(I-5)遺物出土状態		(2)H区中世項基1・2 芳基八宵 出土状態
図版 6	∐区全景(北から)	図版23	(1) [[区中世墳墓2号墓人骨出土 状態]
図版 7	(1)Ⅲ区遠景(北から)		(2) II 区中世墳墓 2 号墓遺物出土 状態
	(2)Ⅱ区遺物出土状態	図版24	(1) 狀態
図版 8	⑴∏区築地状遺構		II 区中世墳墓3号墓人骨及び (2)遺物出土状態
	(2)Ⅱ区築地状遺構周辺の遺物出 土状態(北から)	図版25	(1)Ⅲ区全景(西から) ①
図版 9	ユハ思スロス 37 (1)Ⅱ区築地状遺構周辺の遺物出 土状態(西から)		(2)Ⅲ区流路内遺物出土状態
	(2)Ⅱ区築地状遺構周辺の遺物出 土状態(北から)	図版26	⑴Ⅲ区調査風景
図版10	(1) II 区築地状遺構東側(J−4区) 布目瓦出土状態		(2)Ⅲ区全景(北から)②
	(2)Ⅱ区築地状遺構東側(J-4区) (2)五日五史土状態	図版27	⑴Ⅲ区遺物出土状態
図版11	11日		(2)Ⅲ区全景(東から)③
	(2) II 区 (J — 5 · I — 5) 布目瓦 出土状態	図版28	⑴Ⅲ区流路内遺物出土状態
図版12	(1)Ⅲ区瓦出土状態		(2)Ⅲ区流路内遺物出土状態
	(2)Ⅲ区瓦出土状態	図版29	複弁蓮花文軒丸瓦
図版13	(1)Ⅲ区発掘作業風景	図版30	鬼面文軒丸瓦
	(2)Ⅱ区近景	図版31	鬼面文軒丸瓦
図版14	(1) I 区(J —12) 瓦出土状態	図版32	鬼面文軒丸瓦・単弁蓮花文軒丸瓦
	(2) II 区(M-9) 瓦出土状態	図版33	均平唐草文軒平瓦・圏文軒平瓦
図版15	(1)Ⅲ区井戸状遺構調査風景	図版34	平瓦・丸瓦(平行叩き文 [類)
	(2)Ⅱ区井戸状遺構①(西から)	図版35	平瓦(平行叩き文 [類)
図版16	(1) Ⅲ 区井戸状遺構断面(A —Á)	図版36	平瓦(/ Ⅲ類)
	(2) Ⅱ区井戸状遺構内礫群	図版37	平瓦(平行叩き文Ⅲ類)
図版17	⑴ II 区井戸状遺構②	図版38	平瓦(/ Ⅳ類)
	(2)Ⅱ区井戸状遺構③	図版39	平瓦(/ Ⅳ類)

図版40	平瓦(/ IV類)	図版46	I・II 区出土土器(土師器・須恵器・黒色土器)
図版41	平瓦(格子目叩き文Ⅲ類)	図版47	II 区出土土器(須恵器)
図版42	平瓦(〃 文Ⅲ類)	図版48	Ⅲ区出土土器 (土師器・須恵器)
図版43	平瓦(部分格子目叩き文)	図版49	Ⅲ区出土土器 (須恵器)
図版44	丸瓦(無文)	図版50	Ⅲ区出土土器(須恵器)
図版45	軒平瓦	図版51	造瓦に関する痕跡

挿 図 目 次

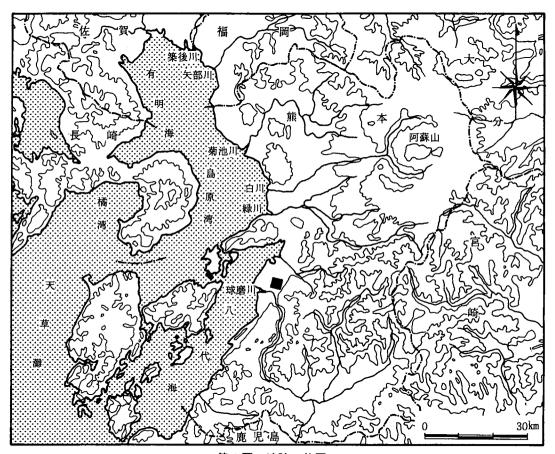
第1図	遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1	第27図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅲ・Ⅳ類)…	50
第2図	興善寺馬場遺跡及び九州縦貫道 関連遺跡位置図	2	第28図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅲ・Ⅳ類)…	51
第3図	興善寺廃寺伽藍復原図 7	′ ~ 8	第29図	平瓦実測図(平行叩き文](類)	52
第4図	Ⅱ区P7-P8土層断面図·············	10	第30図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)	53
第5図	興善寺馬場遺跡調査区全図	12	第31図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)	54
第6図	Ⅱ区遺構分布図13	3~14	第32図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)	55
第7図	Ⅱ区遺構断面図······	15	第33図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)	56
第8図	Ⅱ区築地状遺構実測図	17	第34図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)	57
第9図	Ⅱ区井戸状遺構実測図(1)	18	第35図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)	58
第10図	Ⅱ区井戸状遺構実測図(2)	19	第36図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)	59
第11図	II 区中世墳墓配置図······	20	第37図	平瓦実測図(格子目叩き文Ⅲ類)	60
第12図	中世墳墓出土土器実測図	21	第38図		61
第13図	中世墳墓出土状態	22	第39図	平瓦実測図(斜行格子目叩き文 縄目叩き文Ⅰ・Ⅱ類)	62
第14図	Ⅲ区遺構分布図······	24	第40図	平瓦実測図(無文)	63
第15図	Ⅲ区流路内遺物出土状態実測図	25	第41図	平瓦実測図(無文)	64
第16図	Ⅲ区掘立柱建物群実測図	26	第42図	平瓦実測図(部分格子文)	65
第17図	複弁蓮花文軒丸瓦実測図	28	第43図	丸瓦実測図(平行叩き文Ⅰ・Ⅲ類)…	66
第18図	複弁蓮花文軒丸瓦・均正唐草文 軒平瓦実測図	29	第44図	丸瓦実測図(平行叩きⅣ類)	67
第19図	単弁蓮花文軒丸瓦実測図	31	第45図	丸瓦実測図(無文)	68
第20図	鬼面文軒丸瓦実測図	32	第46図	丸瓦実測図(無文)	69
第21図	軒丸瓦周縁部実測図	34	第47図	丸瓦(無文)·土管実測図	70
第22図	圈文軒平瓦実測図	37	第48図	特殊な手法をもつ平瓦	71
第23図	平瓦実測図(平行叩き文 [類)	46	第49図	須恵器坪蓋口縁部模式図	100
第24図	平瓦実測図(平行叩き文 [類)	47	第50図	須恵器高台付坪底部模式図	
第25図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅲ類)	48	第51図	I区出土土器実測図(土師器・須 恵器)	
第26図	平瓦実測図(平行叩き文Ⅲ・Ⅳ類)…	49	第52図	I 区出土土器実測図(土師器・須 恵器・黒色土器)	115

第53図	Ⅱ区出土土器実測図(土師器)	116		第64図	Ⅲ区出土土器実測図(須恵器) 127
第54図	Ⅱ区出土土器実測図(土師器)			第65図	Ⅲ区出土土器実測図(須恵器) 128
第55図	Ⅱ区出土土器実測図(土師器·黒 色土器)	118		第66図	Ⅲ区出土土器実測図(須恵器) 129
第56図	Ⅱ 区出土土器実測図(土師器·須 恵器・黒色土器)	119		第67図	Ⅲ区出土土器実測図(須恵器) 130
第57図	Ⅱ区出土土器実測図(須恵器)	120		第68図	Ⅲ区出土土器実測図(須恵質器) 131
第58図	Ⅱ区出土土器実測図(須恵器)	121		第69図	弥生式土器・越州窯陶磁実測図 132
第59図	Ⅱ区出土土器実測図(須恵器)	122		第70図	瓦器・陶磁器実測図 133
第60図	Ⅱ区出土土器実測図(須恵器)	123		第71図	瓦製円盤実測図 134
第61図	Ⅱ区出土土器実測図(須恵器)	124		第72図	軒丸瓦製作技法模式図(技法 I) ·····139
第62図	Ⅲ区出土土器実測図(土師器)			第73図	軒丸瓦製作技法模式図(技法II) ·····140
第63図	Ⅲ区出土土器実測図(土師器·黒 色土器)	126		第74図	軒丸瓦製作技法模式図(技法III) ·····141
	_		—	, ,	
	表		目	次	ζ
第1表	地区ごとの瓦出土数比較表	. 30		第22表	丸瓦観察表(2)
第2表	模骨痕の有無			第23表	丸瓦観察表(3)······ 88
第3表	糸切痕の有無····································			第24表	丸瓦観察表(4)······ 89
第4表	粘土継目の有無			第25表	丸瓦観察表(5)······ 90
第5表	平瓦の分割角度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			第26表	I 区出土黒色土器計測表······ 92
第6表	平瓦布目経緯比較表			第27表	須恵器蓋坏(蓋)計測表········· 97
第7表	平瓦観察表(1)			第28表	II 区須恵器坏蓋法量比較表······· 98
第8表	平瓦観察表(2)			第29表	
第9表	平瓦観察表(3)			第30表	II 区須恵器环蓋法量比較表 98 須恵器环蓋計測表 99
第10表	平瓦観察表(4)······			第31表	須恵器环身法量比較表······101
第11表	平瓦観察表(5)			第32表	須恵器坏身計測表101
第12表	平瓦観察表(6)			第33表	須恵器高台付环・城法量比較表102
第13表	平瓦観察表(7)			第34表	·
第14表	平瓦観察表(8)			第35表	須惠器皿計測表······103
第15表	平瓦観察表(9)			第36表	土師器鎏計測表······104
第16表	平瓦観察表(10)			第37表	Ⅲ区土師器环法量比較表105
第17表	平瓦観察表(11)			第38表	Ⅲ区土師器計測表105
第18表	平瓦観察表(12)			第39表	Ⅲ区須恵器环比較表107
第19表	平瓦観察表(13)			第40表	Ⅲ区須恵器高台付坏・高台付城・ 100
	平瓦観察表(14)			第41表	皿法量比較表 瓦製円盤一覧表······111
	丸瓦観察表(1)				Ⅲ区須恵器計測表112
				.,	ATT

第1章 序 説

1 遺跡の位置および環境

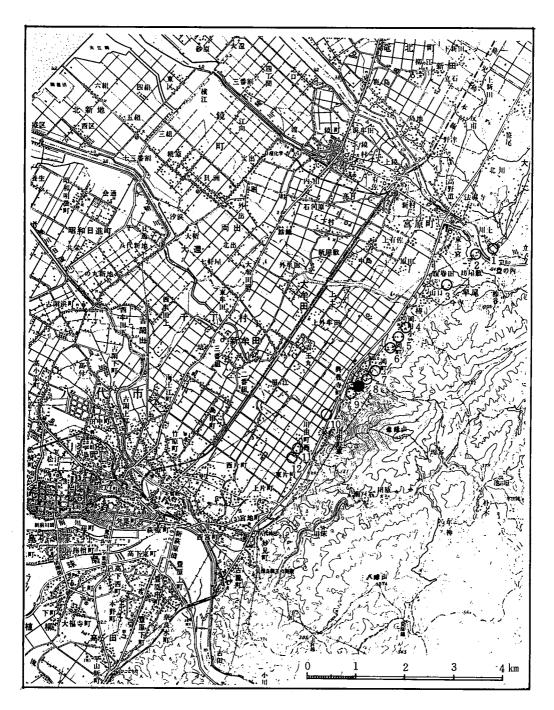
興善寺廃寺は熊本県八代市興善寺町字馬場に所在し、八代市の市街地より北西に約9km、八 代平野のほぼ中央部に位置している。



第1図 遺跡の位置

八代平野は球磨川および下流分流の日置川、前川、南川、さらに平野の東側を限る山地からは、北から谷合川、北部田川、砂川、吉野川、氷川、瀬戸口川、弥勒川、岡谷川、渡場川、大谷川、水無川、敷川内川、大坪川、汐鶴川などの大小河川によって形成された複合三角洲である。寺院址は渡場川の開析作用によって形成された小規模な扇状地の先端部に立地し、今回調査を実施した興善寺馬場遺跡は、この扇状地の中央部すなわち寺院跡の東側に隣接した一帯を指し、また寺域の一部を包括する遺跡の総称である。

八代平野の干拓はこれらの河川の運ぶ多量の土砂によって自然に陸化した三角洲を基礎とし



第2図 興善寺馬場遺跡及び九州縦貫道関連遺跡

●興善寺馬場遺跡

- 1. 立神ドトク遺跡
- 2. 平原瓦窯址
- 3. 野寺遺跡
- 4. 境遺跡・墳古墳群 8. 興善寺四郎丸遺跡
- 5. 平原野中遺跡
- 6. 玉泉寺古墳群・古塔碑群
- 7. 清水古墳群
- 9. 興善寺志水遺跡
- 10. 車塚古墳
- 11. 川田京坪遺跡
- 12. 川田小筑遺跡

て推し進められたが、その大部分は慶長年間以降の開発によるものである。したがって古代八代平野の山麓線からの巾はわずか約1.5kmで、現在の八代平野の約30%にみたない狭小な平野であった。したがって、八代平野における先史古代遺跡の立地は、こうした河川の活動と三角洲の自然陸化現象に密接な関連をもっていたものと思われる。

興善寺は従来より、奈良朝後期に八代郡寺として創建され、寺域167m四方の法起寺式の伽藍配置をもつ当地方最大の寺院と考えられてきた。今は寺域内に天台宗末寺明言院と称して狭い境内に本堂を残しているにすぎない。境内には、塔の心礎や礎石が残り、付近一帯には屋根瓦や土器類が数多く散布するが、往古の栄華は偲ぶよしもない。

2 調査にいたる経過

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道鹿児島宮崎線建設計画に先立ち、昭和46年度国庫補助事業として、松橋一八代間の文化財関係分布調査を実施した。その報告(『文化財分布調査報告書』)によると、33遺跡が確認され、八代興善寺町字馬場および志水にかけてを興善寺跡として一括して記載されている。その後路線は、寺域の南東部コーナーを南北に通るルートが決定され、昭和52年、日本道路公団の委託をうけ熊本県教育庁文化課が調査を実施することとなった。なお遺跡の範囲が南北に長く、面積も広いため小字界によって区分し、寺域に近い地区を興善寺馬場遺跡、南側を興善寺志水遺跡と呼称することとした。のちに興善寺馬場遺跡の北側一帯にも遺物の散布を確認したため、この地区を興善寺四郎丸遺跡と呼称した。したがって本来的には別個の遺跡として区切ることは困難であり、いわば興善寺廃寺関連遺跡群といった性格のものであることを明記しておかなくてはならない。

3 調査の組織

発掘調査は熊本県教育庁文化課の直営で実施し、調査の組織は下記のとおりである。

調 査 主 体

熊本県教育委員会

調査責任者

岩崎辰喜(文化課長)

境信三郎 (元文化課長)

合志太助 (元文化課長)

調査総括

隈 昭志(文化課文化財調査係長)

調査員

野田拓治(文化課学芸員)

倉原謙治 (文化課調査員)

調査指導

松本雅明 (熊本大学文学部名誉教授)

白木原和美 (熊本大学文学部教授)

三島 格(元福岡市立歴史資料館長)

甲元真之(熊本大学文学部助教授)

小田富士雄(北九州市立歴史資料館長)

人骨調査

内藤芳篤(長崎大学医学部教授)

松下孝幸(同助手)

調査事務局

田辺宗弘(文化課長補佐)

真弓袈裟勝 (元文化課長補佐)

前田利郎 (元文化課長補佐)

村上孝司(文化課管理係長)

松本 巽(元文化課管理係長)

整 理

上野辰男 (文化課主幹)

調査協力

日本道路公団福岡建設局(松橋工事事務所)

八代市教育委員会

日隈正道 (明言院住職)

中山清美(熊本大学文学部研究生)

池田栄史(国学院大学学生)

森山栄一(国学院大学学生)

中原幹彦(国学院大学学生)

4 発掘調査の経過

昭和46年度に実施した九州縦貫自動車道(松橋一八代間)文化財関係分布調査を受けて、昭和51年4月日本道路公団と熊本県との間に、文化財調査に関する委託契約が締結された。翌昭和52年3月6日、調査担当者で調査予定地を踏査する。3月9日、熊本県文化財収蔵庫から調査器材を現地に運搬した。翌10日、現地での調査を開始した。まず調査地の現況を写真で記録し、早速地形測量を開始した。作業は断続的に継続し、完了したのは4月5日であった。

3月10日~4月27日。 I 区に一辺 4m 四方のグリッドを設定した。グリッド設定作業と同時に、この地区での層序確認のピット(I-A) 掘り下げをすすめたが、厚く堆積した土砂に阻まれて、作業は難行した。 3 月22日、何ら成果をあげることもできぬままにグリッド法による調査を一応中断し、地形等を考慮したトレンチを新たに2 γ 所(I-B、I-C)に設けた。 4 月15日、さらに2 γ 所(I-D、I-E)を面的に拡げる作業を続けたが、やはり特筆すべ

き成果をあげることが出来なかった。しかし各地区の表土層および厚く堆積した土砂からは土師器、須恵器、瓦、瓦器などが出土した。4月27日、この地区の調査を一応中断して、次のⅡ区へ移動した。

4月28日~5月16日。 II 区の調査を開始した。調査地区には建物の基礎・廃材等が散乱していたため、重機等でこれらを取り除いた。まず全体を4区に分け発掘を開始した。調査地区は明治末年頃宅地として造成されたもので、東半分を切り取り、西半分は盛土され、西端は石垣が築かれていた。発掘は硬くつき固められた盛土と、無数の攪乱により難行した。5月16日、II 区の調査を一応中断し、III 区へ移行した。

5月16日~10月3日、Ⅲ区の調査を実施した。Ⅲ区はⅢ区より約10m 低い蜜柑畑で、調査区の東側に沿って南北方向のトレンチを設定した。トレンチ北側に東西方向に走る溝状の遺構を、さらにその周辺部に柱穴群を検出した。溝状遺構には、土師器・須恵器などの日常雑器類に加えて、瓦なども出土した。溝状遺構は人為的な遺構ではなく、むしろ自然流路の一部と考えられた。また、流路に一部重復して掘立柱建物址を検出した。10月3日には、この地区のすべての作業を終えた。

10月5日~11月10日、再度 II 区に移動して調査区の掘り下げを開始した。4月~5月段階での調査は II 区の北側を中心に発掘を行なったが、特筆すべき成果を上げることが出来なかった。しかし昭和34年の松本雅明氏らの調査によって復元された興善寺廃寺の伽藍配置によれば、築地線南東部コーナーが II 区の南西部にあたっていて、この復原が正しければ、何らかの遺構が残存するものと思われた。松本氏の復原図をもとに、特に II 区の南西部を中心とした調査を継続した。10月25日にはトレンチの下部に布目瓦や土師器・須恵器を多量に含む包含層を確認した。地表面から包含層上面まで最大約2mを測り、大半は宅地を造成する際の盛土であった。まず機械を使用してこれらの盛土を除去した。さらに全体に1m四方のグリッドを設定して包含層の掘り下げを行なった。10月24日~28日、長崎大学内藤芳篤教授に中世墳墓の調査を依頼した。II 区の調査を再開して1ヶ月が経過した11月15日、ついに築地状遺構を発見した。さらに井戸状遺構等を検出し、調査区の様子がほぼ把握できるようになった。

11月11日~12月10日、各遺構の発掘をほぼ終えて、実測作業を開始した。特に築地状遺構の西側一面に出土したおびただしい量の瓦や土器類は、一時期の包含層中に出土したもので、包含層はさらに南側に隣接するⅢ区の流路へ連続していることを確認した。また、西側の傾斜面にも確認され、調査区外へ続くものと思われた。

12月11日~28日、各遺構の実測および調査区全体の実測を行なった。実測作業を終了したのは28日午後5時を過ぎ、遺物の取り上げを行ない、発掘のすべての作業を終る頃には、あたりはすでにくらやみと化していた。はるか遠くには八代の市街地であろうか無数の光線が夜空を突き上げていた。

5 興善寺廃寺の調査・研究史抄

興善寺廃寺は、旧八代郡竜峯村大字興善寺字馬場に所在するが、この地名も興善寺に由来するものである。昭和36年3月1日、竜峯村と八代市の合併によって、八代市興善寺町と改名され現在に至っている。

興善寺に関する文献のうち古代のものについては皆無である。当時を物語るものとしては、 現在の明言院に本尊としてまつられている木造毘沙門天立像(国指定重要文化財)が古い興善 寺の唯一の遺作として残るのみである。その後の文献上に興善寺に関する記事が現われるのは、 明和9年(1972)の『肥後国誌』が最初であり、この間の興善寺に関する事情を知ることはで きない。

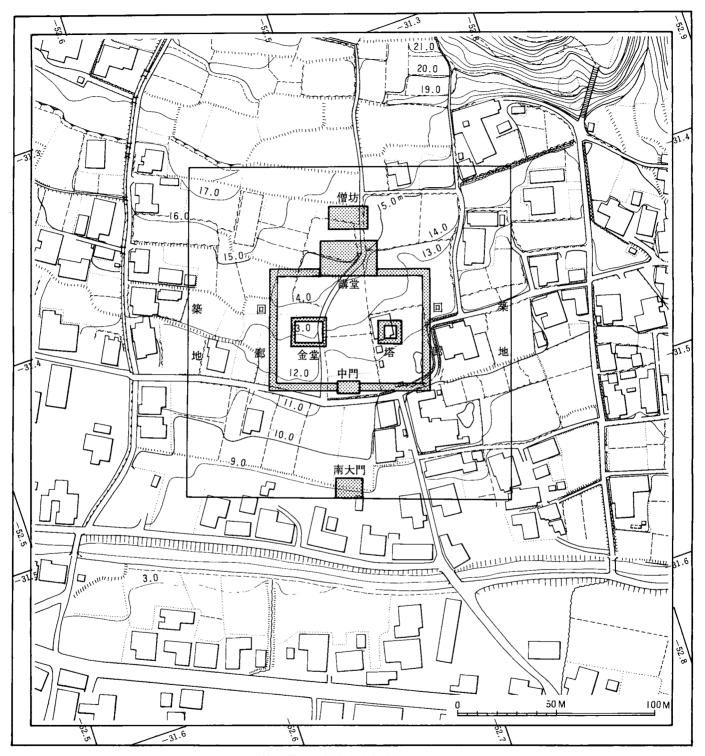
「肥後国誌」には

天台教刹、高倉帝治承二年小松内府重盛領国時、肥後守貞能代官国中七大伽藍建立、 是其一也。重盛位脾当寺廃迹観音堂有。其銘小松内府浄蓮大居士有、^{此位碑、享保年間ョ} ^{如何カレ} 故ニヤ

すなわち、興善寺は治承二年(1178)に八代荘が平清盛の大功田となり、一族の肥後守平貞能の時に国中に建立したという七大伽藍の一つ天台宗の寺院として再興されたとある。その後、名和・相良氏の援助をうけつつ、天正末頃、小西行長領地の時に焼亡したと伝えている。又「肥後国陳迹略志」にも同様の記事の他に、天正末焼亡ののち草堂を建て、本尊「千手観音」を安置したが、その後明言院秀盛が堂守となり、子孫が永く続いたという。

昭和34年、竜峯村は八代市との合併に先立ち村史の編纂を立案し、この事業の一環として、 興善寺廃寺の発掘調査が実施された、報文によれば、遺跡付近の地形や残存する礎石などから、 法起寺式の伽藍を想定して、寺域内の数ヶ所にトレンチを設定した。この結果①中門址と推定 されるA地点における建物の基壇とみなされる粘土層からなる人為的遺構の検出、②金堂の南 辺にあたるB地点で基壇端の石敷の一部とみられる遺構が検出された。③講堂の西端にあたる C地点でB地点同様の石敷が検出され、石敷は粘土で打ち固められていたが上面は不整で軒下 の雨落ちとは考えられず、基壇の端を固めるための地下の遺構と推定し、同時に礎石の根石列 らしきものが検出された。④また講堂の中心より北よりのD地点で礎石の根固め石が1ヶ所で 検出された。また講堂及び僧坊推定地は発掘終了後に、蜜柑を植樹する際に、講堂18ヶ所、僧 坊5ヶ所について礎石ないし礎石の根石らしい遺構を確認した。この結果、講堂は間口5間(唐 尺12・14・14・14・12尺)、奥行4間(唐尺11・12・12・11尺)。僧坊は間口6間(唐尺10尺)、奥 行3間(唐尺10尺)の規模を有していたことを推定している。

以上の4点および講堂・僧坊の復元、さらに塔心礎の存在と塔址の推定、南大門址に推定さ



第3回 興善寺廃寺伽藍復原図

TOY OKOKUJIGYO CO,LTD Compilation in August 1970

Contour interval I Meter
Coordinate system: No. 2
Grid interval 100Meters

れる地点より多量の瓦が出土する事実などから、寺院のプランは、正しい規格で築造されたと仮定すれば、寺域は167m四方すなわち唐尺570尺になると結論づけている。またこうした調査により、従来八代郡の郡家を小川町の正院(正倉院)付近に求める説を踏襲しながらも、興善寺廃寺こそ八代郡の郡寺と考え、なお郡家と郡寺がかなりの距離をもって位置している理由を、山地が海にせまり南北に細長い八代平野の地理的特殊性によるものであると説明している。すなわち、郡の正税を納める建物群である正倉院は、古代の八代平野にあっては必ずしも1ヶ所とは限らず、2ないし3ヶ所に分散されていた可能性を指差したのである。

なお肥後国内における駅馬・駅路については、『延喜式』(新訂増補国史大系)、『和名抄』、『駅路通』等に記載されているが、これらの駅名にはかなりの文字の異同が見受けられる。特に球磨駅以南では、豊向一片野一朽網一佐職一水俣一仁主とつづく幹線と、球磨駅から西に長崎駅(宇土郡不知火町大字長崎付近)一高屋(宇土郡三角町波多付近)に達し、さらに天草諸島・島原半島を経由して肥前への連絡路とする説と、高屋駅を八代郡竜北町高野道付近と考え、豊向駅と片野駅との中間に置こうとする説とがある。特に片野駅は球磨川河口北岸の八代市上駐44

註1. 松本雅明『竜峯村史』および『熊本県文化財調査報告第1集』 1961年3月 註2. これらを比較すると以下のとおりである。

『延喜式』 新訂増補国	(駅馬)	かい 大水	江田	坂本	二重	みとり 蛟稟	高原	蚕養	球磨	長崎	豊向	高屋
利可加强	义 八水 平	· · · 片野	朽網	左 性職	水俣	仁主						
	(伝馬)	大水	江田	•	•		高原	蚕養	球磨	٠	豊向	•
		片野	朽網	左 佐色	水俣	•						
『延喜式』 旧本		大水	江田	坂本	三重	蛟高	鬲原	蚕養	球磨	長崎	豊向	高屋
10.4		片野	朽網	職	水俣	仁主						
『和名抄』 道路類・	高崎本	大水	江田	坂本	二重	蛟稟	高原	蚕養	球磨	長崎	豊向	高屋
	趴石	片野	朽網	御職	水俣	仁主						
『駅路通』		大水	江田	坂梨	二重	蛟稟	高原	蚕養	球磨	長崎	豊向	高尾
		片野	朽網									

註3. 木下良『古代日本の交通路―肥後国―』藤岡謙二郎編 1979年

註4. 志方正和「駅馬・伝馬・烽」『熊本県史』(総説編) 1965年

第2章 遺 跡

1 遺跡の層序

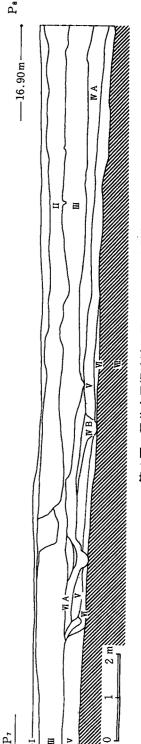
調査地区全体は急な傾斜面で大半が蜜柑畑となっている。発掘前における表土層は蜜柑畑を開墾する際にかなり動いている。特に深掘りしたA-Iグリッドでは、表土層は砂礫を多く含み厚さは約45cm~50cmで、やや西側に傾斜している。第2層は石灰岩や砂礫を多く含む暗褐色土層で、地表から約4.5mの面まで掘り下げたが分層困難で、さらに続くものと思われた。したがって第II層は厚さ4mまでを確認したにとどまった。

第 I 層は、各時期の遺物が含まれているが、特に江戸時代後半 以降の遺物を多く包含する土層である。

第II層は、ほぼ全体に大小の石灰岩を多量に含み、この間の黒褐色土層中には奈良時代〜室町時代の遺物を確認した。上部から下部に至るまで、各時期の遺物が混在しており、少なくとも室町時代以降の再堆積土層であり、いわゆる山津波のような自然的要因によるものであろうと考えられた。I-B, I-CグリッドにおいてもI-Aグリッドと同様の状況であり、第II層が極めて軟弱で、災害防止の観点からも必要以上の掘り下げは行なわなかった。

Ⅱ地区全体は民家跡(旧村上氏宅)で、発掘前の地表はほぼ水平面を保っていた。基本層序は、第Ⅰ層表土(腐植土)、第Ⅱ層黄褐色粘質土(宅地として造成する際の盛土)、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層黒色土、第V層黄褐色粘質土、第Ⅵ層暗褐色砂質土、第Ⅵ層赤褐色土(地山)である。

第 $I \cdot II$ 層は、宅地の造成が旧地主村上氏によると明治35年頃 ということで、両層ともこの時期以降の土層であることは確実で ある。第3層はA-1第2層とまったく同一の土層で、ここでは



比較的小型の石灰岩を多く含み、奈良時代~室町時代の遺物を多く包含している。やはりA地区同様、自然的な要因による再堆積土層である。このトレンチ内で検出した土址墓は、この層より掘り込まれたもので、土址下面は第V層に達している。第IV層は多量の布目瓦・土器類を包含する奈良時代後半期の土層で、本遺跡の中心をなす包含層である。第V層は包含する遺物と遺構の関係から、削平・盛土によって形成された整地層で、やはりその形成時期は奈良時代後半期である。第V層は古墳時代の遺物を包含する土層で、この土層は部分的にしか確認できなかった。第VI層は地山層で西側に向かうにしたがいゆるやかに傾斜している。

C地区も基本層序はB地区の場合と同様であった。

2 遺 構

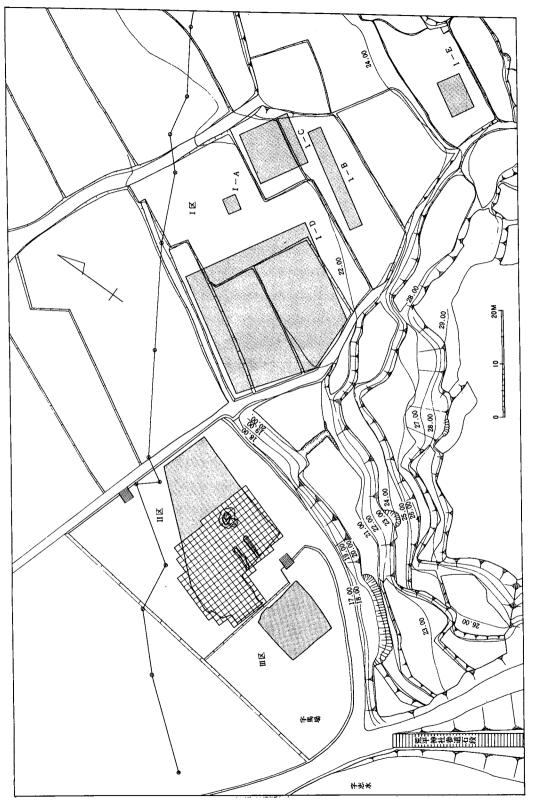
I区の概要

I 区は竜峰山に源を発す渡場川が運ぶ多量の土砂により形成された扇状地のほぼ中央部に位置している。先に「遺跡の層序」の頃(第2章第1節)で述べたように、渡場川の通常の活動に加え、数度にわたる大規模な山津波的現象により、厚い土砂に覆われていた。第4図に示したように、I-A、I-B、I-Cの各トレンチ、およびI-D、I-Eを面的に拡げて遺構等の検出作業を実施したが、人為的な遺構は皆無であった。なお以上の各トレンチおよび各調査地点から出土した主な遺物は、第14図及び第15図のとおりである。

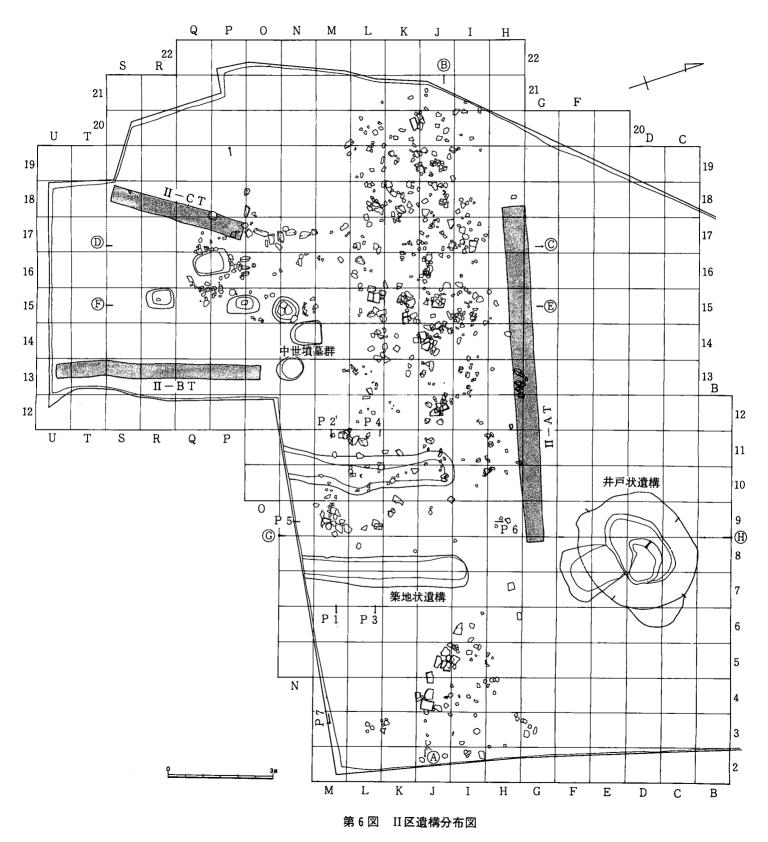
Ⅱ区の概要

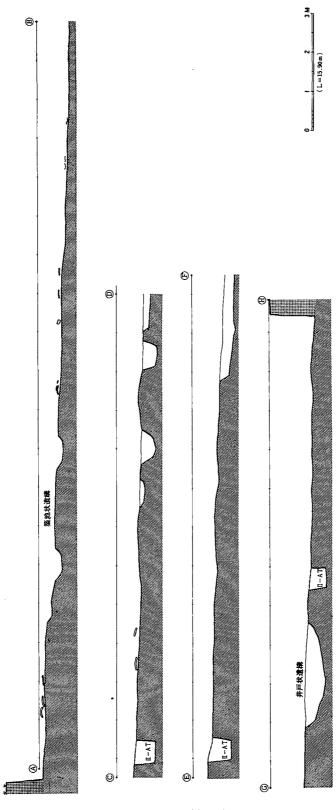
Ⅲ区は I 区の南西側に隣接し、東西・南北とも約350m 四方の民家の跡地(九州縦貫道建設に伴い移転解体。図版 2)である。建物解体後、屋敷内に散乱する廃材等を処理したのち、調査地区内を 4 地区に区分し掘り下げた(図版 3 の(2))、しかし宅地を造成する際の厚くしかも硬い盛土に覆われていて人力による掘り下げは困難を極めた。その後機械力により盛土の除去作業を行ったが、Ⅲ区北側部分は包含層が完全に削平され地山面にも何ら遺構を確認することが出来なかった。一方南側では、Ⅲ区 P 7 − P 8 部分の深掘りにより盛土下部に遺物包含層を発見するに至って、第 4 図のような 1 m 四方のグリッドを設定した。

グリッド名の呼称にあたっては、第5図に示したとおり縦軸を北側からA・B・C~U、横軸を東側から1・2・3~22の順に呼ぶことにした。各グリッドはそれぞれ任意に振り下げを行ない、最終的には全面発掘に至った。その結果、築地状遺構、掘立柱建物址、井戸状遺構、中世墳墓および築地状遺構に関連すると考えられるおびただしい量の布目瓦や須恵器・土師器



第5回 與善寺馬場遺跡調査区全図





第7図 II区断面図

などを検出した。

なお第5図に示した遺構のうち、井戸状遺構は第3図におけるⅧ層中で、他の遺構はすべて Ⅴ層上面において検出したものである。

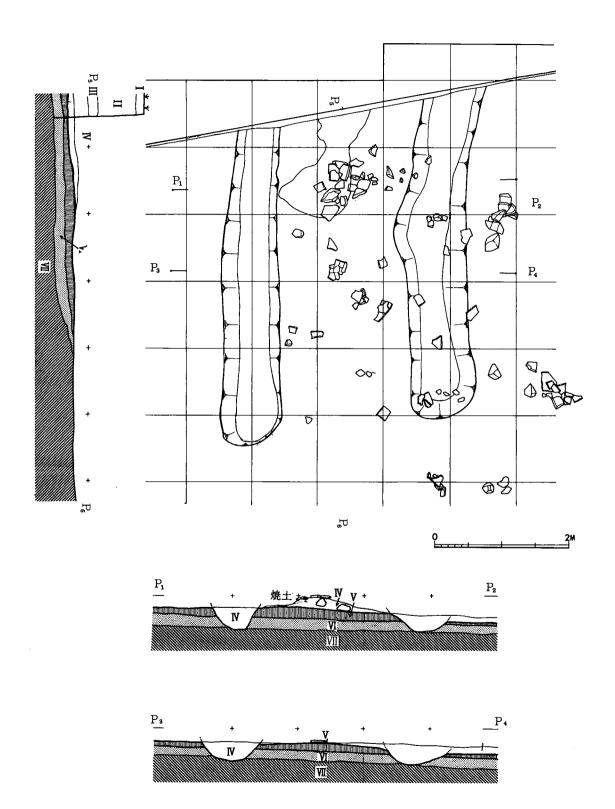
築地状遺構(図版8の(1)・第3図・第7図)

築地状遺構はⅢ区の中央から南よりの地点で検出した。2条の溝とこれに囲まれた土塁状の遺構からなり、東側の溝は長さ約4.7m、巾0.64~0.95m、西側の溝は長さ約4.8m、巾0.84~1.10m さらに溝の中軸線の方位はN−21°ーEであった。溝はV層上面で確認し、基底部は一部 WM層に達していた。溝の断面形は一定しないが、おおむね丸味をもった逆台形を呈している。溝に囲まれた土塁を縦方向に切断した第7図P₅−P₅では、各層ともP₅からP₅に向って、かなりの傾斜をもっていて、P₅から1.53mの地点でIV層が、さらに3.5mの地点でV・VI層がいずれも消滅している。したがって溝の基底部も北側に移行するに従って序々に浅くなっており、幾たびかの土地造成により削平消滅したもので、本来はさらに北側へ続いていた可能性が強い。一方第3図は、Ⅲ区の横断面における層序と築地状遺構との関連を示したもので、これによると WM層(地山層)は山側のP₁より約2.5mの地点で段差を生じ、さらにこの地点より平野側では、3ないし4枚の土層が互層となって堆積している。V層は強くつきかためられて黄褐色粘質土Ψ層と極めて類似していることから、WM層を主成分とする再堆積土と考えられる。 VM層は砂質土で、出土遺物から古墳時代より奈良時代初頭にかけての包含層と考えられる。すなわちV層は削平・盛土によって形成された整地層であり、築地状遺構も整地の際かあるいは整地後に構築されたものであろう。

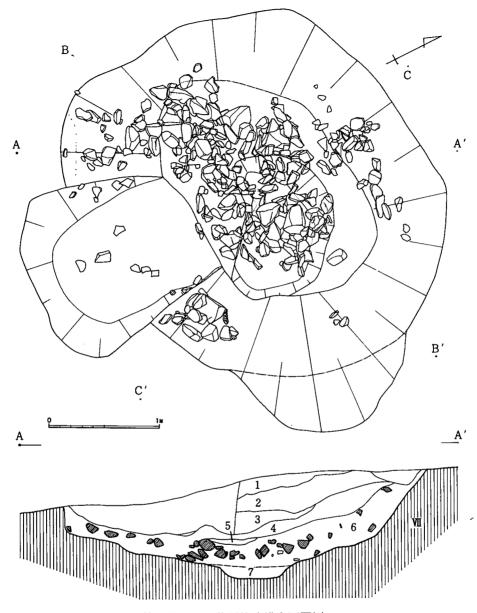
築地状遺構およびさらに西側一帯を中心として出土したおびただしい量の瓦や土器類は築地の土塁部分を構築する際に、意図的に敷き込んだものか、何らかの原因により土塁の崩壊とともに流れ出て散乱したものと考えられる。第7図P₁−P₂で確認したとおり、土塁のほぼ中央部には礫とともに平瓦の大形破片が密に敷きつめられた状態で残存していることも、こうした仮設を裏付ける根拠の一つとしてあげることができる。また、これら土塁上に残存した瓦を中心としてかなり厚く焼土が残っており、瓦自体も二次的な火を受けてかなり焼土化していた。瓦の状態や出土状況の観察から、現位置でかなり強く火を受けたものと推察された。興善寺は『肥後国誌』によると、平安時代終り頃焼失したと考えられているが、もしこのことが事実であれば、焼失の事実および年代を裏付ける上で重要な発見といわなければならない。

井戸状遺構

Ⅱ区築地状遺構北端からさらに北に約4.5m、すなわちD-8区を中心とする地点に井戸状遺構を検出した。当初のD-4区からD-12区にかけて設定した巾50cmのトレンチによって確認したものである。遺構は南側と西側の一部を攪乱されていたが、全体的なプランは南北約3.0m、東西3.7mで、やや東西に長い楕円形を呈している。遺構はM層上面で確認された(第8図)



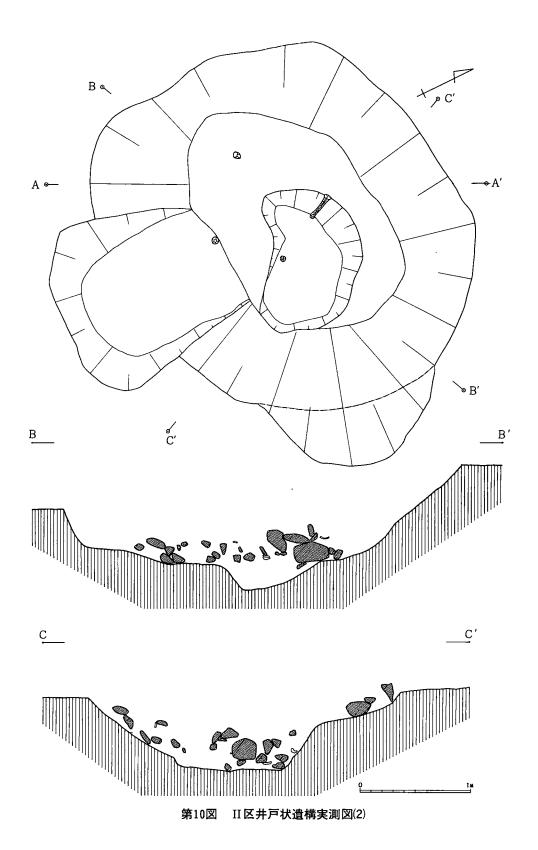
第8図 II区築地状遺構実測図



第9図 II区井戸状遺構実測図(1)

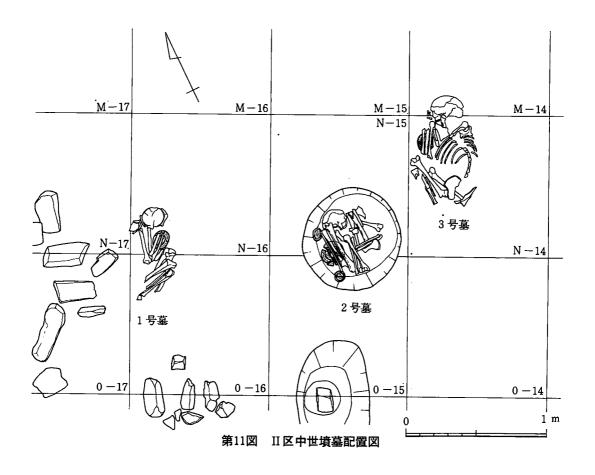
もので、おそらくVI層のある面から掘り込まれたものであろう。切り込み面の最も高い部分から土壙基底部までの深さは約1.0m を測った。土壙上面はかなり削平されているので旧状は1.0m以上の深さがあったものであろう。

土壙は2段に掘り込まれていて、土壙内埋土は第9図のとおり、1~7の各土層の堆積状況



を観察できた。1層は黄褐色粘土層でV層と極めて類似している。2・3層は黄褐色土層で特に2層は1層と同じ粘土がブロック状に混入している。4層もやはり黄褐色を呈する粘質土で、1~3層に比較するとかなり腐植性を増している。5層は暗褐色の砂質土のブロック状堆積層で、4層の残位層である。6層は黒褐色粘質土層で、大小の角礫(石灰岩・花崗岩)からなる石組みを検出し、下部は7層から土壙基底面にまで達していた。

土壙内の石組みは、南側の一部を除くとほとんど旧状をとどめておらず、石組みの崩壊により石材が井戸内に落ちこんでいた。崩壊した石組み内には土師器 (第19図49)、須恵器 (第19図50・51・52) とともに、猪 (図版20の(1))、馬歯 (図版20の(2))、さらに鹿下顎骨などの骨が出土した。遺物はすべて石組み中央に集中し、上層の1~4層には土師器・須恵器の細片が少量含まれていた。特に石組み中央の6層から出土した須恵器坏および土師器小形丸底土器がこの遺構の埋没した時期を示しているものと考えられる。



中世墳墓群

II 区のM~N-14~16区の範囲内に3基の土壙墓を検出した。
1 号墓

N-16区からO-16区およびN-17区の一部にかけての地点で 検出した。人骨の保存は比較的良好であったが、墓壙の基底部は N層下部でV層に達しておらず、したがって墓壙の形状を確認す ることが出来なかった。埋葬法は頭を北側に向けた左側臥屈葬で、 上腕骨直下に土師器糸切り皿1点が副葬されていた。被葬者は付 論1の所見から熟年女性と推定される

2 号墓

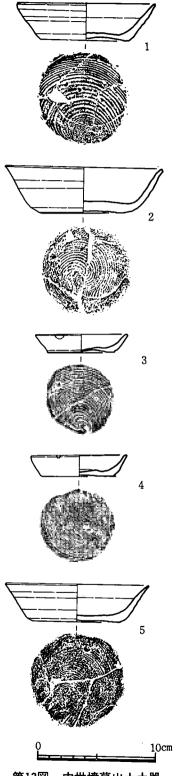
M-15区からM-14区の境に検出した。墓壙を確認した地山面 (第V層)での平面形は、長径0.73m、短径0.71mのほぼ正円形 で、深さ最大0.15mを測った。墓壙の中央部に棺を安定させる為 の砂岩角礫3個をほぼ面をそろえて置いている。

埋葬法は頭部を北に向け四肢骨を強く折り曲げた座臥屈葬で、大腿骨直下に土師器糸切り皿1点、同小皿2点の計3個体副葬されていた。以上の土器のうち3・5はほぼ配石に密着した状態で出土したが、土器の下面に板状の木質片が付着していた。また4は配石上面のレベルより、さらに低い位置から出土したが、これは棺の腐食に伴って下部に落ちたものか、あるいは当初から棺外に副葬されていたものであろう。以上の調査所見から、棺は桶状のものを使用していたものと考えられ、規模も墓壙の大きさおよび人骨・副葬品の出土状況から、桶の底径が約60cm程度のものであったと考えられる。

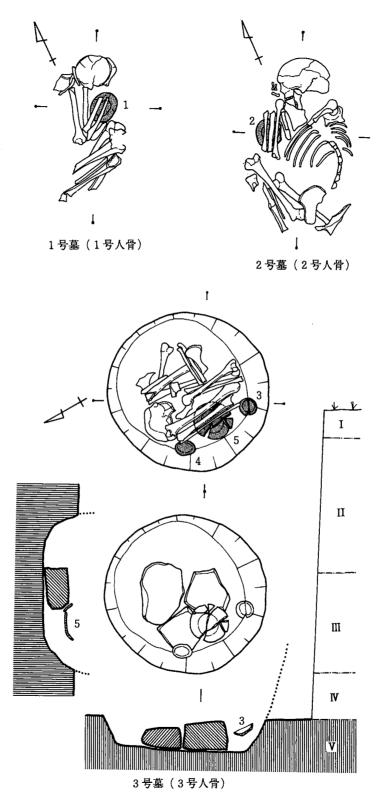
なお被葬者は付論1の所見から熟年男性と推定される。

3 号墓

2 号墓の北東部に隣接したM-14区からN-14区にまたがる地 点に検出した。1 号墓の場合と同様の状況により人骨の保存は良 好であったが、墓壙は確認することが出来なかった。埋葬法は頭 部を北に向けた右側臥屈葬で、上腕骨直下に土師器糸切り皿1個 体が副葬されていた。



第12図 中世墳墓出土土器 実測図(¹/₃)



第13図 中世墳墓出土状態 (図中の数字は第11図の遭物番号と一致する)

被葬者の性別・年令は付論1の所見よりり熟年男性と推定されている。

以上各墳墓より出土した人骨に関する詳細については付論「興善寺馬場遺跡出土の中世人骨」 を参照されたい。

掘立柱建物址 (第16図)

I区の南西部隅、すなわち前述した中世墳墓群の西側に隣接した位置に柱穴掘形3を検出した。掘形の規模は確認した地山面 (V層) でP₁が縦0.92m、横0.52m、P₂で縦0.68m、横0.56mを測り、平面形はいづれも丸みをもった長方形を呈する。P₁では掘形中央に柱痕が残り底面に角礫を敷いている。これらの柱穴はさらに南側のⅢ区に連続していると推定されたが、後述するⅢ区の調査所見では検出されなかった。

掘形内からの出土遺物は皆無であったが、埋土の状況から第Ⅳ層形成以前、すなわち第Ⅱ層 あるいは第Ⅲ層のある部分から掘り込まれたもので、掘形の構造・形態から、Ⅲ区の掘立柱建 物址とほぼ同時期のものであろう。

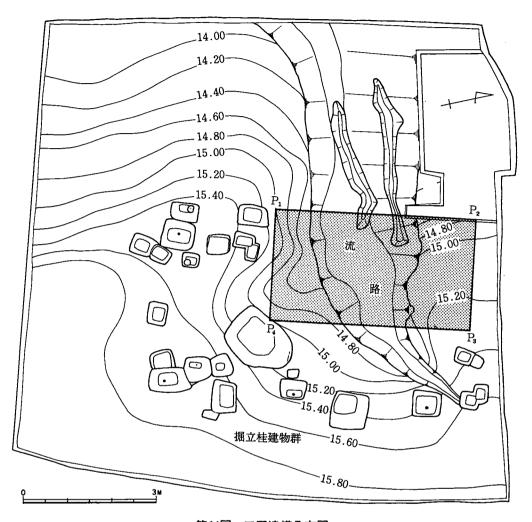
Ⅲ区の調査概要

Ⅲ区では、自然的に形成された流路の跡と掘立柱建物群を検出した。流路は調査区の北西部コーナーからやや蛇行しながら西走し、西側に移行するにしたがって深く巾も広くなっている。一方基部では浅く巾も急に狭くなり自然に消滅している。掘立柱建物址は、流路に一部重複し棟行をほぼ西方向にとっている。建物の西端からさらに西側は地山面が急に低くなり、この間の比高差約1.4mを測った。流路はある程度埋った段階で人為的に整地が行なわれていた。流路と掘立柱建物が重複するP₂5およびP₂6(第16図)では、この整地層上面から掘り込まれていた。

流 路(第14図)

流路は調査区の北西部コーナーに発し、やや蛇行して西へ走っている。流路の断面形は浅い U字形をなし、流路内外は流水によっていたるところひだ状の溝が刻まれ、この溝内には多く の礫が流れ込んでいる。出土遺物の多くは、調査区の北東側から運ばれ、これら礫群のしがら みに止まった状態で出土している。

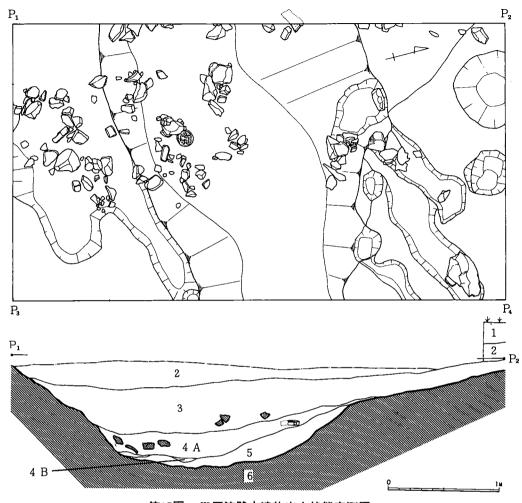
流路のうちP₁→P₂→P₃→P₄に囲まれた範囲は最も多く遺物が出土し、しかも流路の層序が良好な状態で観察できた。P₁-P₂断面では、1層は表土(耕作土層)、2層は黄褐色粘質土で人為的に流路を埋めた整地層である。3層以下は自然堆積による互層をなしている。3層は暗褐色粘質土層で大小の角礫(石灰岩・花崗岩・砂岩)とともに少量ではあるが土師器・須恵器・瓦などを包含している。4A層は黒褐色粘質土層で、Ⅲ層と同様の礫を多く含んでいて、均正唐草文軒平瓦(第18図6)、および鬼面文軒丸瓦(第20図11・13)、複弁8葉軒丸瓦(第17図1~3)、など出土遺物の大部分はこの層から出土したものである。4B層は黄褐色砂層で部分



第14図 Ⅲ区遺構分布図

的に認められ4A層の残位層である。5層は4層に極めて類似するが、砂粒分が多い。鬼面文軒丸瓦(第20図11)は、5層下部から出土したものである。以上の各層のうち2層は土師器・須恵器などとともに近世陶磁器片を包含しているので、江戸時代以降の整地層と考えられる。3層は上述した遺物の他に庭部糸切り離しの土師器小皿等を含むので中世以降の堆積層であろう。4層以下については包含する遺物の年代差は認められない。これらの層序をⅡ区の場合と比較すると次のようになる。

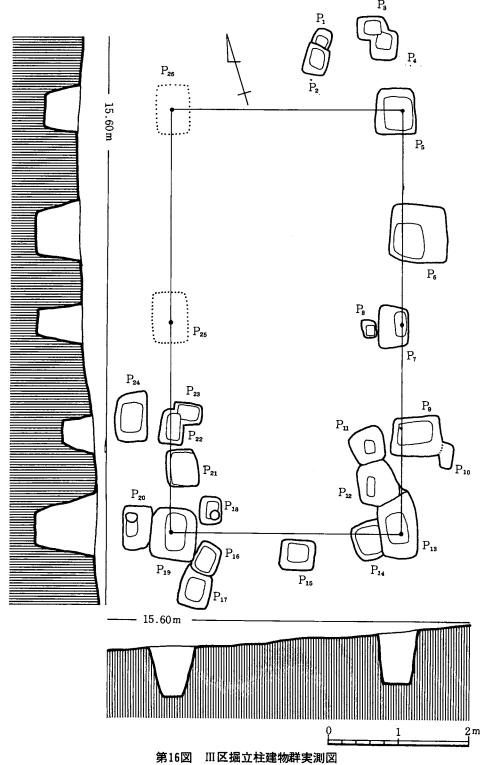
すなわち、流路 4 a ~ 5 層はすべて IV 層の包含層と対応し、また V 層および VI 層は流路内にはまったく認められない。 6 層および VI 層(地山層)は一致している。したがって流路内の 4 a ~ 5 層の初期堆積土層は II 区における IV 層が動いて流路内に再堆積したものであり、出土遺物からみた両者の相対年代も一致している。



第15回 III 区流路内遺物出土状態実測図

掘立柱建物址 (第16図)

調査区の東側に計26個の柱穴掘形を検出したが、建物全体を復元できたものはなかった。これらのうち、1 間×2 間分が比較的良く復元できた。 P_5-P_7 は3.15m、 P_7-P_{13} は2.96m、 $P_{13}-P_{19}$ は3.30m、 P_{25} および P_{26} は流路と重複していたために正確な掘形プランを確認することができなかったが、柱痕が明瞭で $P_{19}-P_{25}$ は2.96m、 $P_{25}-P_{26}$ は3.00m、 $P_{26}-P_{5}$ は3.30m を測った。以上から建物の規模は梁行3.30m、東側桁行6.11m、西側桁行5.96m、平均桁行6.035mを測り、桁行方位N-18° -Eであった。掘形はすべて方形で、柱痕を確認できた P_{18} ・ P_{20} では径 $15\sim20cm$ 前後の円柱を使用していたものと思われる。なお建物址の時期は明らかにしがたいが、流路部分の整地後に構築されているので、近世以降であることは確実である。



第3章 遺物

1 軒 瓦

今回の調査地区から、軒丸瓦18点、軒平瓦4点のあわせて22点の軒瓦が出土した。調査地区ごとの出土数はⅠ区3点、Ⅱ区7点、Ⅲ区12点で、Ⅲ区から最も多く出土した。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦18点はすべて破片である。これらのうちわけは複弁八葉蓮花文軒丸瓦5点、複弁六葉 蓮花文軒丸瓦1点、単弁六葉蓮花文軒丸瓦1点、単弁八葉蓮花軒丸1点、単弁12葉蓮花文軒丸 瓦1点、鬼面文軒丸瓦4点、その他周縁部の破片6点となっている。

複弁八葉蓮花文軒丸瓦A類(第17図1・2・3,第18図4)

軒丸瓦1はⅢ区流路内4A層から出土したものである。内区中房に1+8+13+(17)の蓮子を配し、外区内縁には珠文を配している。従来の出土例では珠文の数は35個となっている。外区外縁には陽線鋸歯文がめぐるが、鋸歯文の間隔にはばらつきが目立ち、正確な数は不明である。丸瓦の取付け位置は珠文帯よりやや外側にあり、丸瓦の下端は中心より約1.7㎝下方に位置している。瓦当裏面は周縁部が著しく高く、極めて特徴的である。各部位での復元した法量は瓦当径17.95㎝、外区内縁径13.5㎝、内区外縁径11.3㎝、中房径6.5㎝を測った。

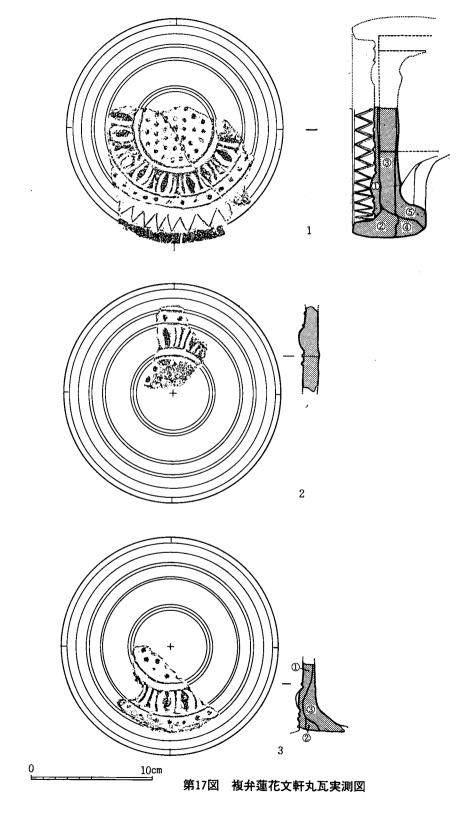
軒丸2・3は軒丸1と同様、Ⅲ区4A層から出土したものである。いずれも外区内縁から中 房にかけての破片である。残存する瓦当各部位での復原法量は両者とも軒丸瓦1の場合とほぼ 一致し、さらに細部の特徴を観察した結果、3点とも同范の可能性が強い。しかし軒丸1に比 較してややうすく仕上げられている。

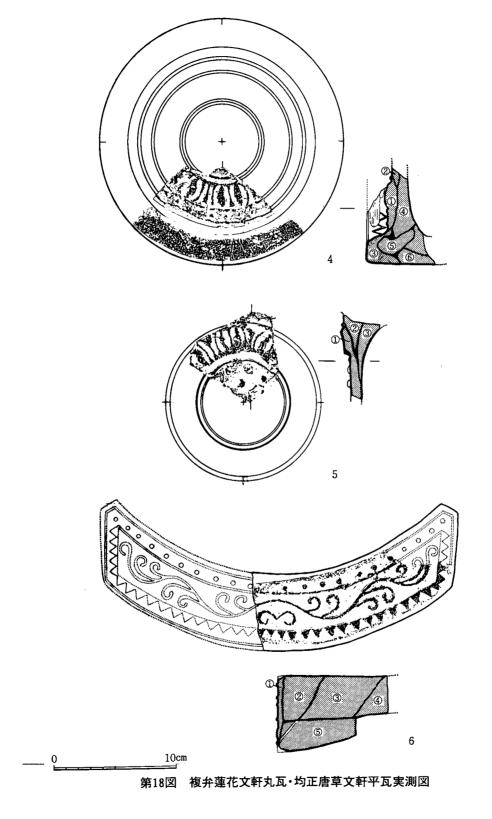
軒丸4はI区(1-D)表土層から出土したものである。瓦当面全体の約½弱の破片で中房を欠失している。外区内縁・内区外縁の復原径は前述した1~3の場合と一致するが、瓦当径では約21.5 cmでやや大づくりである。外区外縁は指先等で強くナデツケられているが、陽線鋸歯文がわずかに残っている。外区内縁に35個前後の珠文をめぐらし、蓮弁の先端は切れている。中房は欠失しているため、蓮子の配置状態・数は不明である。瓦当裏面の周縁部はかなり破損しているが、2~3 cmの高さであったと考えられる。

複弁八葉蓮花文軒丸瓦B類(第18図5)

中房の径・蓮子の大きさ・数がA類とは異なっている。

内区から中房の一房の破片で、外区は欠失している。Ⅲ区流路 4 A 層から出土したものである。 蓮弁は肉厚で盛り上り、蓮弁の先端は切れている。中房は蓮弁帯より一段低くなり、おそら





く 1-5-10ないし 1-4-9の 蓮子を配したものであろう。 蓮子は A 類に比べて大きく直径 6 mm 前後を測り、高く盛り上っている。なお内区の復元径は 12.55 cm、中房の復元径は 7.4 cm を 測った。

〔製作技法〕

製作技法上の特徴はA類では1および4、B類の5において比較的良く観察することが出来た。

1では、まだ外区内縁に相当する大きさの范に①の厚さ0.5cm前後の粘土をほぼ均一につめる。次に外区外縁および周縁部に②をつめるが、おそらく粘土ひもを使用したものであろう。この段階で丸瓦を瓦当裏面から差し込んだものと思われる。さらに周縁部と同レベルになるような粘土③を①の上に重ねる。④は②の粘土ひも端部が重なったものかあるいは新たに補強されたものであろう。①と③との前後関係は不明である。最後に⑤の支持土を入れて瓦当と丸瓦の接合部を補強し、瓦当裏面全体をナデ調整して仕上げている。

以上の手順を図式化すると①→②→丸瓦を接合→③→⑤となる。なお軒丸2では内区および 外区内縁とも一気に范に入れていて、軒丸1のような2段階の手順とは異なっている。軒丸3 では①→②→③の手順がとられているが、丸瓦を接合した際の布圧痕が②③に残り、①の端部 には認められないので、軒丸1と同様に、①→周縁→丸瓦の接合→②→③の手順をとったもの であろう。

軒丸4は、まず蓮弁および珠文帯に①を入れ、次に中房部分に②の粘土を入れる。周縁部は③ ⑤の粘土紐状のものを数度に分けて入れ、③ないし⑤の後に④を入れる。⑥⑦は支持土である。 この④は軒丸1の③に相当するもので瓦当を構成する。丸瓦の接合は軒丸1の場合を考慮すれば、③の後に行われたのではなかろうか。以上の手順をまとめると、①→②→③→丸瓦の接合→④⑤→⑥⑦となる。

軒丸5は、①→②→③の手順をとるが、②は周縁部につめた粘土の連続で、③は支持土であり、基本的にはA類と同じ手順で製作されたものであろう。

単弁六葉蓮花文軒丸瓦 (第19図7)

瓦当部の約½の破片でⅢ区流路3層から出土したものである。瓦当復原径15.9 cmで、やや小形である。瓦当面は偏平で輪郭線・花文・珠文,・蓮子はいづれも隆線で表現されている。中房は大半を欠失しているが、従来の出土例からすれば、界線で区切られ、1+7の蓮子を配するものであろう。蓮花文は輪郭線で区切られ、中に弁子を配する。花文の間に計6個の珠文を配している。焼成はやや軟らかく、黄褐色を呈している。

[製作技法]

瓦当范に①②の比較的少量の粘土を数回に分けて文様を抽出し、さらに厚い粘土③を入れて

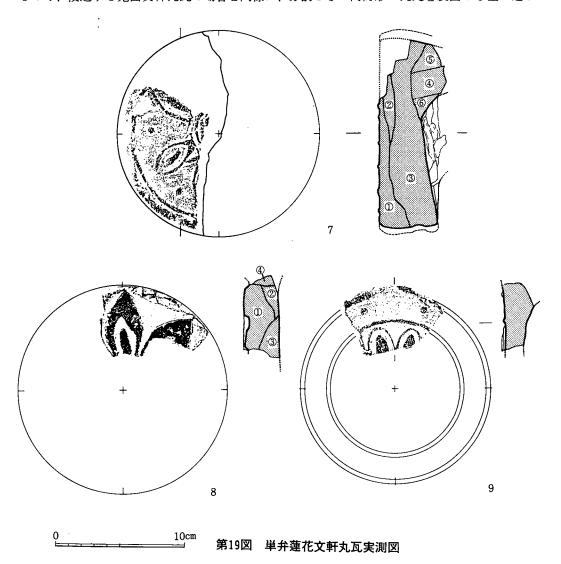
瓦当部を造る。次にあらかじめ半載した丸瓦を裏から接合(印籠づけ)するが、⑤および⑥の支持土との接着を促すために、丸瓦凸凹両端に縦方向の深い刻目が施されている。瓦当裏面は不定方向のナデにより仕上げられているが、周縁は複弁蓮花文軒丸瓦に顕著に見られる顎はなく扁平である。丸瓦の下面は瓦当裏面の中心より下部約3cmのところに取り付けられている。

単弁八葉蓮花文軒丸瓦(第19図8)

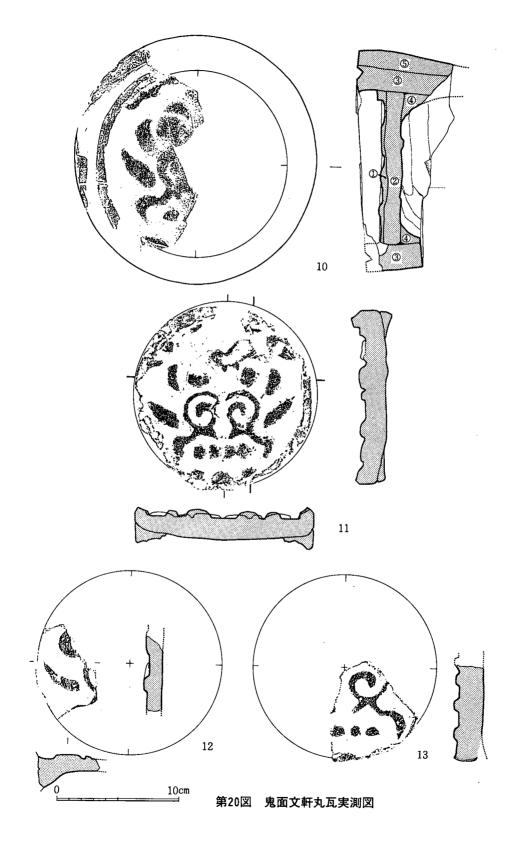
内区全体の約½の破片でⅡ区(J-18)Ⅳ層から出土したものである。蓮弁は肉厚の輪郭で囲まれ、中に弁子を配する。中房部分を復原すれば径5cm前後であろう。

〔製作技法〕

瓦当范に数回に分けて粘土をつめる。この際、内区外側面に全面に布圧痕が明瞭に残っているので、後述する鬼面文軒丸瓦の場合と同様に、分割しない円筒形の丸瓦を裏面から差し込み



31



接合した可能性が強い。②および④は瓦当部と丸瓦を接合部を補強するための支持土であろう。

単弁十二葉蓮花文軒丸瓦(第19図9)

外区内縁から内区内縁にかけての小破片で、中房は欠失している。Ⅲ区流路 3 層から出土したものである。蓮弁は細い輪郭線で囲まれ、中に弁子を配する。珠文は小さく扁平で、12個前後配置されていたものであろう。外区内縁の復原径14.4 cm、内区復原径10.4 cm、中房の径は 6 cm弱であった。

なお製作技法は、小破片であるため観察出来なかった。

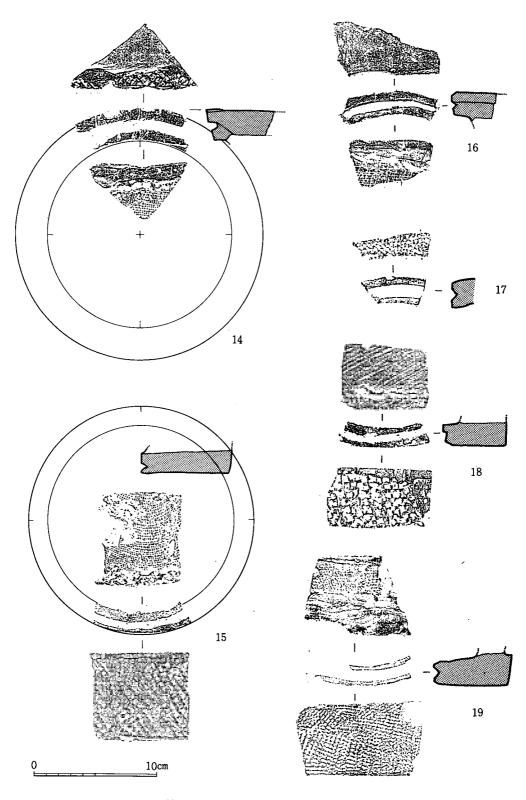
鬼面文軒丸瓦 (第20図10・11・12・13)

軒丸10・12は I 区 (I − D) 第 II 層、軒丸11・13は Ⅲ 区流路 4 A 層から出土したものである。 瓦当内区いっぱいに鬼面をやや高肉にあらわし (軒丸10)、外区は高い直立線となり(軒丸11)、 外区の中央にヘラ状工具で鋭くケズリとられた断面形 V ないし U 字状の圏文がめぐっている(軒丸10・11)。鬼面は眼・鼻・口とも大づくりで、口唇は大きく開き、噛み合せた上下歯は省略されて一列となっている。軒丸10・11は額上および口唇下部には、頭髪およびひげを省略したと見られる三角形・半円形の文様が連なっている。しかしこの文様も軒丸10では個々独立しているのに対し、11では連続文様となっている。

瓦当面の径は軒丸11で20.0 cmを測った。内区の径は軒丸10・11とも15.2 cmで一致した。軒丸12・13はいずれも内区鬼面の破片で、内区の復原径は軒丸12が15.1 cm、軒丸13が15.2 cmで、軒丸10・11のそれとほぼ一致している。

以上4点の鬼面文軒丸瓦は、器面が青灰色ないし黒灰色を呈し、焼成も極めて堅緻である。 〔製作技法〕

この種の瓦の製作技法は、特に軒丸10においてよく観察することができた。これによると、まず瓦当内区に相当する范に①の粘土を入れて文様部分を抽出し、さらに范の直径に相当する厚めの粘土②を入れる。内区外側端部剝離面には4点いずれにも布圧痕が明瞭に認められ、また軒丸11では布目圧痕がほぼ一周していた。したがって、丸瓦の接合法は円筒形のままの丸瓦を裏面からはめこみ、④・⑤の支持土で補強し、外面からはタタキしめて瓦当部と丸瓦部の接着をさらに強固にする。次に瓦当面・特に周縁部をヘラで調整し、圏文を手持ちのヘラ状工具で削り込む。瓦当面の中心部からやや下部の周縁から側面後方に一条の沈線が刻まれているが、これはこの段階では円筒形の丸瓦を半裁し、切り取る際の目安として施されたものである。さらに瓦当と円筒形の丸瓦を接合したままの状態で内外面を調整する。最後に紐あるいは針金状のもので、目安線に沿って丸瓦後方から瓦当裏面の手前まで半裁し、さらに裏面に平行して切り取っている。切断面の調整は行われていない。



第21図 軒丸瓦(周縁部)実測図

以上を図式化すると、①→②→③(円筒形のままの丸瓦の接合)→④⑤→内外面の調整→瓦 当周縁端部の圏文→目安線→円筒の半裁分割の手順となる。前述した軒丸8の単弁11葉軒丸瓦 の場合も、同様の手順がとられた可能性が強いものと思われる。

軒丸瓦周縁部破片 (第21図14・15・16・17・18・19)

14~19はすべて軒丸瓦の周縁部の小破片である。14・15・19はⅢ区流路 4 A 層、16は Ⅲ区 (K −15) Ⅳ層、17は Ⅲ区表土層から出土したものである。以上のうち瓦当面の復原径は14が20.5 cm、15が18.4 cmを測った。

14は周縁端に0.6~0.7cm巾の断面が逆台形を呈する圏文をヘラ状の工具で刻んでいる。内面は丸瓦凹面との剝離面で細かい布目圧痕が認められ、外面は先端から1~2 cmの巾で格子タタキが残っている。他はヨコ方向のナデ調整が施されている。15は周縁下部の破片で、周縁端部に断面形がV字状の圏文がめぐっている。内面には布目圧痕が明瞭に残り、外面には格子タタキが残っている。16は15と同様の圏文がめぐらされ、内面に残る布目圧痕の巾から周縁の高さは約1 cmであろう。外面はナデ調整されている。17はV字状の圏文がめぐらされ、外面に格子タタキが施されている。18も外面に格子タタキが施され、周辺部の高さは約1.5cmを測った。19は17と同一の格子タタキが外面から裏面周縁端部に施されるが、周縁部の高さは3.5cmを測り著しく高くなっている。

以上の6点は表面が青灰色を呈し、焼成極めて堅緻で瓦当との剝離状態から、鬼面文軒丸瓦 あるいは単弁蓮花文軒丸瓦の周縁部破片である可能性が強い。

(2) 軒平瓦

均正唐草文軒平瓦 (第18図6)

Ⅲ区流路 4 A層から出土したものである。復原した瓦当面の長さは約29.5 cm、巾6.3 cmを測った。心飾は下向き 3 字状をなし、心飾の上部からは左右に、はじめに上向き 2 葉、次に下向き 2 葉、端部は上向き 2 葉と下向き 1 葉を組み合せた唐草文が走る。上外区には22個の珠文がならび、下外区には陽鋸歯文28、左右の外区は下外区に連続する陽鋸歯文それぞれ 5 が配置される。平瓦凹面には布目痕および模骨痕が明瞭に残っている。布目・模骨痕とも瓦当面から 1 ~2 cmの部分では認められない。凸面は残存する部分ではヨコ方向にナデ調整され、タタキ目等は残っていない。

〔製作技法〕

平瓦部分は桶巻き造りされたものであるが、瓦当文様を笵に入れて造り出した段階は、分割 前か分割後かは明らかにしがたい。まず笵にうすい粘土①をつめる、 凸面の観察から范の深 さも粘土①の厚みよりやや深いものであったと思われる。次に平瓦を接合するが、②③④はいずれも平瓦を製作する段階の粘土ひも巻き上げの際の痕跡である。最後に顎の部分にあたる⑤を接合している。したがって①→平瓦(②③④)→⑤の手順となる。なお瓦当面は平瓦部の側端部が2次的な調整が行なわれているため、広端面を用いたものか、狭端面を用いたものかは不明である。

圏文軒平瓦 (第22図20・21・22)

平瓦凸面端部に粘土板を接合して瓦当部を形成し、さらに瓦当面に一条の溝を刻んだものである。昭和32年度の調査およびその前後に採集された遺物の中にも同類の軒平瓦を見い出せるが、今回の出土例も含めて、瓦当面の溝は1条のものだけに限られ、複数の溝をもつものはない。したがって、この種の瓦当文様をもつものを、ここでは圏文軒平瓦と呼ぶことにした。

軒平瓦20は、瓦当部のほぼ右半分を残す破片である。顎の部分の粘土板の巾は平均5cmでや や短かく、瓦当の上下の厚さは平均3.8cmである。顎部および平瓦部凸面は格子目タタキが明 瞭に残り、瓦当面には巾1.3cmの断面V字形の圏文がめぐる。凹面には布目圧痕・模骨痕が認 められる。

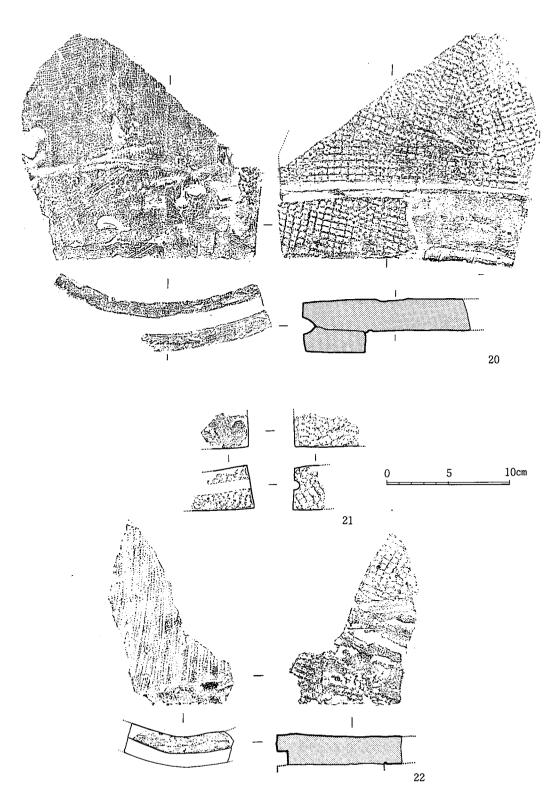
軒平瓦21は、瓦当部側端部分の小破片である。瓦当面、下面(凸面)、側端面は軒平瓦20と同一の格子目タタキが認められる。瓦当面の圏文の巾 0.6~ 0.7cmと狭く、断面U字形を呈している。

軒平瓦22は顎部を欠失するが、瓦当面に断面コ字形の圏文をめぐらしている。平瓦部凸面には軒平瓦20・21と同一の格子目タタキが認められ、凹面はヘラ状の工具によりタテ方向にナデ調整して仕上げられている。顎部は欠失するが平瓦凸面との接合面の圧痕から顎部の巾は 8.8 ~ 9.0 cmであったと思われる。

〔製作技法〕

軒平瓦20では凹面に模骨痕が認められる。軒平瓦21・22では模骨痕の明瞭な痕跡を残している。 平瓦部凸面は格子目タタキが認められ、さらに軒平瓦21では瓦当面および側端部も格子目タタ キにより調整が行われる。瓦当顎部は粘土板を接合し、これには5cm前後の短いもの(軒平瓦 20)と長いもの(軒平瓦22)とがある。また軒平瓦20では顎を狭端部凸面に取り付けている可 能性が強い。瓦当面の圏文はヘラ状工具によって刻まれているが、その断面形はV・U・U字 状の3種のものがある。また圏文が刻まれる位置も、顎部の接合部に沿って施されるものと平 瓦部に沿って施されるものとがみられる。

平瓦部凸面の粘土板の接合面に格子目タタキの痕跡が認められるものと、完全にナデ消されたものとがあることから、平瓦部の製作後ではなかろうか。



第22図 圈文軒平瓦実測図

2 平瓦・丸瓦

出土した瓦類のほとんどが平瓦・丸瓦である。これらの瓦は調査地区のほぼ全域から出土したが、特に II 区築地状遺構西側部分に集中しており、出土量の約80%を占めている。

(1)平瓦・丸瓦の分類

平瓦・丸瓦の凸面のタタキ文様によって、平行タタキ文、格子目タタキ文、斜行格子目タタキ目文、縄目タタキ文、その他無文のものや、散発的ではあるが特殊文様をもつものなどが出土している。

まず、これらの瓦のうち平行・格子のタタキ文をもつものについては、文様すなわちタタキ板に刻まれた線刻の巾やその間隔、さらにタタキ板に平行あるいは直行して刻まれるものなど 多種にわたっている。ここでは整理の都合上、それぞれの文様を単位によって大別を行った。

平行タタキ文瓦

I 類=タタキ板に刻まれた凹凸のそれぞれ巾が1 cm以上の粗大なもので、凹凸の間隔は必ずしも一致しない。また溝がタタキ板の木目に直行・平行さらにやや斜行気味に刻まれるものがある。

Ⅱ類=凹凸の間隔が 0.8~ 0.9cmのもので、出土数は極めて少ない。

Ⅲ類=凹凸の間隔が 0.5~ 0.7cm前後のもので、Ⅳ類に次いで多く出土している。

Ⅳ類=凹凸の間隔が 0.3~ 0.5前後のもので、平行タタキの大半を占めている。

なお $I \sim IV$ の境界は 的なものであり、タタキしめ段階における凹凸の重なり、また粘土の収縮率のちがいなどによって、必ずしも各類の間に一線を引くことは困難である。ここでは大別にとどめる。

格子目タタキ文瓦

I 類=格子の間隔が 1.0cmの粗大なものである。この場合、タタキ板の凹が凸より広いのが一般的であるが、ここでは凸部の頂点から頂点を計側している。

Ⅱ類=凹凸の間隔が 0.8~ 0.9cm前後のもの。

Ⅲ類=凹凸の間隔が 0.5~ 0.8cmのもので、格子目タタキ文瓦のうち大部分を占めている。 Ⅳ類=凹凸の間隔が 0.3~ 0.4cmのものである。

斜行格子目タタキ文瓦

出土数が極めて少なく、観察が出来たのは5点であり、すべて平瓦破片である。

繩目タタキ文瓦

縄目タタキ文は、平瓦凸面の両端部に併行するものと、側端部に併行するものとがある。ここでは次のように類別した。

Ⅰ類=タタキ文が平瓦凸面の側端部に併行するもの。

Ⅱ類=タタキ文が平瓦凸面の両端部に併行するもの。

さらにこれらは右撚りのものと左撚りのものに細分される。

無文瓦

平瓦凸面をタタキしめたのち、ヘラ状工具、手のひらおよび回転を利用した横ナデ調整により、タタキ文様が消えたものである。わずかにタタキ文様が残るものがあるが、これもこの類に加えた。

部分格子文瓦

平行タタキ文の一部を格子目状に刻んだもので、1点(373)のみ出土している。

(2) 瓦の出土状態

以上の瓦を、出土地点、層位ごとにその数の比較を行ったものが第1表である。これによると、 I ~Ⅲ区に平行・格子目・縄目・無文がそれぞれ出土しているが、出土頻度からみた場合、

Ⅱ区 Ⅳ 層に集中していることがわかる。これ は調査面積および投下した仕事量が大である ことに起因するもので、必ずしも遺跡全体の 傾向を示したものとは断定できない。しかし ながら、Ⅱ・Ⅲ区は、いずれも調査区の最下 層まで掘り下げた結果によるものであり、あ る程度の傾向がうかがえる。すなわち築地状 遺構西側一帯から出土したⅡ区Ⅳ層の瓦は、 平行タタキ文が圧倒的に多く、次いで格子目 タタキ、無文のものが出土している。これに 対し、Ⅲ区では縄目タタキの瓦が主体を占め、 平行タタキのものはほとんど出土していない。 3点出土し、うち土層のものが2点で、Ⅳ層 出土のものは1点にすぎない。また、各地区 とも平瓦が大半を占め、丸瓦が極めて少なく、 ばらつきも目立っている。とくにこのことは、

0.55	地区	I	区	I	ĭ	Į	Ć.	Ι	ī	[2	₹
分類	位		[] 層		11 層	IV	層	I ~		IV	- 層
'17					_						
分類	区别	平瓦	丸瓦	平瓦	丸瓦	平瓦	丸瓦	平瓦	丸瓦	平瓦	丸瓦
平行叩き文	I					1	1				
	П					2	3				
	Ш	1		5	1	10	6			1	
	īV	1		7		41	2	1			
	その他	0			1	0			1		
格子叩き文	I	3		5		9		1		2	
	П	3		1		5	,			1	
	Ш	6		15		23		6	2	6	1
	IV	1	1	3		6	3	1	2	1	
その他			1	1		2					
縄月叩き文	I	10	1	6		9	4	20	4	18	2
	П	3		4		4		3		4	
文	不明										
無	文	1	6	10	11	7	27	8	4	1	5
斜行村	各子目	2				2					

第1表 地区ごとの瓦出土数比較表

特にⅡ区Ⅳ層より一括して出土した瓦の場合、瓦が別地点より、主に平瓦を中心として運ばれてきたことを暗示している。

(3)平瓦・丸瓦の観察

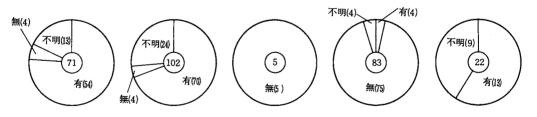
出土した平瓦・丸瓦について製作技法に関する観察を行った。

平瓦の場合、通状桶状の器具に粘土を巻きつけて截頭方錐状の円筒を作り、これを4ないし3つに分割するいわゆる「桶巻作り」によるものと、凸面および凹面の成形台により作る「一枚作り」とが知られる。「桶巻作り」では、凹面に桶わくの圧痕(模骨痕)が残ることが多く、一つの指標となっている。一方、「一枚作り」ではその痕跡を見出すことは極めて困難である。また丸瓦は、円筒状の器具に粘土を巻きつけて作った粘土円筒を2分割する方法が知られるが、その円筒状器具については不明な点が多い。

模骨痕

平瓦・丸瓦の両者について、凹面の模骨痕の有無について観察を行ったものが第23図である。これによると、平行・格子目・無文の平瓦では半数以上のものに模骨痕が認められるのに対し、縄目タタキ文では、観察した個体数83点のうち、模骨痕が認められたものは4点で、また凹面に二次的な調整が加えられているため判定が不可能なもの4点で、他の75点については認められなかった。したがって縄目タタキの平瓦の成形には、桶状の器具が使用された可能性は少ないと考えられる。

丸瓦についてはほとんど模骨痕がないが、わずか縄目1点・無文2点のものに認められた。



平瓦・平行叩き文 平瓦・格子叩き文 平瓦・縄目叩き文 平瓦・縄目叩き目 平瓦・無文

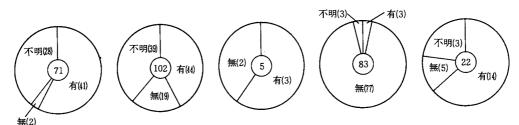


丸瓦・平行叩き文 丸瓦・格子叩き文 丸瓦繩目叩き文 第2表 模骨痕の有無

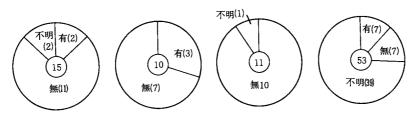
丸瓦無文

糸切痕

瓦製作に使用する粘土は、粘土塊を一定の厚さに切断して板状 (タタラ造り) にし、これを 器具に巻きつけるものと、粘土紐をつくり、これを器具に巻きつけるものとがある。前者で粘 土塊を糸・針金等で切りとるため、明瞭な条痕(糸切痕)を残すことが一般的である。後者で は、これらの痕跡が認められず、タタキしめの弱いものでは特に凹面に粘土紐の痕跡が認めら れることがある。



平瓦・平行叩き文 平瓦・格子叩き文 平瓦・斜格子叩き文 平瓦・繩目叩き文 平瓦・無文



丸瓦・平行叩き文 丸瓦・格子叩き文 丸瓦・繩目叩き文 平瓦・無文

第3表 糸切痕の有無

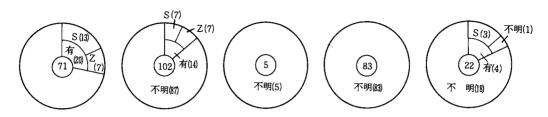
第24図は、出土平瓦・丸瓦の糸切痕の有無について観察結果をまとめたものである。

これによると、やはり縄目タタキの平瓦に糸切痕が極めて少なく、前述した模骨痕の無いも のの数に近い数値を示している

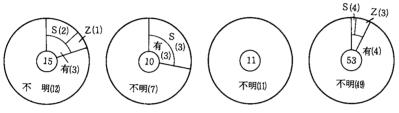
粘土板合せ目

糸切りされた粘土板は、円筒に巻きつける際に一ヶ所で重ね合わされる。したがって粘土継目のある瓦では4分割された場合では、4枚に1枚の割合いで存在することになる。出土した平瓦・丸瓦の粘土板合せ目について観察した。この場合粘土板の両端の合せ目には、2通りあって、狭端側より見た形状によってS・Zとした。以上の観察結果を比較したものが第4表である。

平瓦では縄目叩き文・斜行格子目叩き文、丸瓦では縄目叩き文を除くすべてに粘土合せ目が 認められた。最も出土量の多かった平行叩き文では昇以上、格子目叩き文では約4kのものに認 められた。なお縄目叩き文では、全く認められず、糸切痕の場合と同じような結果となった。 また粘土合せ目には、格子叩き文を除きS・Zの両者が認められた。



平瓦・平行叩き文 平瓦格子叩き文 平瓦・斜格子叩き文 平瓦・縄目叩き文 平瓦・無文



丸瓦・平行叩き文 丸瓦・格子叩き文 丸瓦・縄目叩き文 丸瓦・無文

第4表 粘土継目の有無

以上模骨痕・糸切痕・粘土継目の各項について観察した結果、まとめると次のようになる。

- ①平瓦のうち、平行タタキ、格子目タタキ、斜行格子目タタキ、無文の4者については、模 骨痕・糸切痕・粘土継目が大半のものに認められ、粘土板を使用した桶巻作りであった可能 性が強い。
- ②平瓦のうち、縄目タタキのもののみ粘土紐を使用した可能性が強い。
- ③また平瓦縄目タタキのものには、そのほとんどに模骨痕が認められなかったが、これらは 粘土紐を使用するとともに通常桶状の器具以外のものを想定せざるを得ない。
- ④丸瓦では平瓦同様、縄目タタキを除いて、粘土板を使用した可能性が強い。

また縄目タタキの平瓦・丸瓦の中には、粘土紐の明瞭な圧痕を残すもの(第39図 253、 374)が認められ、以上の観察結果をも符合している。

平瓦の分割角度

出土した平瓦のうち、狭端面・広端面のいずれか残存するもの計15点について、その分割角度を計測した。15点のうち13点までが、70~90を示しており、おそらく粘土円筒を4分割した

番号	種 別	分割角度
001	平行Ⅰ類	94°
002	平行Ⅳ類	83°
003	平行Ⅳ類	76°
019	平行Ⅳ類	76°
027	平行Ⅳ類	81°
046	平行Ⅲ類	112.5°
049	平行Ⅰ類	96°
051	平行Ⅳ類	92.5°
058	平行Ⅳ類	70°
059	平行IV類	80°
060	平行Ⅲ類	83°
072	格子Ⅲ類	95°
088	格子Ⅲ類	81°
264	無文	53°
204		

第5表 平瓦の分割角度

ものと思われる。しかし、 046は112 5°で、 3 分割の 可能性が強い。また 264は製作段階で扁平化したもの ではなかろうか。

布目の経緯

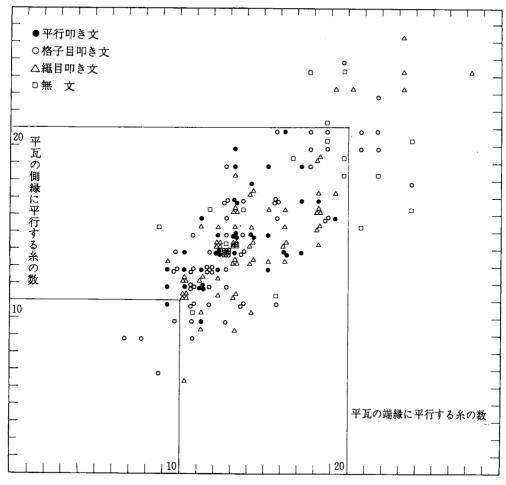
四面に残る布目圧痕の粗密を観察した。布目圧痕は、粘土の乾燥と焼成による収縮、さらに、桶枠に布を巻きつける際の乱れなどにより、必ずしも布そのものの粗密を現わさないが、ある程度の傾向を示すものと思われる。ここでは先に類別を試みた凸面の文様ごとに比較を行った。計測方法は、瓦の広・狭端面に平行する糸の数と、側端面に平行する糸の数とを、2cm四方の中で数えた。個々の瓦の結果は平瓦・丸瓦観察表に掲げた。また比較表では平瓦のみ扱った。

計測値の比較を行ったが、結果的には個々の文様に よる明瞭な特徴は見い出せなかったが、ある程度の傾 向がうかがえる。いまこれらを列記すると、次のよう になるものと思われる。

- ① 各形式とも、布目の経緯には、密なものから粗なものまでかなりの巾があり、計測した 点数が少なかった無文のものを除くと、縦横糸とも13~14本前後に分布の中心があった。
- ② 布の経緯が20本を超える密なものは、繩目タタキ文・無文のものに認められ、平行タタキ文のものには、経緯とも20本を超える緻密なものは認められなかった。
- ③ また平行タタキ文は、布の経緯が10~20本の範囲内におさまり、比較的にばらつきが少ない。
- ④ 布の経緯が10本以下の極めて粗なものは、格子目タタキ文瓦に認められる。なお、これらを除くと、ほぼ無文のものの分布範囲と一致する。

対比表では、瓦を平瓦凸面の文様により比較したもので、あくまで大分類での一つの結果である。前に述べた各文様のなかでの細別ごとの比較を行えば、また異った結果および傾向を導き出せるであろうが、ここでは大別による比較にとどめ、将来の問題点として留保した。

なお、大阪府船橋遺跡出土の平瓦では、各型式間の布の粗密に絶対的な差異が認められ、それらは造瓦における工房址の異いに起因するものとしている。したがって本遺跡出土の瓦の中(駐1)で、対比表の中で極めて類似する分布を示す格子目タタキ文瓦と無文瓦では、同一の工房址で生産された可能性を示すものであり、このことは両型式の瓦の出土状態とも矛盾しない。また(註2)



第6表 平瓦布目経緯比較表

前二者と同一地点からの供伴関係にある平行タタキ文瓦では、布目の粗密に異った分布範囲を示した点を考慮すれば、前二者とは異った工房址で生産された可能性を示唆するものではなか(註3) ろうか。

- 註1. 原口正三「船橋遺跡の遺物の研究(1)」(『船橋 I 』所収) 昭和33年3月
- 註2. 無文瓦は通常はタタキ板による成形ののち、ヘラや手のひら等でナデ調整するために、タタキ文様は ほとんど消えてしまうことが多い。今回出土した無文瓦の中には、わずかにタタキ文様が観察できるもの があり、その大半は格子タタキ文であり、一部平行タタキも認められる。したがって、このこと と、布目の粗密との間には相関関係が認められる。
- 註3. また布の粗密の分布が他の三者とは異なる繩目タタキ文の中には、粘土紐巻き上げの明瞭な痕跡を残すものがあり、糸切痕および粘土継ぎ目などが全く認められないこと、また出土地点の異なることなどを考え合わせれば、平行・格子・無文の各瓦に比較し、制作技法上に大きな差異が認められ、これは瓦の製作年代の違いを示すものか、あるいは工房址の違いを示すものであろう。

(4) まとめ

以上出土した瓦についての観察結果に基づき、各項目ごとに比較検討を行ってきたが、ここではそれらについてまとめておきたい。

(1)出土した平瓦・丸瓦は、その凸面の叩き文様およびその後の調整などにより、平行叩き文 瓦・格子目叩き文瓦・斜行格子目文瓦・部分格子目文瓦・繩目叩き文瓦・無文瓦の6種のもの があり、これらは文様の単位の大小などにより、それぞれ細分が出来た。

(2)これらの瓦の出土状態、すなわち分布状況と層序、供伴関係から、平行・格子・無文瓦と 繩目叩き文瓦との二つの群に分かれ、繩目叩き文瓦がやや年代的に後出する傾向が認められる。

(3)製作技法では、桶枠痕・糸切痕・粘土継目などの観察と各文様ごとの比較を行った。平行・ 格子・無文瓦では、「粘土板桶巻き造り」、叩き文瓦では、「粘土紐桶巻き造り」によるものであ り、両者には決定的な技法上の差が認められた。

(4)平瓦は4分割されたものが大半を占め、例外的に3分割の可能性をもつものが認められる。

(5)特に平瓦凹面に残る布目圧痕についてその布の経緯について計測し比較を行った結果、その分布の状況から平行叩き文瓦、格子目文瓦・無文瓦・縄目叩き文瓦の三つの群が認められた。 このことは(2)、(3)で掲げた事柄とも必ずしも矛盾していない。

(6)また軒先瓦と平瓦・丸瓦とのセット関係を図示すれば以下のようになる。

複弁八葉文軒丸瓦) 均正唐草文軒平瓦

平行叩き文平・丸瓦・無文(平行叩き)平瓦

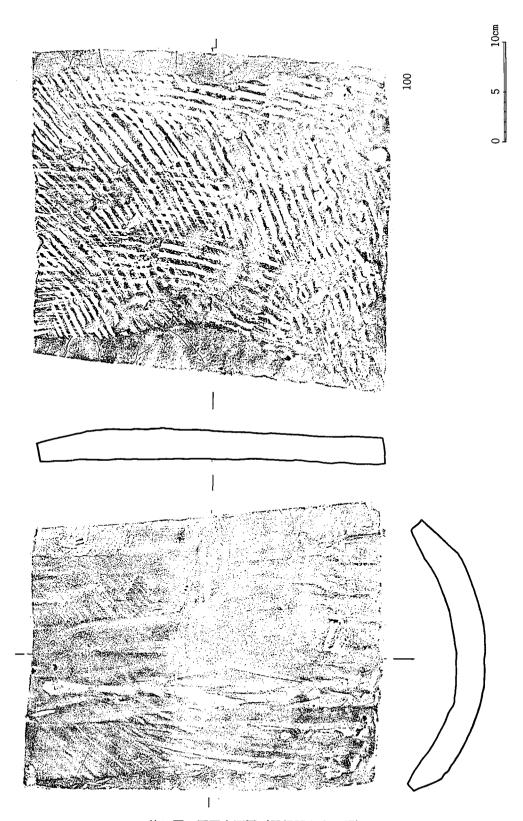
鬼面文軒丸瓦

格子目叩き文平・丸瓦

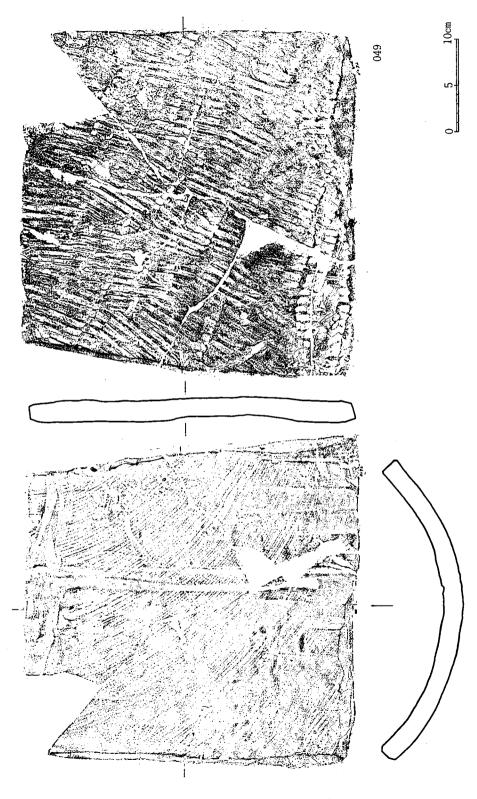
単弁八葉文軒丸瓦 単弁六葉文軒丸瓦

格子目叩き文 丸瓦・繩目叩き文平・丸瓦

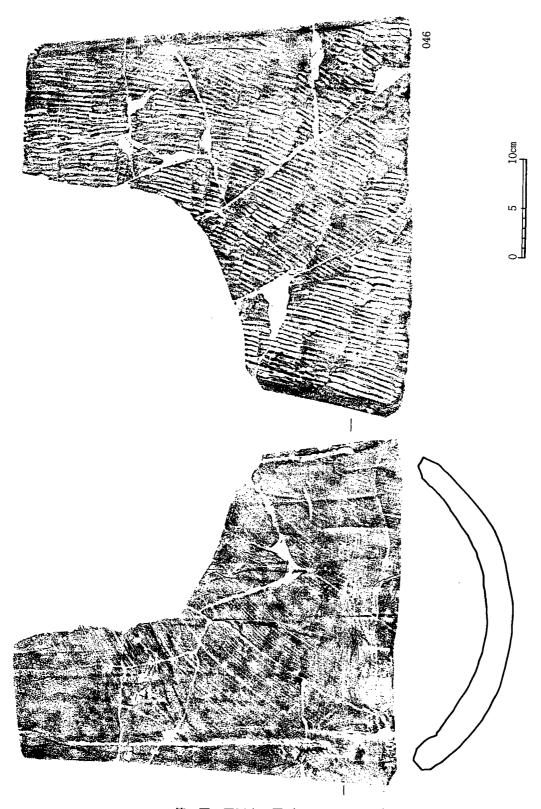
(7)瓦の年代については、土師器・須恵器との供伴関係から、平行・格子・無文瓦を8世紀中葉、繩目叩き文瓦を8世紀後半に位置付けたい。



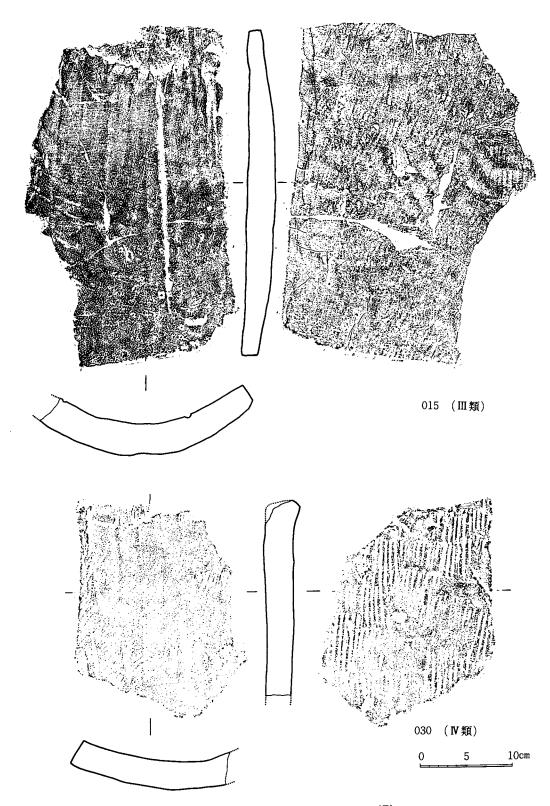
第23図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)



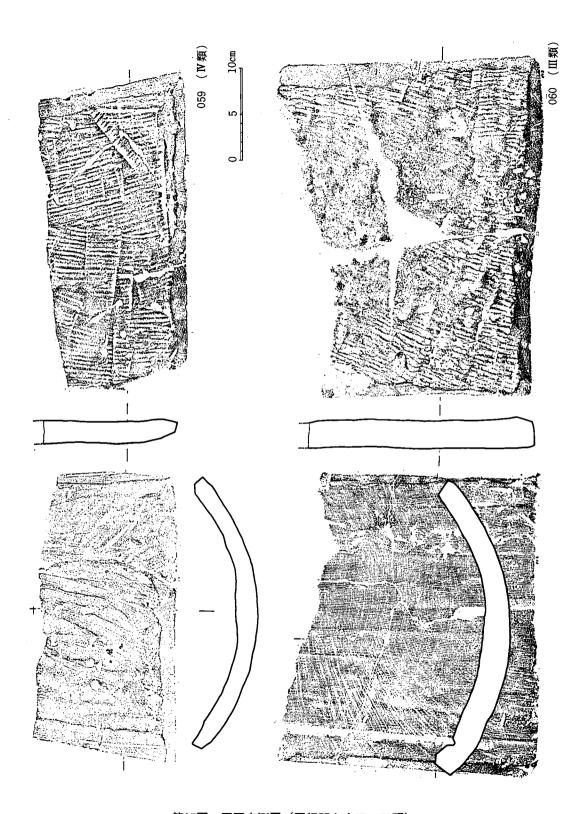
第24図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅰ類)



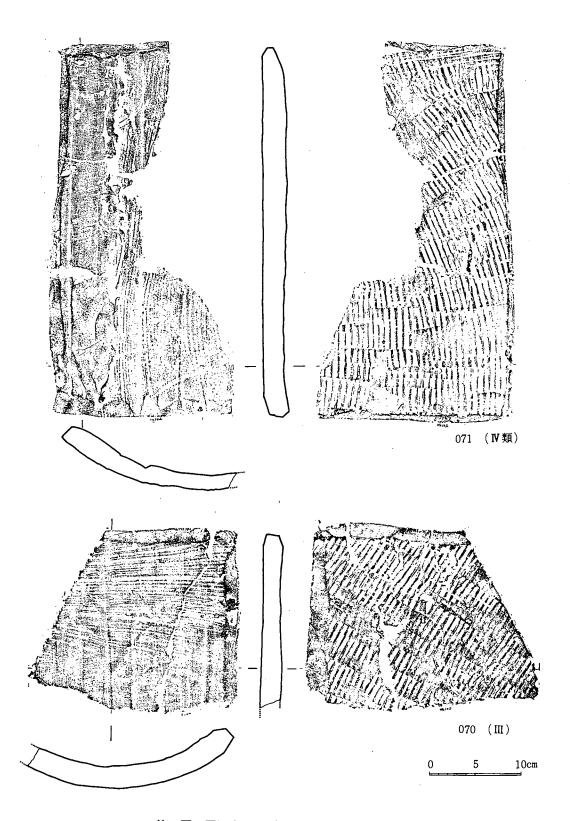
第25図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅲ類)



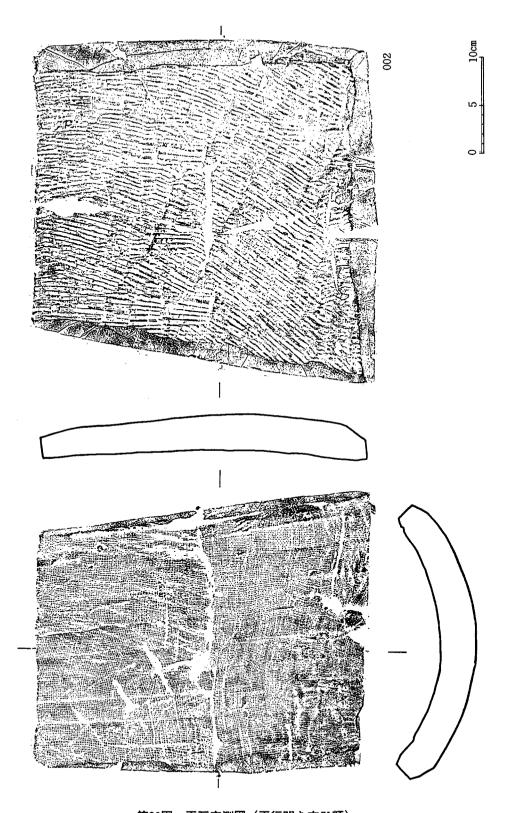
第26図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅲ・Ⅳ類)



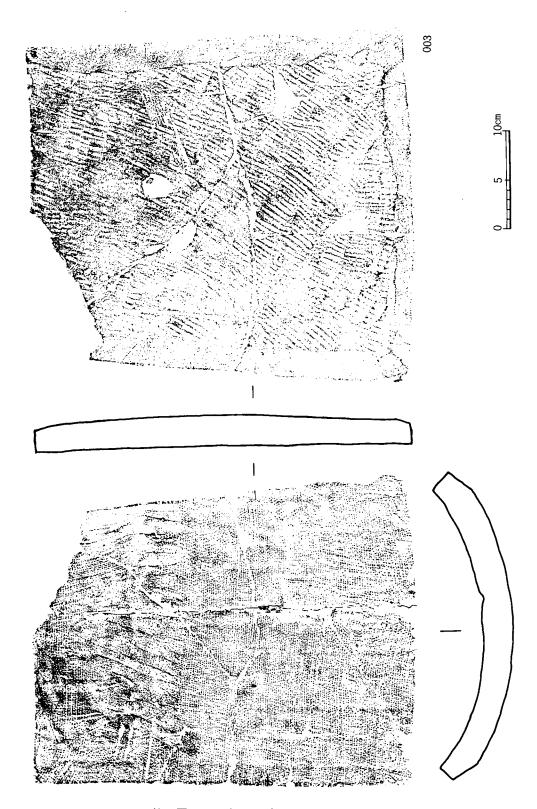
第27図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅲ・Ⅳ類)



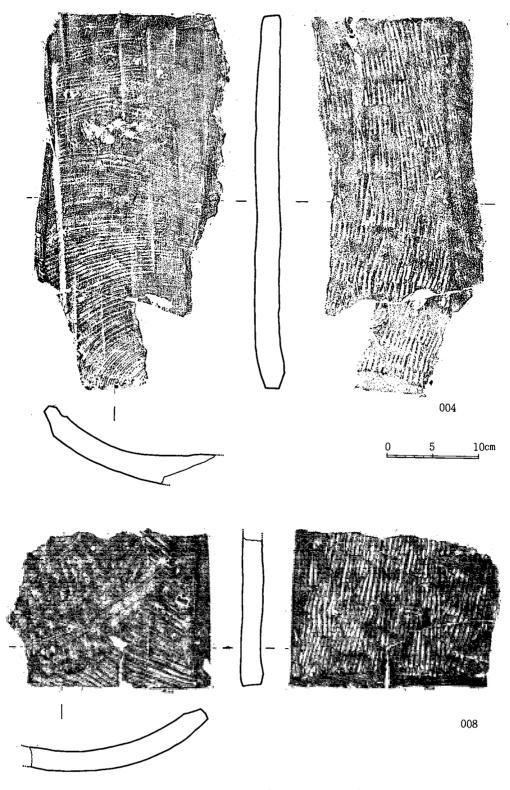
第28図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅲ・Ⅳ類)



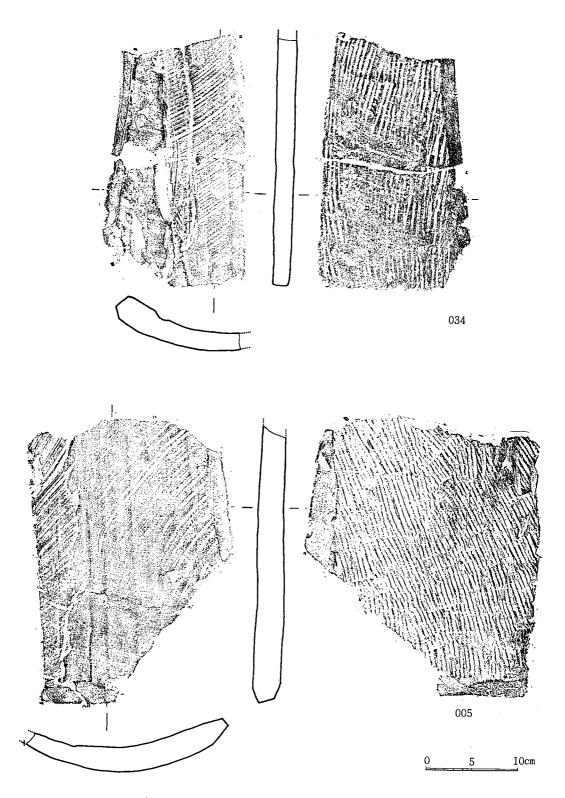
第29図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)



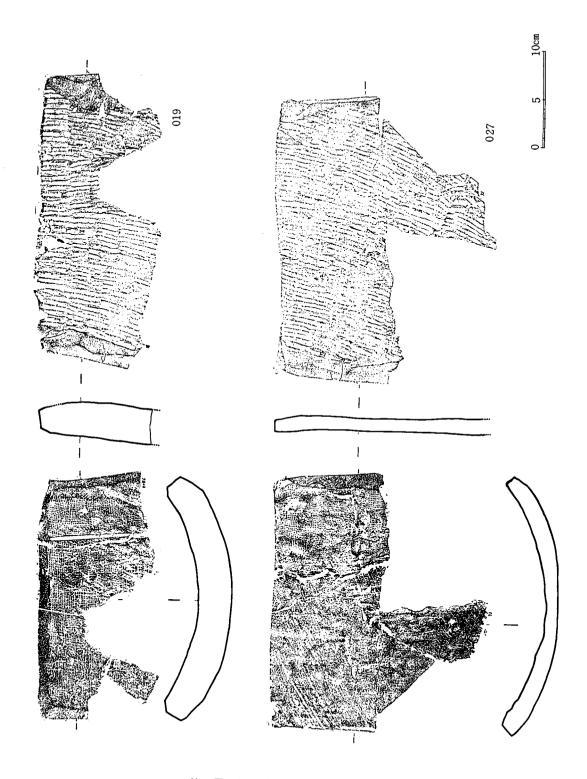
第30図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)



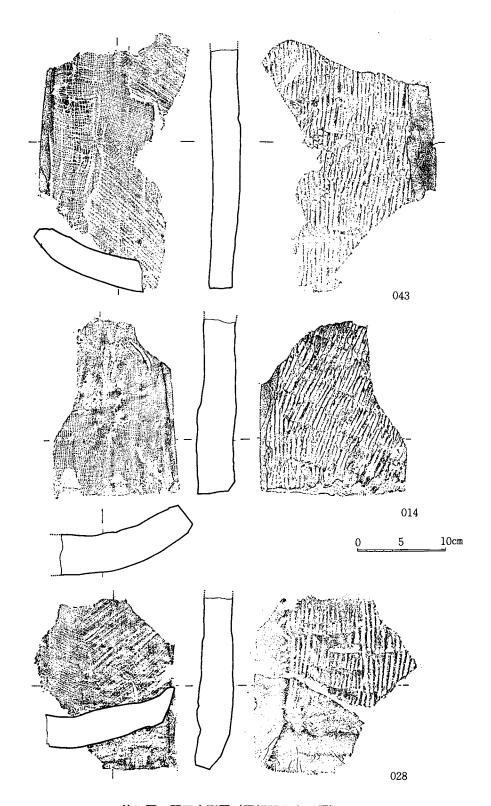
第31図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)



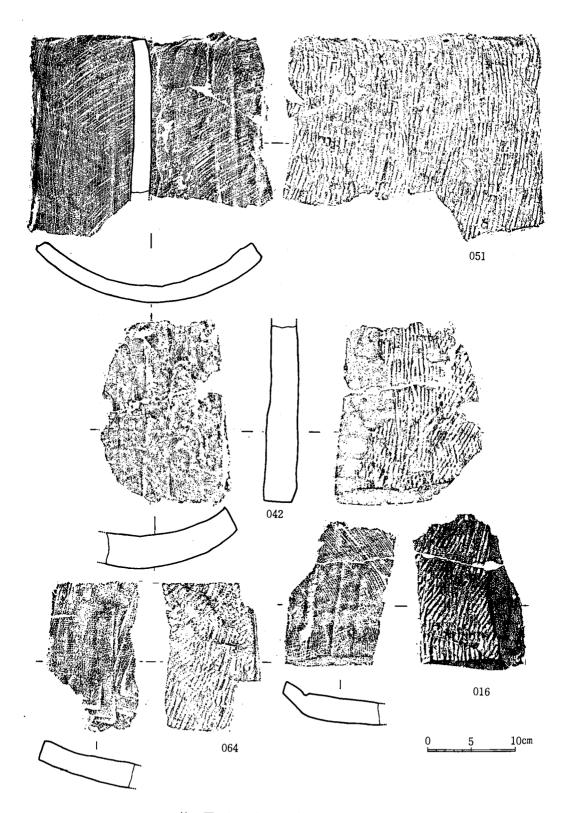
第32図 平瓦実測図(平行叩き文 I 類)



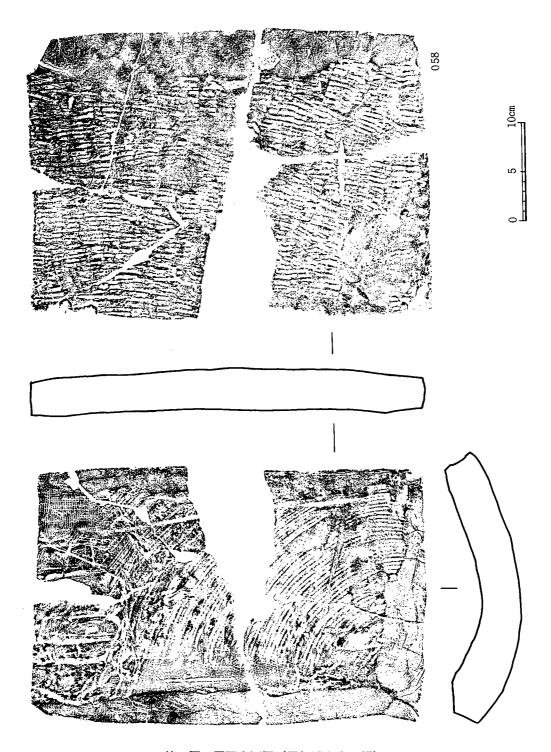
第33図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)



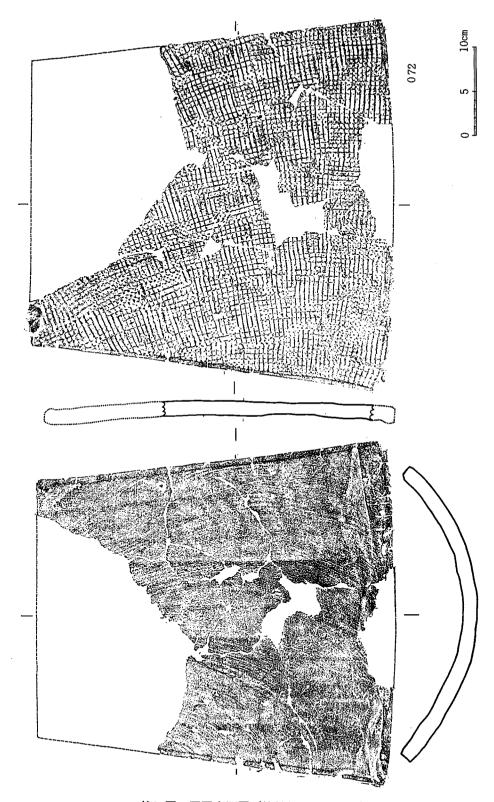
第34図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)



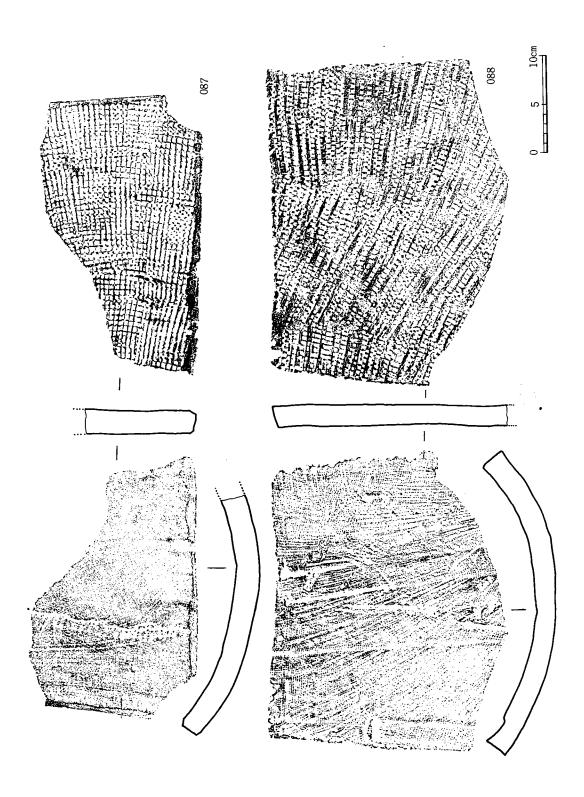
第35図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)



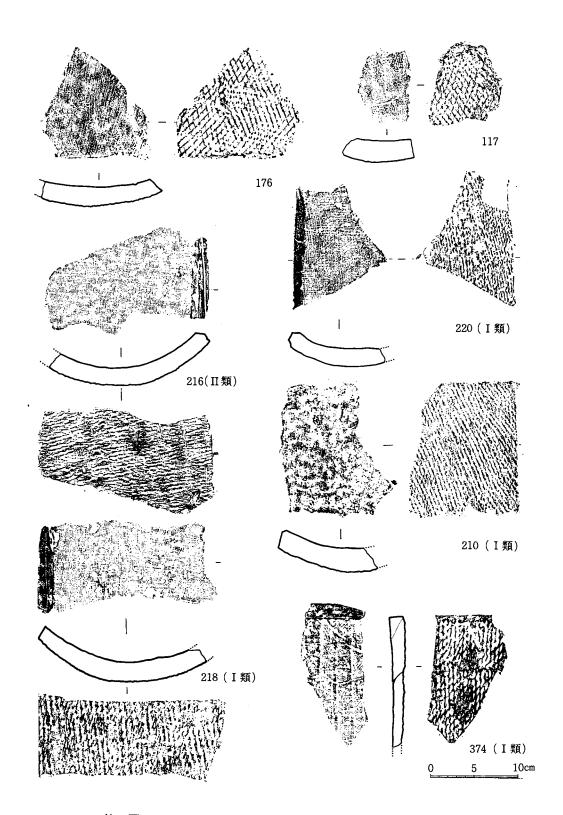
第36図 平瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)



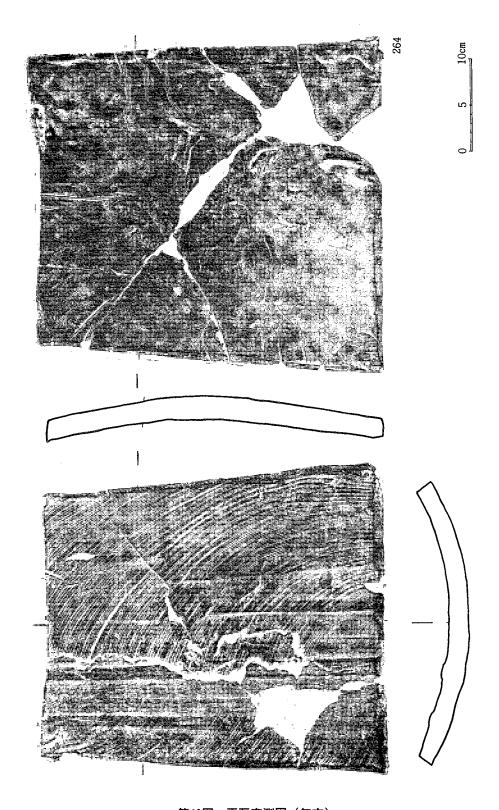
第37図 平瓦実測図(格子目叩き文Ⅲ類)



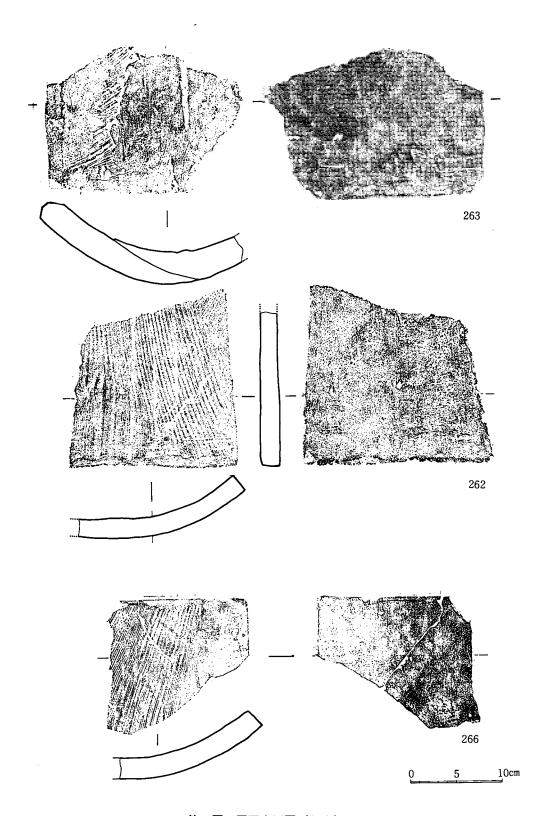
第38図 平瓦実測図(格子目叩き文!!!類)



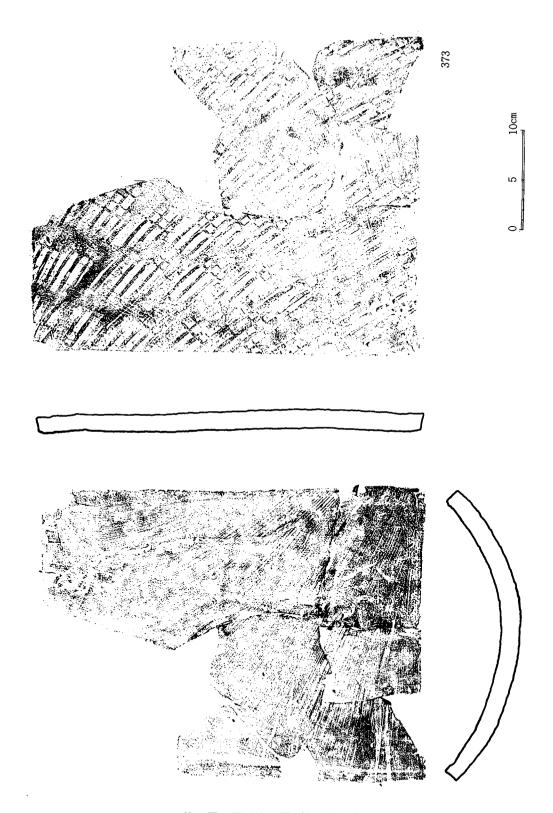
第39図 平瓦実測図(針行格子目叩き文、繩目叩き文 I・II類)



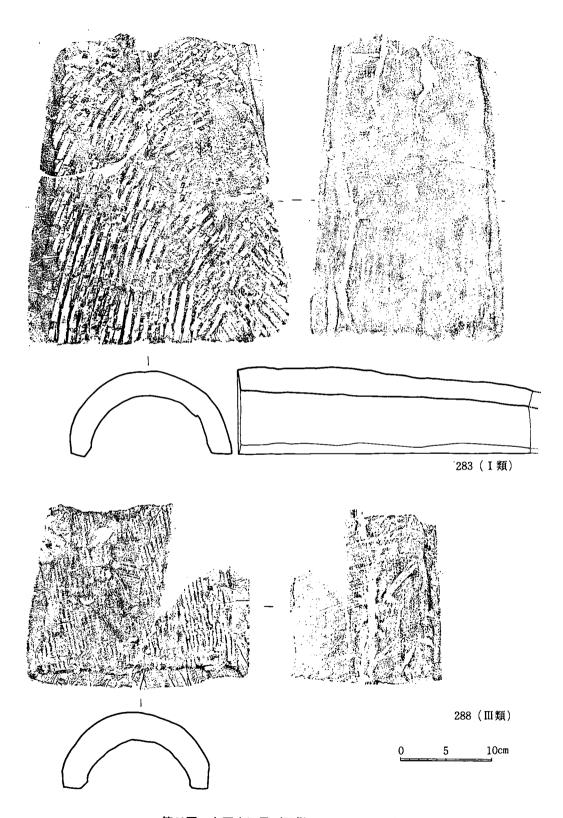
第40図 平瓦実測図 (無文)



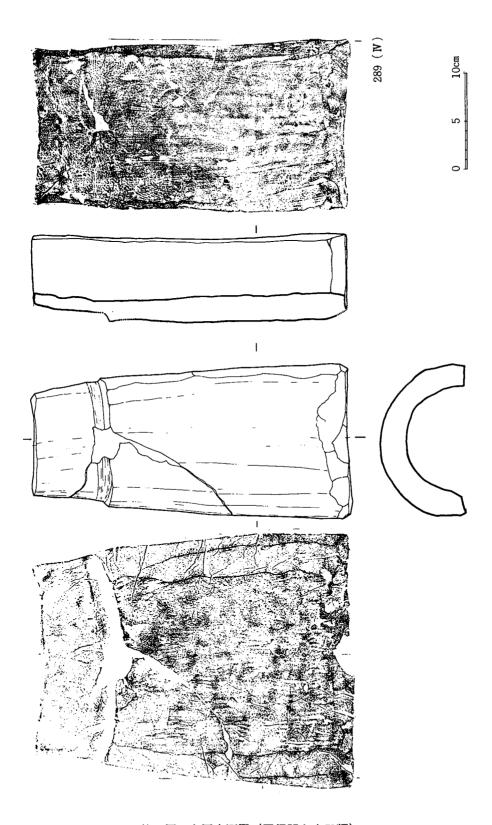
第41図 平瓦実測図 (無文)



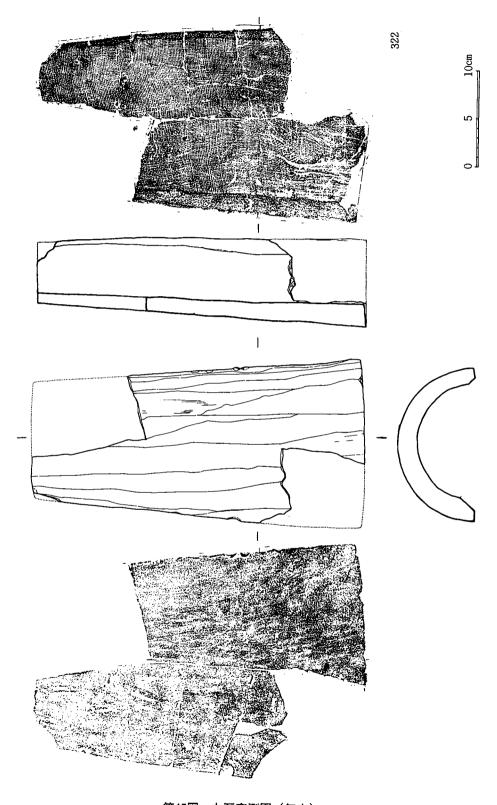
第42図 平瓦実測図(部分格子)



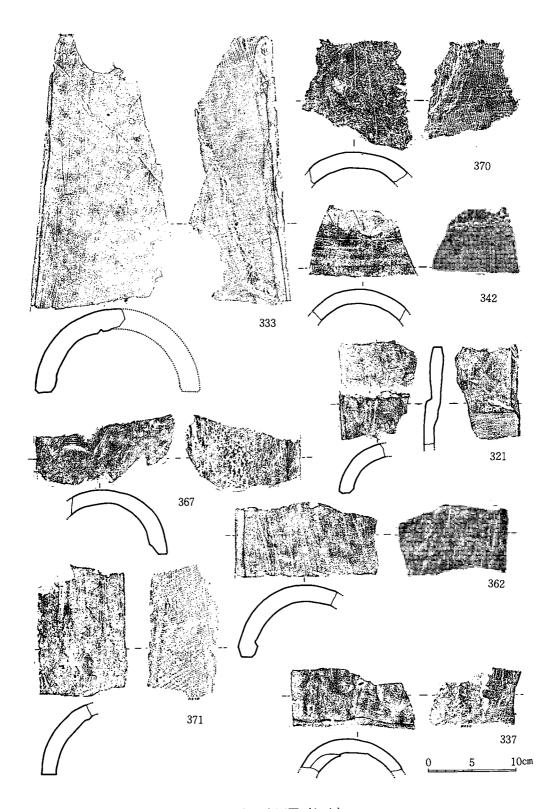
第43図 丸瓦実測図(平行叩き文 I・III類)



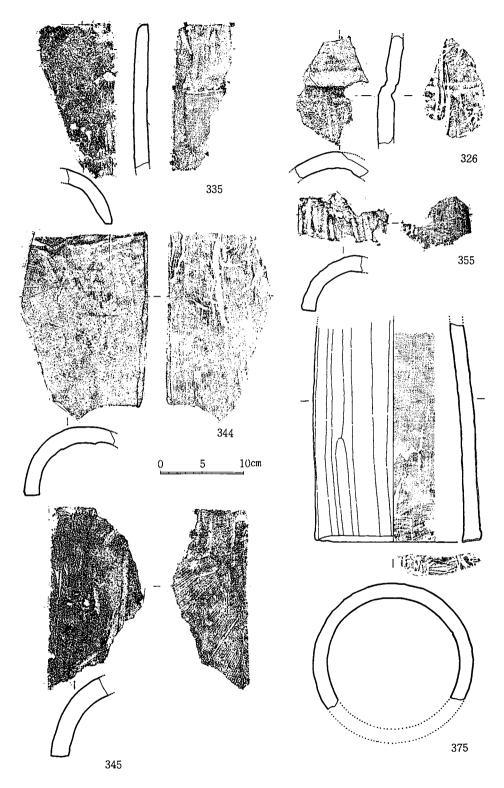
第44図 丸瓦実測図(平行叩き文Ⅳ類)



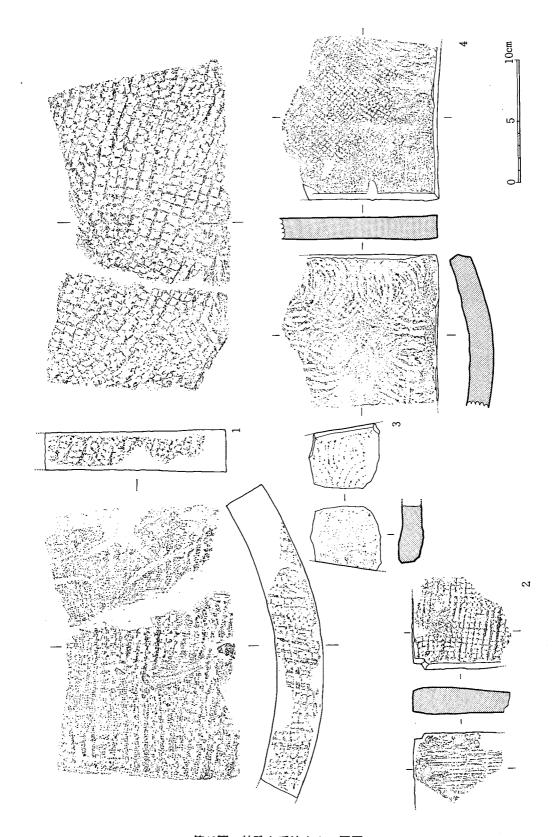
第45図 丸瓦実測図 (無文)



第46図 丸瓦実測図 (無文)



第47図 丸瓦 (無文)・土管実測図



第48図 特殊な手法をもつ平瓦

Г	v					1	1	1	<u> </u>	1	1	,	1	1			1	I				1
(単位cm)	H H	扁															凸面ナデ調整	,	凸面十六調整		:	
	크 구 각	H H H	11区 J 14	11区K-15 J-15	IV層	IIKJ-5	Ⅱ区J-12	11区L-15	ПК	11KL-11	11区 J —14	11区J-4	II ⊠ K −11	II ⊠ J −18	IIK	II ⊠ K —18	IIKG-14	ПВ	IIKK-10	II区IV層	II K L-17	IIKL-18
	4	 ∪ ዅ	1.8~3.0	2.3~3.5	2.5~3.2	2.5~3.2	2.1~2.8	2.2~2.8	2.5~3.0	2.3~2.4	1.4~2.3	3.5~3.6	3.0~3.1	1.6~2.5	2.7~3.4	3.9~4.9	2.0~3.5	2.5~2.7	2.7~2.8	2.6~3.2	3.4~3.7	3.4~3.5
	1		無 の を の を の の の の の の の の の の り の り の り の	例	黒雲田を 多く含む	無戦中を多く会む	黒磐母を合む	無戦争を	黒磐田を 含む	黒雲母を 含む	黒鉱母を 含む	黒雲母を 含む	黒磐母を含む	黒雲田を 含む	白色石粒を含む	黒雲田を 含む	4340		黒雲田を 含む	無類田を 含む	かなからなり、一般なりなった。ないなった。ないなった。ないないないないないないないないないないないないないないないないないないない	ಚಿತ್ರಿದ
	生	¥ ¥	虫	嵔	良	嶯	真	良	氓	磁点	瀬	斑	斑	412代	やよりほ	良	極良	虫	屯村	屯式	甚	長
	在置		白灰色	淡灰色	灰白色	灰白色	黄灰色	灰白色	黄灰色	青灰色	青灰色	黄灰色	黄灰色	淡灰色	黄灰色	黄灰色	青灰色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色
ļ	分割	方法	1	1	∄	分割界 線 有]	1	1	1	1		分割界 線 有	1	1	1	<u>-</u> 1		"	1		
		両端部の縁 取り	有	無	争	車	有	無	1	兼	兼	柜	柜	柜	兼	兼	兼	单	柜	单	单	单
		倒増部の 縁 取 D	有	有	無	有	有	兼	柜	柜	年	棰	1	棰	兼	有	兼	兼	柜	柜	争	J
	層	目いな]		1	有(-2条)	1	1	1	1	1	ı	1	1	1	1	1	1	1	-
		布目の 単位	13×14	11×11	9×12	16×14	17×15	11×12	有	有	有	14×14	单	单	柜	13×12	13×17	柜	J	16×16	11×11	11×11
	囙	粘土継目	有(S)	有(S)	1	有(S)	有(Z)	有(Z)	1]	1	1	1	ı]	1	I	ı	_	有(Z)	J	1
		桶枠痕	車	有(2.2~2.6)	有(~3.5)	有(2.4~3.0)	有	单	有(3.0)	有	重	有(2.3~2.6)	有(2.5~2.9)	有(3.0)	有	有(~3.4)	有	有	1	卓	单	有(~2.9)
		糸切痕	卓	車	車	有(横)	争	单	有	有	!	有(横)	有	有]	1	1	有	柜	有		1
		同婚部の 報 取 り	兼	单	車	单	有	有	無	有	兼	有	有	無	兼	有	兼	有	单	有	兼	兼
	恒	画権部の 泰 取 り	单	单	单	柜	单	有	有	柜	有	車	1	有	柜	有	单	車	卓	車	单	-
		甲板の大きな	5.5~6.0	4.5	4.5	1	1	1	4.0	4.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		ı
	=1	即目の単位	1.1	0.4	0.4	0.3	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	9.4	9.4	0.4	9.0	0.4	9.0	0.4	9.0	9.0	0.4	9.0
		種田の図の	平行1	平行IV	平行IV	平行IV	平行IV	平行IV	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行IV	平行Ⅳ	平行皿	平行IV	平行皿	平行Ⅱ	平行IV	平行Ⅳ
	安告	ì	001	700	003	400	905	900	200	86	600	010	011	012	013	014	015	910	017	810	610	020

Г	ψſ.		,	1	 		T	1	1	1	1			1	ىقد	1	1	_	1		1	
(単位cm)	垂水				-										凸面ナデ調整 凹面ケズリ調整					凹面と広路面 に平行タタキ		:
	五字子		II ⊠ I −20	ПК	II 🗵 J – 17	ПК	II区I層	ΠKJ−13	ПК	ПКF-8	П区口層	Π <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u> </u> <u> </u>	II K L - 19 J - 16 I - 10	П⊠J-20	II区IV層	11区11層	II区IV層	ПК I —16	II区J-15	IIK I — 5	II区IV層	IKA
	41 <u> </u>		2.3~2.8	2.6~3.0	3.0~3.4	1.8~2.6	2.3~3.1	2.8~3.2	1.4~2.5	3.6~3.7	2.6~2.7	2.7~2.8	3.5~3.7	2.7~3.0	2.3~2.6	1.8~3.1	2.1~2.2	1.5~2.4	2.1~2.6	2.6~3.2	3.3~3.7	2.5~3.1
	된 +		大小の白色 石粒を含む	黒色雲母を 含む	白色石粒・黒雲母を含む	黒雲母を 含む	黒雲田を 含む	黒雲田を 含む	照 磐 由・ 大小石粒を 合む	黒 戦 申・ 大小石粒を 含む	無戦中・大人石哲や	無 戦 毎・大小石哲を	無 観 串・ 大小石粒を 含む	田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	白色石粒 無鍵 毎を含	ロの 田田 田田 田田 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本	自色石粒・無軽申を含む	自色石粒・ 無験中を含	白色石粒・ 悪鉄串を含 む	白色石粒・用鉄串を合む	無鍵母・ 赤色石粒を かむ	黒雲母・ 赤色石粒を 含む
r	世	¥	പ	良	武	氓	氓	氓	極良	良	民	氓	പ	氓	嵔	41式	11式	팺	屯八	不成	長	പ
	金	£	黄褐色	灰白色	非 発 な が の か か の の の の の の の の の の の の の の の の	灰白色	赤帯女 味び褐をた色	黄褐色	淡灰色	白灰色	灰白色	淡灰色	黄白色	黄白色	黄褐色	灰白色	灰白色	黄褐色	黄褐色	黄灰色	黄灰色	灰白色
	分割	方法	分割界 線 有	1		1	分割界 額 有	囙	分割界 線 有	1	1	1	1]	1	囙	1	1	1	1	1	1
		両端部の 線 取 り	無	有	梅	神	争	争	兼	争]	兼	1	l	有	兼	兼	神	兼	1	1	兼
		領増部のの検取	有	車	年	年	单	兼	柜	有	争	兼	柜	角	有	角	单	ļ	柜	申	柜	兼
	層	めい目	1	1		1	1	1		ı	ı	l	1	有(一条)	l]]			丰	1	
	<u>'</u>	布目の 単位	13×18	角	柜	柜	争	柜	11×12	柜	柜	18×14	13×11	14×13	有	单	13×17	19×14	14×14	1	極	申
	囙	粘土継目	. 1	1	有(S)	有(Z)	有(S)		有(Z)	有(Z)		1	1	1	-	有(S)	1			[]	有(S)	
		桶枠痕	有(2.7)	有(2.8)	有(3.0)	車	有(3.1)	J	有(2.7~)	单	ı	有(2.4)	有(2.9)	有(2.7)	1	争	有(2.9)	有(2.5~)	有(2.5)	重	有(2.8)	有(2.9)
		糸切痕	1	有	ı	有(横)]	争	柜	角	争	争	1	j	1	争	角	兼	单	1	1	車
		両雄部の 験 取 り	兼	有	兼	单	申	有	兼	有		兼	車	1	有	無	兼	有	兼	兼		有
	垣	側端部の 縁 取 り	有	有	有	单	車	有	有	单	有	兼	争	有	有	有	有		有	有	有	有
		甲板の 大きさ]		5.3	1	1	1	1	1	1	1		-		1	1		1		I
	뷥	叩目の 単位	0.4	9.0	9.0	0.4	9.0	0.4	0.4	0.4	9.0	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	9.0	0.4	9.0	0.4
		叩日の 種 別	平行Ⅳ	平行皿	平行皿	平行IV	平行皿	平行Ⅳ	平行IV	平行IV	平行皿	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行IV	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行IV	平行IV	平行IV	平行IV	平行IV	平行IV
	出	E A	021	022	023	024	025	970	027	028	029	030	031	032	033	034	035	920	037	038	039	040

1	*	ıb.	1		Ι	Γ	I		1		T					<u> </u>			1			
(単位cm)	######################################		Ş.	加減						指痕				四面にタタキ	凹面狭端部に 平行タタキ	I	描					攟
	년 구 -		1区3-5	II ⊠M – 9	IIKL-18	II区IV層	ı	1	IIKL-15	II区IV層	II区J-5 I-5	田区1層 II区1層	IIKL-11	II区I層	11⊠н—6	II区IV層	ПК	1区 3 — 5	IKI-14	11区Q-16	IIKR-15	11区リー15
	×		2.0	2.0~4.0	2.5~3.5	2.5~3.0	1.0∼	1.5~3.0	3.0~3.5	3.0~4.0	1.5~2.0	3.0~3.5	1.5~2.0	2.0~2.5	2.0~3.5	2.0~3.0	2.0~4.0	2.5~3.5	2.5~	2.5~4.7	1.7~2.5	2.1~3.3
	1		黒雲母・長 石を含む	級	級	大 村 多 密	緊密・黒色粒を含む	聚	搬	緊	級	級	緊塞	聚	級	聚	緊	級	搬	緊密・黒雲 母を含む	緊密・黒雲母を含む	聚石 档 筋砂
	台	发	或	40%	40次	-世代	故		40%	虹	40%	超	电	4124	邨	40代	亞	虹	屯村	- 田代	嘅	点
	4		淡桃色	灰白色	灰白色	舟	灰白色	الة (#)	黄桃色	赤桃色	灰白色	赤白色	百色	凸灰桃色 凹黄黑色	来 中 中 中	伯色	百色色	伯色	41)	凸灰 凹灰 熱 の	凸 灰 但 凹凿灰色	淡赤灰色
		力法	※ 	割押				調整布	分割界線有	_ **	分割裁解	1	——————————————————————————————————————	리티	415				割裁布	디크	디크	分割界 線 有
	41	両端部の 場板 取り	柜	一 少쬻	兼	1	兼	無金金	有金额	有	兼	有	#	-	有	有	車		一种	柜	柜	兼
		側端部の 両縁 取り 楊	車	車	挿	ı	有	单	柜	有	神	有	柜	兼	柜	有	柜	兼	兼	争	有	有
	垣	目いな	ı	1	J	1	1	1	1]	1	1	1	l	1	1	1	1	1	ı	1	. 1
1	10.	布目の単	16×19	14×15	13×13	14×16	16×14	15×20	20×17	11×10	16×18	12×11	14×15	柜	18×18	12×13	12×12	10×12	柜	13×13	15×20	12×16
	囙	粘土継目	有(S)	有(S)	有(S)]	1			1		1	1	1	1	1	有(S)	ı	ı	-	有(S)	有(S)
		桶枠痕	有(~3.0)	有(2.0~2.5)	有 (2.5~)	有(2.5~3.0)	有 (2.3~)	有(2.5~3.0)	有(~~3.0)	有 (2.5)	有(2.0~2.5)	有 ~3.0)	有 (2.0~)	1	有 (2.5~)	有 (2.5~)	1	有 (2.0)	1	有 (2.5~)	兼	(~3.0)
		糸切痕	有	1	有		-	有]]	有	有	車	有		卓	1	J	有	有	有	有
		両端部の 縁 取 り	有	有	澌		兼	無	有	有	無	有	無	1	無	兼	車	1	有	兼	有	有
	垣	側端部の縁 取り	有	有	車]	垂	有	有	有	有	有	有	有	有	有	棰	单	車	有	有	有
		明板の大きさ	3.7~4.7	4.5~5.5	3.5~4.0	1	4.5	4.0	5.0	4.0	5.0	4.0	1	5.0	4.0	4.0	4.0	4.0		4.5	3.8	4.0
	£]	叩目の 単位	0.5	0.3	0.4	9.0	9.0	0.5	9.0	0.4	1.0	0.4	0.4	9.0	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.4	0.4	0.5
		叩目の 種 別	平行皿	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行皿	平行皿	平行皿	平行皿	平行Ⅳ	平行Ⅰ	平行Ⅳ	平行IV	平行皿	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行IV	平行IV	平行Ⅳ	平行Ⅳ	平行回
	中		041	042	043	044	045	046	047	048	049	020	051	052	053	054	055	920	057	058	020	090

第10表 平瓦観察表(4)

	?		}		面十万調整				994	-											
垂					四面十				四面にタ												
于去	į Į	II K K −15	ΙΚΆ	II 🗵 I – 7	II区IV層	II区IV層	II区IV層	II⊠J-10	加区	m区IV層	II⊠ J −14	II⊠J-14	II ⊠ J −12	IIKD-5	II区IV層	IIK	ΙΚΆ	ΙΚΆ	NIK	ΙΚΆ	IIZH-12
AL Th	- 1	2.3~2.7	2.7~3.1	1.7~2.3	2.4~2.8	3.3~3.5	2.9~3.7	2.3~2.6	2.6~2.9	1.1~1.6	2.3	2.5	1.7	2.2	2.9~3.0	1.7~1.8	1.2~2.4	2.7~2.9	2.0~2.2	2.3~2.8	2.2
报 十	1	A 内 数 多 多	級	御	やや密 黒雲田を含む	倁	緊塞	御	緊密	塞	緊密	銀	凝	大小の石英を含む	大小の石英を合む	大小の石 英を含む	大小の石 英を含む	大小の石莢を含む	大小の石英を含む	大小の石 英を含む	稅
金	30	良	氓	Щ	斑	虫	良	പ്	祖代	良	長	民	極良	長	虫	真	良	చ	പ	嶯	良
角	ř	紫灰色	灰白色	灰白色	灰白色	淡桃色	灰白色	凸淡桃色 凹灰白色	西 第ロ色	灰白色	灰白色	黄褐色	青灰色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	黄褐色	黄褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色
分割	方法	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1		1	1	卓王]		1
	両端部の 縁 取 り	单	有	無	兼	有	重		1	兼	柜	柜	单	柜	柜	兼	兼	1	車	兼	有
	側端部の 椽 取 り	有	卓	有	巣	单	有	丰	有	棰	单	有	年	無	1	梅	兼	1	1		单
ı_	ぬい目	1	l	1				1	1			1	1		1	l	1		1]	1
国	布目の単位	12×13	ı	18×16	12×10	有	11×13	14×14	重	13×12	16×14	13×13	16×16	10×11	10×12	8 × 8	16×13	18×18	12×12	12×11	6 × 9
囙	粘土継目]	1		1	I			1		1	有(S)		1	1	1	1			有(Z)	
	桶枠痕	有(3.0~)	J		1	[1	有(2.7)	1	兼	兼	兼	有(2.3~2.8)	声	柜	有	1	柜	柜	1	单
	糸切痕	1	有]		1	1	極	1	兼	布	有(横)	毎]	1	İ	1	1]	1	有
	西端部の 縁 取 り	兼	角	兼	兼	丰	車		1	兼	車	有	車	兼	兼	1	兼	1	兼	兼	車
椢	領端部の縁 取り	角	丰	棰	有	丰	年	黒	車	兼	捶	牵	争	兼]	兼	兼	1	1	1	垂
	引板の大きな	1	4.2	4.5	1	3.0	1	ı	7.2	6.0	1	4.5	5.5	1	1]		1	1	1	
扫	明日の単位	0.4	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.5	0.5	0.7	0.5	1.1	0.95	1.2	1.0	6.0	1.1	1.1	1
	即目の種	平行Ⅳ	平行田	平行皿	平行IV	平行IV	平行IV	平行IV	平行Ⅳ	平行皿	平行皿	平行IV	格子田	格子I	格子Ⅱ	格子I	格子I	格子Ⅱ	格子I	格子I	格子
山		190	790	063	190	90	990	290	890	690	020	071	072	073	074	075	920	077	078	079	080

ſ	,	₩ ———	7		1	-		1		inu	1]	_	1	l			Mrs At	1.1	1		1
(単位cm)		篇								凹面に布の継ぎ たしの継い目					1枚造り			四面ナデ調整 雄部に格子タタキ	倒端面に格子 タタキ			
	- - -	田田田田	IIXF-12	II K D - 4	ПКН-14	II区IV層	IIK	II区IV層	II & F -11	II I J - 4	II区IV層	ΠK	皿区工層	11区 J —17	田区職	١ĸ	II区IV層	II区IV層	IIX	国区	II区IV層	11 KM-8
		¥U .	2.2~2.3	2.2~2.9	2.2~2.3	1.8~2.6	2.0~2.8	2.0~2.4	2.3~2.6	2.4~2.5	2.5~2.8	1.9~2.2	2.5~2.7	1.5~1.6	1.9~2.5	1.3~1.5	1.8~2.3	1.9~5.1	1.8~1.9	1.8~1.9	1.9~2.2	1.5~1.6
		后	大きな石粒 を含む	大きな石粒 を含む	大小の石粒を多く合む	金田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	金銭を金銭の金銭を付ける。	白色・ 赤褐色石粒 を含むむ	棿	搬	搬	솅	倁	白色石粒を 多く含む	石粒を含む	觬	搬	赤褐色石粒を含む	ϴ	石粒を多く合む	棿	棿
Ī	4	以以以	亞	亞代	長	虫	良	良	良	പ	不良	良	極良	斑	良	爾內	商户	不良	極良	亞式	不良	亞
	4	別	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	茶褐色	赤珠本なるなる。	黄褐色	赤珠を持るかの	青灰色	赤 様なな も かな 色 か	黄褐色	赤珠をおびた	青灰色	赤年飲味が物をためた。	青灰色	赤褐色	黑灰色	赤褐色
	分割	方法	١	1			1	1	1	1	[子子]	1	1	囙	-	= I		1	1	1		囙
		国格部の 数 田 の	1	兼	1	兼	有	無	柜	無]]	兼]	1	1	兼	猟	1	兼	1
		間端部の の縁取	兼	柜	-	1	有	1	年	1	棰	有	1	無	兼	兼	柜	1	兼	車	有	無
	屉	目いな	1	1	有	1	1	!	柜	車	1	1]	1	l	1	1	1	1	1	-	1
		布目の 単位	13×10	12×11	12×11	8×7	12×12	13×13	16×13	8 ×11	13×13	13×13	13×13	16×16	16×14	10×11	13×13	1	1	11×11	11×11	1
	囙	粘土継目	1	有(S)	1	有(Z)	1	1	1	1	ı	ı	有(S)	1]	1	1	ı	}	1	. 1
		桶枠痕	有	有	有	車	l	有(2.6)	卓	有 (2.0~2.6)	单	有	祵	ı	l	車	車	1	1	单	有(3.0)	1
		糸切痕		-	1	兼	1	1	有	有		1]	有	兼	单	1	兼		兼	ı	極
		両端部の 縁 取 り	1	無]	兼	申	兼	有	兼		1	1	無	1	1		無	兼	1	兼	_
	厘	側端部の 縁 取 り	兼	車	ļ	1	单	1	有	#	兼	兼	無	兼	兼	兼	· 单	1	兼	单	兼	兼
		甲板の 大きさ	[!	0.9	ı			5.0	6.3	1		1	1	ı	1	1		1	1		
	- 1	明日の 単位	1.1	1.3	1.1X1.3	1.1	1.0×1.2	1.1	0.5	9.0	0.55×0.6	0.7	0.75	1.0	1.0	0.5×0.6	9.0	0.7	0.5×0.7	1.2	0.3×0.5	9.0
		叩日の 種 別	格子I	格子I	格子I	格子I	格子I	格子I	格子皿	格子皿	格子皿	格子皿	格子皿	格子」	格子I	格子皿	格子皿	格子皿	格子田	格子I	格子IV	格子皿
	*		081	082	083	2 8	085	980	087	880	680	060	091	760	093	760	962	960	260	860	660	100

种	£.							クキの	Ĺ					に格子	ラケズ			43			
型	E							回面夕 後布	1枚造					無 ラクキ	四回(三)			焼きひず			
五子		II区IV層	II区IV層	II区IV層	II区IV層	皿区1層	皿区IV層	皿区11層	II区IV層	IK	ΙΚΆ	11区1-14	II区IV層	m区N層	皿区工層	II区I層	II区IV層	IIK I -16	II区I層	IKA	II区J-10
<u> </u>		2.3~2.4	1.9~2.1	1.8~2.0	1.7~1.8	2.6~3.1	1.3~1.7	2.0~2.3	1.3~1.5	2.3~2.4	2.0~2.7	1.6~1.7	1.6~1.8	1.8~2.0	1.7~2.3	2.0~2.1	2.6~2.7	1.6~2.7	1.4~1.7	1.8~2.0	3.2~3.3
개 . 		大小石粒を を含む	白色石粒を含む	白色石粒を 含む	白色石粒を 含む	密・白色石 粒を含む	密・白色石 粒を含む	多のの名の名を合うない。	細	大小石粒を含む	密・赤色小 石粒を含む	絕	密・白色小 石粒を含む	白色の子子がある。	密 白色小石粒 を多く含む	觬	倁	钠	白色石粒を多く合む	白色石粒を多く含む	宠
世	7C/1X	民	民	包式	良	商员	政	極	氓	虹	極良	良	斑	極良	極良	Щ	斑	極	協	極良	虫
4	E E	黄褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	青灰色	青灰色	青灰色	黄褐色	赤褐色	青灰色	黄灰色	赤珠を帯び た質灰色	青灰色	青灰色	黄白色	赤味を帯び た背灰色	黑灰色	青灰色	青灰色	黄褐色
分割	力法	1	1	1	EI		1	EI	1	1	囙	1	1	1	1]	1	石 夕 篠 田 智 年 ご 報	1	引 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	1
	両端部の縁 取 り	1	巣	1	卓	兼	兼	巣	兼	兼	1		1	兼	1	J	1	兼	兼	ı	柜
	関始部の縁 取り	兼	1	車	巢	1	1	重	兼	柜	兼	角	兼	1	兼	有	重	兼	1	車	有
更	田いぬ]]]	1		1	I	1		1		l		1	1	1	柜
	単位位	12×13	11×12	12×12	13×13	12×12	9 ×11	柜	15×16	11×11	9×13	15×13	11×13]	1	有	年	19×19	有	有	有
汩	粘土総目	有(Z)	1		1	1	有(S)	1		1]]		1	1		1	有(Z)	Ţ		
	桶枠痕	有	有	柜		单	有(3.3)	1	兼	車	有	柜	单	車	1	i	1	有	車	申	有
	糸切痕	1	争	兼	1	单	单	1	兼]	有	1	柜	車	角	l	重	有	有	有	争
	両婚部の 様 取 り	1	巣		有	兼	猟	兼	無	1	1		1	1]]		無	谯	1	有
屉	国協部の 泰 切 り	兼		兼	兼	1	1	無	無	兼	有	兼	兼	兼	巣	重	重	兼	1	進	角
	日本である	1	ı	1	1	-	ł	ı	1	1	1			i	[1	1	1	1	1	ı
뷥	明目の単位	9.0	0.3×0.4	1.2	0.5	0.5×0.6	0.55	0.7	1.0	1.0	0.5×0.6	0.3	0.7	9.0	0.3	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0
	明問別	格子皿	格子Ⅳ	格子I	格子皿	格子皿	格子皿	格子皿	格子I	格子I	格子皿	格子Ⅳ	格子田	格子皿	格子IV	格子皿	格子皿	格子皿	格子皿	格子皿	格子皿
티	番 大 一	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120

_[Ħ	₽.							懓		1	<u>+</u>					<u>†</u>	<u>+</u>			<u>+</u>	
(単位cm)	#	罢			į				粘土紐痕跡有		長方形格子	飼端面に格子 タタキ					側端面に格子 タタキ	側端面に格子 タタキ			側端面に格子 タタキ	
	작 국 구	田田田田	ΙΚΆ	II区IV層	皿区11層	IIK	ΙጃΑ	IΚ	ΙΚ	IIK	IIK	II区IV層	II区IV層	II区IV層	田区	ПК	IKA	II区IV層	IIK	11KK-9	11区1層	6-H図II
		ф v	1.9~2.0	2.0~2.1	2.2~2.3	2.0~2.2	1.8~2.2	1.8~2.0	1.8~2.1	2.1~2.4	2.2~2.7	1.5~1.6	2.0~2.1	2.3~2.5	1.4~1.6	2.1~2.2	2.1~2.5	1.9~2.1	2.1~2.2	1.7~1.8	1.5~1.6	2.0~2.4
	₹ +	1	大小の白色 石粒を含む	白色石粒を含む	白色・赤褐色 石粒を含む	白色小石粒を多く合む	白色小石粒を多く含む	白色小石粒 を含む	聚	石粒を多く含む	白色・赤色石粒を含む	剱	白色小石粒 を多く含む	やや粗	白色小石粒を多く含む	密 白色石 粒を含む	黒色石粒を 含む	白色石粒を含む	やや粗く大小 石粒を含む	白色石粒を多く含む	白色石粒を多く含む	白色・赤褐色石粒を多く含む
ľ	世	<u> </u>	民	氓	良	氓	Щ	氓	氓	良	良	南	山	氓	極良	虫	虫	極良	極良	4氏	極良	中型
	在	£	黄灰色	赤帯背珠が次をためた色	青灰色	黄灰色	黄灰色	黄灰色	赤褐色	赤褐色	黄褐色	青灰色	茶灰色	黄灰色	青灰色	黄灰色	黄灰色	青灰色	非様なながののなり	赤褐色	青灰色	赤味 帯びた 灰色
	分割	力法	ı	1	1	1			1	Ð			囙	П	1	囙	1	1	1	-	I	1
		両端部の縁 取り	兼	1	兼	兼	有	無	1	单	有	1	-	1	1	兼	1	1	柜	1	1	無
		側端部の 移取り]	兼	柜	無	無	单		申	重	兼	单	柜	柜	兼	兼	兼	有	1	無	1
	厘	目いな	1]]]	1	1		有	-	: 1	1	柜	i	1	-	i	1	1	
		布目の 単位	有	8 ×13	有	有	14×14	車	16×16	13×13	有	有	有	ı	13×14	10×14	有	有	19×22	19×21	20×22	-×12
	囙	粘土継目	1	有(S)	1	1	1		1	1	i	. [1	1	有(Z)	1	有(S)]	ı	有(S)
		桶枠痕	有	有	有		有(2.3)	有(2.1~3.1)	单	有(3.0~3.6)	有(3.9)	1	1	有(2.0~)	有	I	極	柜	車	有 (3.1~3.3)	有(3.2)	1
		糸切痕	有		有	有	兼]	兼	無	有	有	ı	無	有	有	ì	有	1	单	有	有
		両端部の 縁 敬 D	無]	兼	兼	兼	单	1	种	有]	1	1]	兼	I	j	有	1	ļ	有
	垣	飼場部の縁 取り	l	無	極	無	兼	申	1	单	单	兼	申	单	兼	兼	兼	兼	单	1	兼	1
		円板の大きな	1	1		ı	1	4.0	-	1	4.2	1	1			5.0	1	1	1	1	1	
	<u>-1</u>	専門の存	8.0	0.45×0.65	9.0	0.7	9.0	0.3	1.1	9.0	0.5×0.9	0.7	9.0	1.0	0.7	0.5×0.6	8.0	9.0	9.0	9.0	9.0	0.3
		種目の	格子II	格子皿	格子皿	格子皿	格子皿	格子IV	格子 I	格子皿	格子	格子皿	格子皿	格子 I	格子皿	格子皿	格子Ⅱ	格子皿	格子皿	格子皿	格子皿	格子Ⅳ
	中	P H	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140

_
8
実
欧
觀
回
H
表
4
無

***			凹面と狭端面 に格子タタキ	タキ後ヨコ 1向の条痕		粘土紐痕跡有	粘土紐痕跡有	諸国と狭路 に右子タタ					側端面に格子 タタキ	狭端面に格子 タタキ	側端面に格子 タタキ	凹面はタタキ の後布				側端面に格子 タタキ	側端面に格子 タタキ
			国じ	カカ		*		郎旧*	8			<u> </u>	画を	狭々	寛々			_		館ぐ	童み
迁 本 室		II区IV層	ΠK	IKA	m区IV層	II区I層	I区I層	II区IV層	II 🗵 K —	II区I層	II区IV層	II⊠J-18	ИΚ	II区IV層	II区IV層	II⊠J-18	II区IV層	II区I層	II区I層	IIK	IIK
(<u>m</u>	1	1.2~1.8	2.0~5.2	2.3~2.5	2.3~2.5	1.8~2.2	2.3~2.6	2.5~3.1	2.3~2.4	2.1~2.3	2.6~2.7	2.0~2.2	1.9~2.3	1.8~2.0	2.2~2.9	2.3~2.5	2.1~2.5	2.1~2.9	1.7~1.8	1.7~2.2	3.1~3.6
+		色小石粒 多く含む	小石粒を含む	色大小石を多く含	色大小石を多く合	例	小石粒を含 む	色小石粒 含む	黒石小石粒 を含む	白色石粒を 多く含む	色石粒を、く合む	色石粒を く含む	色石粒を	色石粒を	白色・赤褐色 石粒を含む	白色石粒を含む	色石粒をむ	铋	大小の血色 石粒をゆむ	1色石粒を7く合む	赤褐色の石粒を含む
43	3	不良 差	Щ	良性白粒む	良なり	-田代	良小む	良冬日	良り	良多	日多	日参	良多	良多	包占	長	山名	-田代	氓	പ	TIE!
要		色	鱼	角	鱼	和	41)		和	御	和	鱼	钿		和	桕	動	粗	色	色極	鱼
4	<u>.</u>	黄灰	黑灰	黑灰	黑灰	駲	뻬	赤珠を帯び た灰色	黄	素	淡灰	青天	淡灰	赤味を帯びた背灰色	淡灰	淡灰	青灰	淡灰	青灰	黑灰	民
分割	力法				1	j	1		1	1	1				1			1	回 夕 後 国 型 に 数		1
	両雄部の 験 取 り	单	兼	柜	I]	無	車	1				1		1	1		1	1	1	澌
	倒端部の縁 取り	有	, 	有	有	有		車	桓	有	1	单	極	兼	柜	柜	兼	兼	1	兼	兼
更	目いな	1	1	 		1	l] 	1		1	种		1		1	1	1]]	1	
Щ	新目の 単位	有	单	15×19	15×19	12×13	13×13	13×12	有	22×22	20×19	柜	柜		12×10		10×16	有	13×14	車]
扫	粘土絲母	1	1	1]			1	1				有(S)		有(乙)	有(Z)]		
	桶枠痕	有(1.8~2.2)	1		1	重	有(3.0)	有(4.1~)	有	有	神	1	单		有	有	申	1	1	有	1
	糸切痕		巣	有	单	黒	無	1	1	1	有	柜	种	种		1	有	有	有	1]
	両指部の 禁 形 コ	兼	兼	巢	兼	1	兼	兼	ı		Ì	1		巣		j		1	1	1	無
桓	無難の数での数を表していません。	兼]	有	有	兼]	兼	兼	柜	1		兼	1	兼	单	猟	兼		兼	無
	日後の大学の	3.9	1	4.0	4.0]]]	1		1	1		1	1	ı	1]		5.0
뷥	甲甲位	0.3	0.7	9.0	9.0	0.5	0.5	8.0	0.5×0.7	9.0	6.0	9.0	0.8	0.7	0.7	0.8	0.3	0.3×0.5	9.0	0.7	0.7
	明日の種別	格子Ⅳ	格子皿	格子皿	格子皿	格子田	格子皿	格子Ⅱ	格子皿	格子皿	格子Ⅱ	格子田	格子Ⅱ	格子皿	格子皿	格子Ⅱ	格子Ⅳ	格子Ⅳ	格子皿	格子皿	格子Ⅳ
II H	毎 た	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160

第15表 平瓦観察表(9)

(単位cm)		孟	側端面に格子 タタキ	側端面に格子 タタキ	側端面に格子 タタキ	凹面にナデ 調整	凹面にナデ 調整		:													
			11KG-8	пК	山区IV層	II区IV層	II区IV層	П <u>К</u> К−8	II⊠L-6	II区IV層	Ⅱ区J-14	ПК	IIK	山区	田区	II区IV層	II区J-13	N Z	IK	四区	m区IV層	ΙΚ
	×	承	1.7~2.7	1.9~2.1	1.85~1.95	2.0~5.2	1.9~2.1	1.0~1.9	1.0~1.7	1.5~2.4	1.4~1.9	2.4~2.6	1.8~2.0	1.8~	1.6~1.7	1.4~1.6	1.65~1.85	1.6~2.I	2.2	2.3~2.6	2.1~2.4	1.9~2.5
	1		觬	觬	凝	镪	鍛	色	棿	棿	チ	俰	옍	級	俰	俰	Ѳ	倒	チ	色	ႎ	チ
ľ	- 七 其	3.5 X.	型	虫	良	極良	極良	極良	極良	極良	極良	良	良	極度	41式	長	പ	చ	చ	型	చ	斑
	4 響	er Et	灰色	暗灰色	灰色	凸淡茶褐色 凹暗灰色	暗灰色	暗灰色	暗灰色	暗灰色	暗灰色	商	淡程灰色	暗灰色	厌	淡黄橙色	灰白色	黄橙色	黄橙色	灰白色	灰白色	灰色
	分割	方法	1	1	1	l]	1]		1	凹面に分 割截線	l		1	1		1	1		1	.]
		両端部の 縁 取 リ	1	1	-	兼	兼	兼	i	1	单	1	有	1	单	1	1	柜	1	1	ı	有
		価端部の 縁 取 リ	無	兼	兼	1	[柜	有	柜	单	柜	有	兼	柜	柜	年	柜	1	柜	梅	有
	垣	用いな	1	1	1	1	1	1	J	1	1	1	1]	1	1)	1	1]	1	1
	, <u></u>	布目の 単位	17×24	24×20	20×16	Ī	1	20×21	20×18	13×13	19×18	14×11	14×13	10×14	17×15	1	13×16	1	26×30	23×21	13×10	13×14
	囙	粘土継目	1	1	1		1	1	ŀ	1		1	1	I	1	I	l	1	. 1		1	
		桶枠痕	有 (2.0~2.8)	兼	有 (2.5~3.0)	無	有	有(2.5~)	有(2.7~)	有 (2.6~3.0)	有(3.5~)	有(2.5~)	有(4.5~)	黒	無	無	兼	兼	兼	兼	兼	無
		糸切痕	有	有	有	有	1	無	兼	無	無	無	兼	单	有	单	兼	有(横)	兼	兼	兼	兼
		両端部の 縁 取 D			1	兼	兼	兼	1	1	兼	!	单	1	無	1	1	有	I		1	兼
•	屉	側端部の 縁 取 り	無	無	有	1	I	单	一种	兼	有	卓	棰	無	兼	車	兼	1	1		l	兼
		明目の 大きさ	j	1	1	1	1		1	1				1	-	5.4	1]]	1	9.9]
ŀ	ᆌ	叩目の 単位	8.0	9.0	0.8	0.7	0.5	0.6	0.55	0.45	1	1.0	0.55	0.3	0.45×0.6	0.3×0.6	0.6×1.0	0.5×0.9	0.4×0.7	$\frac{\text{Lr}}{(0.2\sim0.3)}$	$_{(0.2\sim0.3)}^{\mathrm{Lr}}$	Lr (0.3~0.4)
		叩目の 種 別	格子Ⅱ	格子皿	格子II	格子皿	格子皿	格子皿	格子皿	格子Ⅳ	格子	格子 I	格子皿	格子Ⅳ	斜行格子	斜行格子	斜行格子	斜行格子	斜行格子	組目 I	I 目謝	組目11
	# 다	催り	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180

٦	*	p			}								礟									
(単位cm)	箱											狭端面に 植物痕	凹面に支え棒痕	凸面狭端部 に布痕			:		繩綴じ		縄綴じ	編綴じ
	크 수 후	¥21-11	IIK	国区	IIK	皿区1層	採集	III区IV層	田区	ΙΚΑ	m区II層	田区	IKA	III区IV層	II区IV層	II ⊠ L-20	II区IV層	m区IV層	IKB	m区rv 層	m区IV層	II区IV層
	x <u>=</u>	U	1.3~2.3	.8~2.3	.7~2.3	1.3~1.8 I	2.1~2.4	1.5~2.2 I	.9~2.4 I	.8~2.3	.7~2.1 I	1.9~2.2 I	1.9~2.1	1.6~2.1 I	.9~2.2	.9~2.6 I	.9~2.3	1.5~2.2 I	1.9~2.2	1.5~2.0 I	1.6~2.1 I	1.25~2.1 皿区IV層
-	₹ +	1	%	第	領	御	第	無線を かっこう	御	網	領	網	網	網	密	術	御	絕	絕	極密	海	統
-	也	¥	虫		極良	祖代	亚式	良	乓	虹灯	亚式	極良	虹	虹	亞公	乓	極良	- 世代	極良	电	虫	斑
ŀ	金	er er	灰白色	白色	青灰色 複	灰白色	灰白色	灰白色	御	明灰色	由色	劺	淡灰色	淡灰色	白色	白色	白色	青灰色	白色	淡橙色	淡橙色	青灰色
		力法	l ≅		1	 ₹	民		 民	<u></u> <u></u>	民	でも登録の事	※	 ※	_ ₹	I 民	I R	判正	_ ₹	-		
F	- B	- C C				1					1	型 を を を を が が が が が が が が が が が が が が が			-		1			1		
		の 両端部の	单	有]	j	布	有	一			兼	兼	有	一	兼	兼	無	兼	有	单	有
		領塔部の縁 取り	单	兼	1	柜	柜	单	棰	兼	兼	兼	兼	有	有	布	有	色	兼	進	巣	兼
	層	∄ い¢¢	1	İ	单		1	1	1				_			1		1]	1]	
		布目の 単位	12×12	有	24×28	14×14	14×15	13×12	11×13	14×13	16×16	17×15	13×14	15×17	11×11	14×14	14×14	13×15	9 ×14	16×14	11×14	11×14
	囙	粘土継目	1	1	1	ı]	1	1	l]	1	1	ļ	1	1	1	l	1	1	1
		桶枠痕		半	巣	巣	当	無	無	無	兼	兼	無	巣	無	無	半	有(1.7)	無	϶	無	#
		糸切痕		1	当	当	当		兼	業	半	兼	兼	兼	兼	無	無	無	無	無	無	兼
		両端部の 縁 取 り	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	無	無	無	無	無	無
	橿	側端部の 縁 取 り	無	無	兼	#	#	有	無	兼	兼	兼	兼	有	有	無	無	無	1	1		1
		叩板の 大きさ		1	ı	_	1	-	_	1	1		1]]]	1	1]	1	I]
	扫	叩日の 単位	Lr (0.2)	(0.25~0.4)	Lr (0.3)	$\frac{\text{L r}}{(0.2\sim0.3)}$	Lr (0.25~0.4)	Lr (0.3)	Lr (0.3)	Lr (0.25)	$\frac{\text{L r}}{(0.25\sim0.3)}$	Lr (0.2~0.4)	Lr (0.2~0.4)	Lr (0.2)	$\frac{\text{L r}}{(0.3 \sim 0.4)}$	Lr (0.25~0.4)	$\frac{\text{L r}}{(0.15\sim0.2)}$	Lr (0.3~0.4)	$(0.2 \sim 0.3)$	Lr (0.2~0.25)	Lr (0.4)	Lr (0.2~0.3)
		甲目の種別	祖目 I	編目 I	編目 I	網目 I	組目II	I 目蒙	編目II	福目 I	雅目 I	總目II	編目II	I 目験	編目 I	縄目Ⅰ	編目I	種目 I	網目 I	編目Ⅰ	編目I	題 日 国
	# #	E C	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200

Day Day		析	Γ.																‡			
19 10 10 10 10 10 10 10	10711 ± 1	氟				縄綴じ	編綴じ			亀綴じ	観綴じ			編綴じ	綴綴じ				凸面に粘土 着			
19 19 19 19 19 19 19 19		出土地点	国	ПК	m区IV層	m区IV層	凶	ΙK	ΙK	m区IV層	採	m区IV層	m区IV層	ΚI	回区	IIK	回区	区IV層		四区17層	四区11層	ΙΚΆ
15 17 17 18 18 18 18 18 18		40	1.9~2.8	1.8~2.0	_	~2.3	2.0~2.5	1.4~2.0	.3~1	.7~2.1	.3~1.6	4~1.9	.8~2.3		.3~2.1			~	.7~2.3	.7~2.6	1.3~2.6	1.6~2.0
10 10 10 10 10 10 10 10			棿	極宏	棿																棿	倁
For the page For	-	発			虫	題良	氓	虫	良	പ	氓	乓	虫	乓	良	屯共	座 良	虹灯	屯村	虫	卓式	虫
10 mil o mun mun mun mun mun mun mun mun mun mun		噩	舠	桕)	- 122 −	白色	黄耀色	- Ψ	植色	白色	沃色	:白色	褐色	4II		猫色		Щ	黄色	Щ	淡橙色	角
10 11 10 10 10 10 10 10	- -			† .	<u>E</u>	<u>E</u>	絃		※ 	<u>E</u>	1		<u>E</u>	IES.	1			<u>-</u>	施	<u> </u>	35 <u>5</u>	₩ ₩
D D D D D D D D D D	-		#:		Jme	Jme	##:		#:	H;	#:	Jm-	Jme.	ш:	.lme	·		-	1	,	,	-
Day Day			#:	74-	744	14-	4#:	14c	無	48:	#:	74-	146-	無	74-			1				L .
D		_			1]	1	1								兼	兼	有	一种	兼	有	垂
D	恒	14 C8	1]	1	j	1	1	I	1	1	1			1	1	1		1		1	!
FD	i	ш	单	15×19	12×11	14×19	20×18	12×11	13×15	15×13	19×19	11×11	19×19	12×11	17×20	有	14×13	13×17	14×13	16×17	有	15×14
日の 中日の 中国の 囙		1	1	1]	1	 	1	1	1	1	l]		l	1	1]	1	1	J	
日の 中日の 中国の	桶枠痕	無	兼	巣	澌	無	兼	無	兼	有(1.3~2.0)	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	無	兼	
日の 中日の 中日の 中国の 中国の 中国の 中国の 中国の 中国の 中国の 中域の 海域節の 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			1	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	進	兼	業
日		両端部の機関の	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	有	兼]	1	1		1
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	圏	宮崎部の様での	I	1	1	1	I	1	1	[1	l	1	1	1	重	柜	兼	兼	兼	兼	更
		日本の多の				1		[1]			,	1	1]		1	1]
	坦	· IIII	Lr (0.25-0.3)	(0.3)	R1 (0.25-0.4)	Lr 0.2~0.3)]	Lr (0.3)	1	Lr (0.25-0.3)	(0.3)	Lr (0.2)	Lr 0.25~0.3)	Lr (0.15-0.2)	L (8.8)	Lr (0.4~0.5)	Lr (0.3~0.35)	(6.3) (0.3)	Lr (0.3~0.4)	Lr (0.3~0.5)	(6.3) (6.3)	Lr. (0.2,
		ш	I.	III	ПП	ВП	003	I II	ш	I II	ш	Ш	ΙĦ	ВI	Ш	I II	ΙĦ	Ш	пВ	ВI	編目II	編目 I
番号 201 202 203 204 205 206 207 208 209 211 211 212 213 214 215 216 217 218		番号	201	202	203	204	202	907	202	208	500	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220

Γ	析	,	- 1	1	7			1					-					-		- [
(単位cm)											織級に										ļ	
	- 4											-18									D/70-	Differen
	五字	i i	II区IV層	IKA	II区IV層	四区四層	II区I層	ΙΚΆ	II区I層	皿区IV層	11区1層	IIK J	IIK	皿区11層	皿区工層	IKB	II区II屬	加区田層	田区田層	II区IV層	皿区IV層	II KIV 🖷
	श	- 1	1.8~2.1	1.8~2.6	2.1~2.6	1.6~2.4	2.1~2.4	2.0~2.5	2.0~2.2	2.0~2.8	1.6~2.4	1.8~2.0	2.7~2.9	2.0~2.2	1.6~1.8	2.5~3.0	1.8~2.0	1.6~1.8	1.3~1.7	1.6~1.8	1.3~1.8	1.7~2.1
	无 十		棿	倁	倁	倁	稅	棿	쉥	棿	锤	棿	倁	쉥	甪	쉥	緊	塞	緊塞	倁	ఱ	稅
}	슅	3	良	敃	用	良	氓	良	虫	点	良	民	良	極良	良	虫	点	良	極良	角	点	阜
ŀ	要					和	和	卸	白色	6	白色	40	争		4	色	1色	1年		1色	16	灰白色
)	灰白色	黄橙色	黄橙色	黄橙色	灰白色	黄橙色	灰白	黄橙色	灰色	黄橙色	灰白色	暗灰色	黄橙色	黄橙色	灰白色	灰白色	暗灰色	灰白	淡黄色	灰色
	分割		·	1	1	[1	1]	1		1			1		-	1	1	1		1
		両婚部の 縁 取 り	1	1	1	1	1		1	İ	兼	1]	1]	!	1]	1	1	
		開始部の 縁 取 リ	单	車	巢	巣	单	兼	兼	柜	1	兼	有	1	单	争	佈	单	佈	佈	柜	年
	椢	はい日	ļ	1	1	1		1	1	1	1	1	1	!	1	1	1	ļ		1	1	1
	'—	布目の 単位	有	16×19	14×14	14×14	有	卓	有	16×18	14×17	15×12	14×14	年	10×12	9 ×12	16×19	24×24	23×20	14×15	11×10	11×12
	囙	粘土継目]	1		1		1	1			1	1	1	l	I		1]	İ	1
		桶枠痕	無	無	無	兼	兼	巣	澌	兼	单	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼			1
		糸切痕	兼	無	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	無	無	兼	進	兼	兼	兼	兼	兼	兼
		画猫部の 泰 取 コ			1	1		1	1		兼	1	1	1	1	1		1			1	1
	屉	回路部の縁 取り	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼		丰	兼	兼	声	兼	無	柜	無	無	兼	兼
		町板の 大きさ		1		1			1	1			ı	j		-	1	ļ		1	1	1
	4 1	叩目の 単 位	Lr (0.4)	Lr (0.25~0.4)	1	L.r. (0.3~0.4)	J.6 €.63	R1 (0.3~0.4)	1	Lr (0.25~0.3)	Lr (0.25~0.4)	(0.2-0.3)	Lr (0.25~0.3)	[0.4]	R1 (0.3~0.4)	1	.0 .3 .3	Lr (0.2-0.25)	Lr (0.3~0.4)	.0 .3 .3	Lr (0.3~0.4)	Lr (0.3~0.5)
	·	叩目の 種 別	總目 I	編目 I	編目 I	編目 I	總目II	編目 I	第日 I	總目 I	新日II	雅目 I	組目II	類目 I	篇目 I	額目 I	編目 I	類目 I	編目 I	和 和 日 門	編目 I	ı
Ì	中山	中	221	222	223	224	225	526	227	822	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240

	¥	₩	Ι				1										ļ	[
(In fixep)																						
			■	B	1880	塵		DEMI	-19	188	踵		=======================================	P	1380m	塵	B	E	쪹	屋	B	層
	=======================================	田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	IIKI	I区I	IZI	皿区工層	IKA	m区N層	IIKL-19	田区IV層	II区IV層	田区	IIKJ	皿区口層	II区IV層	m区IV層	mKII)	II区IV層	皿区IV層	ПKI	II区IV層	皿区川層
		υ Ψ	2.9~3.1	2.7~2.9	2.1~2.5	1.9~2.4	1.2~1.7	2.0~2.4	2.3~2.9	2.0~2.3	1.8~2.0	1.2~1.7	1.5~2.1	2.2~2.6	1.6~1.8	1.8~1.9	1.8~2.3	2.0~2.2	1.7~2.0	1.4~1.5	1.6~1.7	1.9~2.2
	7	E H	五 始 多 多	A 格替 多	ϴ	絕	솅	倁	石	倁	A 格 多 多	御	觬	チ	密 小石を含む	密 石粒多	石 村 巻	石 哲 多	石粒多	Ө	石粒多	密 石粒多
	4	洗成	長	不良	長	甚	極良	不良	చ	虫	良	氓	嵌	చ	펎	斑	చ	長	屯村	良	氓	氓
	推	E 1)	灰白色	鈍い橙色	鈍い権色	灰白色	齊	灰色	浅黄橙色	灰黄褐色	範 黄檀色	凸数回 銘替形 い色の	鈍い 黄橙色	浅い 黄橙色	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	鈍い槍色	暗青灰色	凸回 帯 解 の こ の の	凸灰色 凹灰白色
	分割	方法	1]	1	1	1	1	1	-	1	1	1	1	1	1	i	1			1	1
		両端部の 縁 取 リ	1	1	1	l	l	1	ı	1	1]	1		1	1			1		1	1
		側端部の 縁 取 り	有	兼	角	無	有	無	有	有	遄	卓	卓	有	有	有	兼	無	有	有	有	牵
	垣	日いな	1	1	1	1	1	. 1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1
		布目の 単位	13×14	14×13	有	14×17	11×12	12×13	13×16	16×14	有	17×15	23×24	1	18×14	10×15	16×14	15×15	17×19	12×12	6 ×11	26×24
	<u></u> 된	粘土継目	1	1	1]	1	1	1	: 1	1	1			1	1	I	l	1	1	1	1
		桶枠痕	進	無	澌	兼	無	澌	兼	兼	無	無	有(2.4)	無	1	兼	兼	兼	無	澌	兼	兼
		糸切痕	無	無	兼	兼	無	兼	無	無	有	有	争	1	無	無	遄	無	無	兼	兼	進
		両端部の 縁 取 ŋ]	ı	1	1]	1	-	ı	1]	1	1	1	1	1	ļ	1	J	l	1
	国	側端部の縁 取り	有	有	有	兼	有	進	有	兼	兼	有	柜	有	有	兼	有	有	有	兼	有	有
		明目の 大きき	6.5	1	1	[1	1	1	1]	-	[-	1	_	١	1	1]	1
	4]	明目の 単位	Lr (0.25~0.4)	Lr (0.2)	Lr (0.2~0.35)	Lr (0.25)	Lr (0.2~0.25)	(0.3)	Lr (0.25~0.3)	(0.2)	Lr (0.2)	1	Lr (0.25~0.3)	Lr (0.4~0.5)	Lr (0.4)	(0.3~0.4)	Lr (0.3~0.4)	Lr (0.3)	Lr (0.2)	(0.2)	Lr (0.3~0.4)	Lr (0.3~0.4)
		叩目の 種 別	福目 I	組目I	組目I	祖目 I	和目I	總目I	組目I	11日課	縄目Ⅱ	編目I	編目 I	I 目謝	組目I	組目Ⅱ	網目 I	網目II	編目 I	編目 I	網目I	類目 I
	中	# 1	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	529	260

(単位cm)	垂						凹面十元調整	四面ナデ調整							凹面ナデ調整		凹面ナデ調整					凹面ナデ調整	凹面十元調整	
	于 子	1	II ⊠ J — 14	$II \mathbb{K} L - 15$	II区IV層	II区I層	皿区	П⊠ Ј —14	田区	皿区	ПК	皿区IV層	国区	II区I層	II⊠M-11	ШК	II区I層	田区	II区 I 層	III区IV層	3 Ш К	2 II K	II区IV層	7 I KA
	<u>声</u>		2.0~2.8	2.0~2.4	2.2~3.2	2.2~2.4	2.4~3.1	2.4~2.5	2.1~2.3	2.2~2.4	1.4~1.9	1.9~2.1	1.8~2.0	2.0~2.1	2.4~2.5	~2.2	1.8~2.0	2.8~3.1	1.6~1.9	2.0	1.8~2.	2.5~3.	2.8~3.	2.4~2.7
	₹ +		絡	据 石 古 参	密 内	銀	変 黒裳母を含む	緊密	緊密	石 古 世	密 黒雲母を含む	俰	緊犯	緊密	緊密	整級	御	御	緊密	緊密	銀	銀	御	御
	甘	36. 3	县	卓式	氓	良	良	良	榳	虫	東	良	强	氓	良	良	良	良	顣	戽	良	良	良	真
	在醫	<u>.</u>	灰色	灰白色	淡白桃色	桃白色	凸茶灰色 凹灰白色	桃白色	青灰色	灰白色	赤橙色	淡 赤灰色	白桃色	赤灰色	赤灰色	灰白色	赤灰色	灰白色	黑褐色	灰色	茶褐色	赤灰色	灰色	桃白色
	分割		1	1	分割界 線 有	[I		1		1	l	t	1]	1]	凸面から中程 までの分割載 面有	凹面から中傷 までの分割数 面有	1	1	1	分割界 線 有	1
Ī		両端部の 縁 取 リ	有	車	有	有	有	兼	争	猟	巣	兼	兼	兼	1	無	兼		_	進	無	!	—	半
		側端部の 縁 取 リ	有	1	声	澌	柜	年	兼	角	角	有	١	無	重	無	1	無	無		黒	单	無	巢
	恒	はい日	1	1	1	1	1	ı	ı	ı	1	1	有	1	1	1	ı	1	1	綴じ合わせの種目	1	ł	ı	1
į		布目の 単位	20×19	20×24	16×12	15×21	16×14	24×20	19×20	12×16	10×11	15×9	1	18×20	柜	18×22	ł	16×24	24×18	21×19	19×17]	14×13	种
	₽I	粘土総目	有(S)	1	有(S)				ı	1	ļ]		1]]		争		有(S)		1	1
		桶枠痕	有(2.0~2.8)	有 ~3.0)	有 (2.7~)	有 ~2.0)	1		(1.5~)	(2.3~)	有 (2.6~)	年	l	有~3.2)]]	1	有 ~2.4)	有]	1	有 (2.0~)	1	有 (2.2~)
		糸切痕	有(横)	有(横)	单	有(横)	1	有(横)	有(横)	ļ]	有(横)	争	有(横)	角		兼	兼	兼	有(横)	有(横)	1	争	重
		両端部の 縁 取 リ	有	進	兼	重	兼	兼	角	兼	兼	重	兼	兼		兼	兼	無	1	兼	兼	1]	兼
	恒	飼城部の 縁 取 り	有	兼	車	有	有	車	争	兼	兼	种	1	兼	种	兼	1	兼	兼	1	兼	兼	極	兼
		日本の大学な																						
	뷥	甲目の		. \																				
		画田の	無女	無文	無大	無対	兼大	無対	兼	無大	兼大	兼大	兼大	兼大	兼大	無大	無大	無大	兼大	無人	兼大	兼女	無大	兼女
	Į.	神 七	261	292	263	264	265	992	267	268	592	270	271	272	273	274	275	276	277	8/2	6/2	780	281	282

第21表 丸瓦観察表(1)

	備考				凹面ナデ調整		凹面十元調整		凸面ナデ調整									倒端面に格子 タタキ	凹面ヘラケズ リ	長方形格子	凹面ヘラケズ リ 指痕	側端面に格子 タタキ
	出土地点 1		Π <u>Κ</u> Κ−20	II区IV層	ⅡKH-2	II区IV層	ПК	$\Pi \mathbb{K}_{N-9}^{H-12}$	$\Pi \mathbb{K} \stackrel{\mathrm{I}}{\overset{-17}{J}}_{-16}$	皿区	ⅡKL-18	II K K - 18	ⅡKJ-20	ⅡKL-18	IIXF-8	ПХН-18	IIK	田区	皿区口層	IK	ΙΚ	IIKL-20
	重な		1.5~2.5	1.2~1.5	1.2~2.0	1.6~2.0	1.5~2.0	2.5~3.0	1.5~4.0	2.0~2.5	0.7~1.2	0.9~1.2	1.7~2.0	1.0~1.2	2.0~2.5	1.2~1.8	0.6~1.4	1.5~2.0	1.4~1.5	2.0~2.3	0.8~1.2	3.2~3.5
	器十		倁	霧	緊密	緊密	霧	緊密	緊塞	緊密	緊密	緊密	緊密	緊密	霧	緊密	器	発売の金された。	器	聚	級	緊密
	焼成		屯村	氓	良	良	良	屯式	良	4式	不良	屯	电	良	良	氓	長	極良	氓	良	氓	氓
	色調		灰白色	淡桃色	茶灰色	青灰色	灰褐色	灰桃色	用	用	赤桃色	淡桃色	灰色	赤褐色	灰白色	白桃色	白桃色	黑褐色	闲	灰黄色	承	黑褐色
├	大品	4	<u> </u>	-			11					1					1		1	1	1	
		表 A D D D	兼	無	兼	1	単	单	单	兼	1	1	兼	ı	j	争	巣	1	兼	1	1	1
	自装数の	数型 7	单	单	争	申	柜	柜	棰	柜	柜	兼	争	神	ı]	1	兼	兼	兼	单	無
恒		はい日	_	1	1	ı	1		ı	1	1]	1	1	1	1	1		1	1]	1
	1 11	単位	16×15	17×17	有	14×12	单	19×18	11×10	14×10	争	单	角	单	单	单	19×22	16×13		20×16	1	有
囙		粘土継目	有(Z)		有(S)	1	1	ı]]	有(S)	1	1	1		1	1	1	1	1	1]
		桶枠痕	兼	兼	兼	兼	兼	ı	1	兼	兼	兼	兼	兼	無	無	無	無	兼	無	兼	兼
		糸切痕	兼	兼	1	兼	柜	单	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	ì	兼	申	兼	兼	兼	兼
	H-14	国権制の縁を取り	無	有	兼		無	有	車	兼	1	1	兼	1	1	1	兼	ı	兼]	1	
屉	e option	関始的の縁取り	有	兼	兼	兼	兼	柜	有	兼	兼	兼	争	单		1	1	1	有	兼	单	無
	6	大きさ	5.5		1	1	1	1	1	ı	,	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1]
1	, 1	単位	1.1	9.0	0.4	0.5		9.0	0.45	1	8.0	0.7	6.0	8.0	0.5	9.0	9.0	9.0	0.4	0.4×0.8	0.4	0.4×0.5
<u>.</u>	1	種別	平行I	平行田	平行Ⅳ	平行皿	平	平行皿	平行Ⅳ	平	平行Ⅱ	平行皿	平行Ⅱ	平行Ⅱ	平行皿	平行皿	平行皿	格子田	格子Ⅳ	格子	格子Ⅳ	格子Ⅳ
	番号		283	284	285	586	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302

表 力瓦	「細吹手(2)	
年27	笙っつま カト	

布	2	側端面に格子 タタキ					凹面十千調整						凹面十予調整								
1 日 昭 日 年		II K K −20	国区	III 区IV 層	τ区J−18	皿区11層	II区IV層	II 区IV層	IIXL-19	四区	田区田層	II区IV層	IKA	Ⅲ区	IIKL-20	田区田	Ⅲ区IV層	II区I層	II区I層	II 🗵 J —15	II区IV層
41 <u>m</u>	v	2.5~3.0	1.0~1.7	1,4~1.8	1.0~1.4	1.5~2.0	0.9~1.5	1.1~1.8	1.3~1.8	1.3~1.6	1.0~1.6	1.3~1.5	1.4~1.9	1.5~2.5	1.6~1.7	1.2~1.9	1.3~1.8	1.5~2.4	1.55~	1.3~1.4	1.4
₹1 +		緊密	凝绝	緊绝	緩緩	整絕	剱	密 石粒多	密 石粒多	密 石粒多	密 石粒多	石 西 香 参	級	够	倁	铋	쉥	緊密	御	ਿ	塞
台世	E	民	通	良	極良	極良	民	極良	嵔	虫	良	പ	良	虫	చ	-ш қ	చ	極良	虫	良	民
一	Ē.	黑灰色	黑褐色	灰色	黒褐色	黑紫色	純い箱色	暗晴灰色	灰黄色	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	淡橙色	明褐灰色	灰色	淡褐灰色	淡褐灰色	淡褐灰色
	力法	##E		<u>(</u>	<u>=</u>	-m:	- 	型から との分を 関数 関本				面から 繰の分 数断	1		四面から中 程までの分 軟載面	,	=		389	382 	, ASS
4	両端部の 大 縁 取 り	1		1	ı	1	有	第00년	兼	1	□ □ □	D+ 第	兼	兼	無	無	無	1	兼	有	兼
	歯端部の 両縁 取り 縁	兼	価	柜	兼	兼	单	車	柜	柜	兼	兼	兼	1	单	有	有	柜	柜	柜	柜
垣	目いな	1	1	1]		1]	1]	1				1	1		1	1	
<u>b≖r</u>	布目の	14×12	17×10	11×9	15×9	13×9	16×10	11×15	17×14	14×12	13×11	13×15	極	14×13	21×14	18×15	12×15	1	15×16	16×16	16×15
囙	粘土継目	有(S)	有(S)			有(S)]]	1	[]	1		1	, ,	1	!	1	1]	
	桶枠痕	兼	兼	兼	兼	進	兼	単	単	巣	兼	兼	兼	兼	有 (2.8)	兼	兼		進	1	1
	糸切痕	1	進	兼	有	有	兼	兼	兼	兼	単	無	1	兼	兼	兼	兼	1	1	兼	兼
	両猫部の種類の種類の	1	1	1		1	兼	兼	兼	1	1	兼	角	兼	一种	兼	兼	1	兼	兼	無
屉	商権的の機関の	兼	柜	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	年	1	兼	兼	一年	年	兼	柜	1
	日核の大きさ	155		15	1	1			1		1		1		(f.	(5)	(5)				
립	甲位位	0.4×0.	0.4×0.	0.45×0.55	0.3	0.5	Lr (0.3~0.5)	(0.2)	Lr (0.2~0.3)	Lr (0.35~0.4)	1.0 1.0 1.3	Lr (0.2~0.4)	7. 3.3.	(0.2)	Lr (0.2~0.4)	(0.2~0.3)	Lr (0.15~0.2)	 			
	中田御田の別	格子Ⅳ	格子Ⅳ	格子皿	格子Ⅳ	格子皿	翼 I 田	總 目 I	[日]	I 目襲	總目 I	類目 I	和 和 和 日 日	額目 I	和 和 日 日 第	經目 I	篇目I	兼	無大	無対	無対
1	梅	303	304	305	306	307	308	306	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322

Г	14	K.	1			1		1	1 -		1	· · ·	T]	lmor	1	1		T	1	₩2
(単位cm)	ŧ	严														凸面に櫛目痕						四面布端部
	수 1 1	· 昭 日 日	ΙΚ	11区1層	IK	II区IV層	国国	田区	II区IV層	11区1層	III区IV層	11区1層	ⅡZM-6	IIK	II区IV層	IR	II区IV層	皿区11層	II 🗵 I — 3	ΙΚ	田区	II K K 14
		ψ v	1.35~1.7	1.5~1.9	1.8~2.1	1.4~1.9	1.5~1.6	1.65~2.2	1.1~2.1	1.7~	1.7~2.7	1.2~2.0	2.3~2.4	3.3~	1.3~1.8	2.0~2.3	1.3~2.3	0.9~1.5	1.6~2.3	1.7~	1.2~	1.1~
		E H	緊 密 小石を含む	棿	絕	絕	聚	棿	緊絕	倁	棿	聚	觬	緊筋	棿	倁	緊急	緞	棿	粟	聚	倒
	4	英	極良	岜	極良	不良	꺂	超	極良	再式	卓	팮	再	極良	不良	極良	祗	良	贯	良	極良	良
		E.	谈灰黄色	灰白色	承	凸熱灰色 回灰色	灰白色	谈揭灰色	青灰色	明楊灰色	谈揭灰色	灰白色	灰白色	承	淡黄檀色	暗褐灰色	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	和	淡黄檀色
-	分割		355	1	1	디티		家				1	1	-		響	<u> </u>					
		西端部の 線 取 り	1	1	桓		兼	兼	兼	兼	1	兼	兼	兼	兼	単	巣	巣	兼	有	兼	兼
		国婚部の 様 取 り	兼	兼]	1	1	兼	捶	捶	1	捶	佈	佈	柜	1		極	極	極	兼	1
	更	目いな	1	1	なったかった	1	ı	1]	1	1	1	さった。	ı	ĺ	1	1	1		1	1	1
		布目の 単位	16×15	有	14×14	有	14×15	15×13	16×11	有	柜	17×13	16×20	17×15	16×13	極	21×19	14×12	棰	17×16	18×18	16×19
	囙	粘土継目	1	ı]	1	1	1	-]]	1	1	1	1	有(Z)	有(S)	1]	1	1	1
		桶枠痕	無	1	1	1	有(2.0)	巣	兼	1	1	単	兼	兼	巣	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼
		糸切痕	1	1	1		!	1		1,	_	1	单	1	I	有		1	ı	ı	I	1
		両端部の 縁 取 D	1	1	無	-		羰	無	無	1	兼	兼	有	無	無	有	無	兼	兼	無	1
	桓	歯矯部の 縁 取 り	兼	单	無	1	巣	遄	無	無	1	無	有	ļ]	1	1	無	無	兼	兼	-
		甲板の 大きさ																				
	=1	甲甲位										\setminus									_\	
		甲目の種別	無大	無文	無文	無文	無文	無大	無文	無文	無文	無大	無大	無大	兼女	無文	無文	無文	無文	無人	無文	無文
	中	P =	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342

	No	1	-	7	1.	-	7	1 -	Τ.		_	т—		_	-	1	1	_	,		
(単位cm)	備								凹面十字調整												
	出土地点	II KJ −16	Π <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u></u> <u> </u> <u> </u>	II K L-15	IIXL-19	IKA	IIKK-18	IIK J-18	IK	II⊠ I −20	II区IV層	II区II層	ⅡKH-18	IIKL-18	ПК	IIKJ-16	III区IV層	II 区IV 層	ПК	IIX I -18	II ⊠ J −17
	型	~2.5	~1.8	~2.3	~2.3	~3.1	~1.6	~2.2	~1.8	~2.0	~2.4	1.4~1.9	1.9~2.0	1.3~1.7	1.9~2.6	1.2~1.4	1.4~1.7	1.2~1.7	1.5~1.7	1.3~1.6	1.9~2.3
	吊土	倁	例	倁	棿	倁	御	緊密	御	棿	棿	絕	倁	倁	棿	倒	御	倁	ఱ	聚稅	緊犯
	焼成	斑	屯	亞	斑	乓	極良	函	亞	亞	虹	亞	屯民	卓式	坦坎	屯	坦共	亞	팹式	極良	良
	色調	灰白色	灰白色	承	淡黄橙色	黄橙色	闲	青灰色	灰白色	灰白色	淡黄橙色	灰白色	暗灰白色	淡橙色	淡橙色	灰白色	灰白色	灰白色	淡橙色	凸灰 回淡赤髓色	灰白色
	分方割法		1	1	1	1						1	1	1		1		1	1	1	1
	国雄部の	兼	兼	兼	1	兼	有	柜	有			1	1	兼	無	1				1	1
	歯烙部の 禄 取 り	車	柜	兼	棰	兼]	柜	1	極	極	年	1	T		棰	極	柜	兼	乍	柜
 	田いな		1	1	1	1	1			1		1		1		1	1		1		1
	布目の 単位	19×16	中	神	ı	13×18	16×15	22×19	1	極	18×14	棰	22 × 24	極	佈	18×12	13×16	20×18	12×11	18×19	車
囙	粘土継目]			有(Z)]			1				1		J		1		1]
	桶枠痕	兼	兼	無	進	兼	兼	兼	兼	兼	有 (2.8)	兼	兼		兼	無	兼	兼	兼	兼	1
	糸切痕	1	l	柜	1		1	1	I	1	1	1		1	ı	兼	進	兼	車	兼	1
	両端部の縁 取り	当	有	兼]	有	無	有	有			1	有	兼	有	1	1	1	1	1	!
層	側端部の縁 取 り	申	有	兼	卓	兼		兼	1	無	無	極	1]	1	無	兼	兼	有	有	車
	円板の大きさ																				
47	単一年の日日																				
	日岡窓	¥	×	×	χ	×	×	¥′	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	X
-	中日種	343 無	14	15 無	第	第	<u>%</u>	第	単	兼	2	3	#	第	単 9	7	× 熊	第	第	#	兼
<u></u>	梅	왔	344	345	346	347	348	349	320	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362

追加平瓦

	*	?	総版(単)								_
	垂	<u>e</u>	四面に終 条 (引き								
	十五十五十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十		m区IV層	II区I層	III区IV層	II区I層	II⊠B-16	11KL-7	II ⊠ M-20	II⊠N-19	II⊠M-17
	\(\frac{1}{2}\)		2.0~2.6	1.3~2.1	1.8~2.0	1.4~1.7	1.4~2.0	1.1~1.4	2.1~2.5	1.6	1.6
	₹		鄉	棿	铋	倁	倁	緊密	倁	硹	蒸
	世史	X X	不良	甚	良	斑	嵔	确	嶯	蒑	嵔
	角腦	<u>{</u>	淡橙色	灰白色	灰白色	灰白色	淡黄橙色	凸灰 白 色 凹暗竹灰色	淡橙色	赤褐色	黄檀色
1	分割	力法	1	1	1	1	1	l	分割界 線有	1	1
		国権部の		1	1]	J	ı	兼	1	1
		歯塩部の 様 取 り	兼	柜	重	垂	極	兼	淮	1	兼
		目いな]	I	1	1	ı	١	- 1	有 (2条)	ì
■	4	布目の単位	有	13×10	17×17	14×18	卓	20×16	卓	粗	15×15
E	1	格土総目	有(Z)]	}		1]]
		桶枠痕	1	無	兼	巣	1	兼	兼	1	J
		糸切痕	1	巣	兼	無	l	单	車	1	有
		国権部の 機 吸 の	1	ı	1	I	I	I	兼	1	J
恒	1	● 協能の機 取 り	無	進	兼	兼	兼	兼	兼	1	兼
		即大板きのち									
4	I	明目の 単位									
		明目の 種 別	兼大	無人	無人	兼	無人	無大	兼大	無大	無大
	中	# 12	363	364	365	366	367	368	369	370	371

第25表 丸瓦観察表(5)

1	Ж	f.			
(単位cm)	*				粘土帯の幅 3.5~4.8
	년 1 1		II ⊠ J −12	II区IV層	皿区
	× <u>u</u>	ı. Λ	1.7	1.3~1.6	1.0~1.8
	4	T =	緊密	緊密	〜
	4	NE DX	極良	極中	卓式
	#		青灰色	灰白色	灰色
	分割	方法	1	1	1
		両端部の縁 取り	有	有	無
		側端部の線 取り	有	車	1
	囲	目いな	.1	有(2条)	1
		布目の 単位]	争	15×14
	51	格士继母	I	1	有(紐)
		桶枠痕	1	[有 (1.7)
		糸切痕	1	有	無
		両端部の 縁 取 り	1	無	有
	掴	御端部の 縁 取 り	卓	無	1
		叩板の 大きさ	1	0.9	Lr (0.5)
	딥	叩目の 単位	0.4×0.5	1.0×1.1 1.0×3.3	1
		叩目の 種 別	格子皿	部分格子	編目I
	# 다	Ħ7	372	373	374

3 土 器

1. I区出土土器

かなり多くの土器が出土しているが、遺構に直接結びつくものはなく、小破片が大部分を占めている。したがってこれらの中から、復原図化可能なものを選んだ。

(1)須恵器 (第51図1 ~15)

1は脚台付大盤で、脚部は大半を欠失し、基部近くに一条の沈線がめぐる。口径25.5cm、皿 部の器高 3.0cmである。黄褐色を呈し、胎土は密である。器面は内外面横ナデ、内底部は不定 方向のナデがみられる。 2 は高坏で、坏部口経15.0cm、器高 5.5cmで、全高 9.3cmを測り、深 い椀状の坏部に比較して、やや小型で低い脚を有する高坏である。青灰色を呈し、焼成は極め て良好である。坏部下半は回転ヘラ削りされ、他はすべて横ナデ調整される。3も高坏で、坏 上部および脚裾部を欠失する破片である。圷外底部は回転へう削りされ、他は横ナデ調整で仕 上げられる。4は口径15.1cm、器高 1.7cmの比較的浅い皿である。青灰色を呈し、胎土密で焼 成極めて良好である。口縁部は大きく外反気味に立ち上がる。外底部は回転ヘラ削りされ、他 は内外面とも横ナデ調整で仕上げられている。5は高台付皿で、口縁部を欠失するが、復原す れば口径18cm前後で器高3cm弱であろう。皿部の体部から口縁部にかけてはやや外反気味にた ち上る。高さ 0.9cm、径12.0cmの低い輪状の高台を有する。青灰色を呈し、焼成は良好である 6は壺形土器の口頸部破片である。口径13.3cm、頸部径 9.6cmを測った。口縁外面はいわゆる 有段の口縁をなし、有段部上面に一条の沈線がめぐる。頸部は強くくびれ、外面には細かな平 行タタキ、内面には同心円タタキが認められる他はすべて横ナデ調整されている。淡灰色を呈 し、胎土は密で焼成も良好である。7は台付壺破片で、壺の大半と脚裾部を欠失している。脚 部上半は強くくびれ、中位以下は内弯気味に広がり、その境界は段をなしている。壺内底部は 不定方向のナデ、体部外面は荒いクシ目が認められるほかは、横ナデ調整されている。8は高 台付広口壺である。口径11.4cm、胴部最大径13.2cm、器高 4.2cmを測った。体部は浅く、肩部 は「く」の字状に強く張り、口縁部は極めて短く立ち上がる。高台は内外面より強くナデツケ られて断面三角形をなしている。淡灰色を呈し、胎土密で焼成良好である。9は坏で、口径11.2 cm、器高 3.8cmである。体部は内弯し、口縁部も内弯気味に立ち上り、端部は角ばる。底部は 回転ヘラ切り離しのあと無調整、体部内外面とも横ナデ調整される。淡灰色を呈し、胎土に砂 粒を多く含み、焼成良好である。10・11はいずれも突帯付壺の胴部破片である。胴部最大径は 10が18.8cm、11が22.5cmである。肩部は「く」の字状に強く張り、肩部先端と頸部近くに2条 の貼付突帯をめぐらしている。突帯はそれぞれ形状を異にするが、基本的には断面三角形であ

る。両者とも磨滅していて調整痕を観察しがたいが、内外面に横ナデが認められる。12は把手付壺である。胴部復原最大径20.0cmである。把手は粘土紐を用い、肩部に貼り付けられるが、取り付けられた個所は小破片のため判明しない。黄灰色を呈し、焼成やや不良である。13は高台付壺の胴部下半の破片である。高台の径は 9.6cmで、断面形がやや逆台形をなし、外底端部に貼り付けられる。胴部内外面とも横ナデ調整され、外底部は回転へラ削りが認められる。青灰色を呈し、焼成は極めて良好である。おそらく10・11および12などの壺形土器は、このような高台を持つものではなかろうか。14・15はいずれも腺の体部破片である。14は胴部最大径9.3 cm、底径 6.8cmで、15は胴部最大径 9.3cm、底径 6.7cmである。いずれも肩部が角ばり、15では一条の沈線がめぐる。胴部と底部との境は明瞭で、底部は平底をなす。内面は強くナデ胴部上半は横ナデ、胴部下半から外底部全体は回転へラ削りのあと不定方向のナデが認められる。青灰色を呈し、焼成良好である。

(2)土師器 (第52図16・17)

16・17はいずれも高台付小皿で、焼成後内外面とも赤色顔料が塗布されている。16は口径12.5 cm、高台径 7.4cm、器高 4.5cmである。体部は全体的に厚いつくりで、口縁部に移行するにしたがい肉薄となり、端部近くで外面がくびれる。高台も厚いつくりで、ややラッパ状に広がり、端部は角ばりおわる。内外面とも横ナデ調整されている。17は口径12.8cm、高台径 7.4cm、器高 3.6cmである。16に比べて全体に薄いつくりである。特に体部上半では口縁端部で肥厚し、また高台も裾部が肥厚し端部がやや角ばりおわる。器面の調整手法は両者とも全面ていねいな横ナデで仕上げられている。

(3)黑色土器 (第52図18~24)

計10点出土しているが、このうち7点について図示した。すべて内面黒色の土器 (黒色土器 A類) であった。

18は高台付椀で、口径14.4cm、器高 5.6cmである。全体的には薄いつくりであるが、体部下半から高台はやや肉厚となっている。体部はやや丸味をもって立ち上り、口径部はやや外反す

番号	口径	器高	高台径	高台高	出土地点
18	14.4	5.6	6.9	0.9	I-D区
19	13.9	6.0	6.75	0.95	I-D区
20			9.0	1.65	I-B区
21			6.5	0.90	I-D区
22			8.65	0.70	I-A区
23	15.7	5.15	7.1	1.20	I −A⊠
24	17.7	(8.7)			I一D区

第 26表 【区出土黒色土器計測表

る。体部外面は荒い横ナデ、内面はていねいな横ナデが施され、ヘラ磨きは認められない。口縁部外面には部分的に黒色が認められる。19は高台付椀で、口径13.9cm、器高 6.0cmである。18と法量も近似し、形態・手法とも類似している。18に比較して、体部がやや直線的で高台が肉厚で、しかも取り付けが粗雑である。黒色部分は内面から口縁端部外面にまで認められる。20は肉薄の高い高台で、強く外反している。21は体部上半を欠失する高台付坏で、体部は丸味をもち、高台は径 6.5cmで断面は三角形を呈している。内外面ともていねいな横ナデが認められる。22は全体的に厚いつくりで、やや低い高台を有する。外面は荒い横ナデ、内面はていねいな横ナデが施されている。23も高台付椀である。口径15.7cm、器高5.15cm、体部高 4.0cmを測り、18・19の椀に比べて、口径を増すが深い椀部を有している。外面はややていねいな横ナデが施され、内面には部分的にヘラ磨きが認められる。黄褐色を呈し、胎土も密で、焼成良好である。24は口径17.7cm、器高約 8.7cmで大型の高台付椀である。高台は基部のみを残し先端部を欠失する。体部外面の下半部に断面三角形の突帯を一条めぐらす異例の製品である。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。内面および口縁部外面まで黒色が認められるが、器壁は内外面ともかなり荒れている。

2. II 区出土土器

(1)土師器

變形土器 (第**53**図 $1 \sim 6$ 、第**54**図 $7 \sim 13$ 、第**55**図 $14 \sim 16$)

いずれも胴部および頸部以下を欠失し、口縁部円周の光以下の破片により復原図化したものである。口縁部が短く屈曲するもの(2・14)と、肩部の張りが少なく「く」の字状に外反する口径を有するもの(1・3・5・6・10)。さらに肩部が強く張り、強くくびれた頸部から大きく屈曲した口縁部を有するもの(8・9・11・12・13・16)などに大別することができる。頸部以下の外面は刷毛目調整されるが、多くは器面が摩滅している。頸部および口縁部内外面は横ナデ調整されるが、口縁部内面を横方向の刷毛目調整するもの(1)もある。内面は頸部までへラ削りされるが、これにはタテ方向に削り上げるもの(3・8・12・13)と、左下から右上方向に削り上げるもの(10)とがある。また頸部を横方向にヘラ削りして調整するもの(2・7・10・11・12・13)などがある。

色調は2・4・14が赤褐色で雲母片・白色砂粒を含み器面に光沢をもつのに対し、他はすべて黄褐色ないし白味を帯びた黄褐色を呈している。

杯 (第55図17・20~25・27、第56図43)

杯はかなりの数が出土しているが、細片が多く図示できるものは少ない。これらは手法上の 差異によって2つに類別、さらに形態上5つに細分することが可能である。

I類、全体的に薄いつくりで、底部は回転を利用したヘラ切離しのままで、体部内外面は横ナデ調整で仕上げる。黄褐色ないし茶褐色を呈し、胎土密である。

Iーa類(20~22)、口径13cm大、器高6~7cm前後のもので、底部は平底をなし体部は直線的に外反して口縁部にいたる。底部は回転ヘラ切り離しのまま、体部内外面を横ナデ調整し、内底部を不定方向のナデ調整で仕上げている。また焼成後赤色顔料を塗布したもの(20・21)とそうでないもの(22)とがある。

I − **b** 類 (23) **I** − **a** 類と形態・調整手法は同じであるが、口径15.2cm、器高3.6cmでやや大型の杯である。

I-c類(24) I-b 類と同じくやや大型のものであるが、口径に比べて底径が著しく小さく、体部中位に段を有する。

I-d類(17)口径は小さいが深い杯である。体部はやや丸味をもちながら急に立ち上る。

 $\mathbf{I} - \mathbf{e}$ 類 (43) $\mathbf{I} - \mathbf{d}$ 類同様、小型で深い杯で、底部が円盤状高台をもつ特殊な形態のものである。

- ■類、全体的に厚いつくりで、外底部は静止によるヘラ削り調整を行ない、体部内外面はやや荒い横ナデ調整で仕上げられる。外面のヘラ削り調整は特に底部に認められるが、さらに体部中程まで施されるものもあり(19)、この場合体部と底部との境が不明瞭となる。色調は例外なく赤褐色を呈し、胎土はやや荒く雲母片・白色砂粒を多量に含んでいる。 Ⅰ類の杯と一見して判別が可能である。
- Ⅱ f 類 (28) やや浅い半球形を呈する大型の杯である。体部は内外面とも底部から口縁部まで静止によるへラ削り調整が施され、口縁部内外面は横ナデにより仕上げられる。体部と底部の境は明瞭である。
- I-g類 (19) 浅い半球形の体部で、口縁部は短かく内傾気味に立ち上るため、口縁部と体部の境が稜となっている。稜の下部から底部にかけて静止のヘラ削り(外側→中心方向)が施され、口縁部内外面は横ナデにより仕上げられる。外面は焼成後に塗布された赤色顔料が認められる。
- Ⅱ 一 h 類 (25) 全体として厚いつくりで、丸味をもった平底で、体部は直線的に外反し、口 縁端部外面は横方向から強くナデつけられて、直立気味となり、稜をなしている。底部は静止 ヘラ削りされ、内底部は不定方向のナデ、他はすべて横ナデ調整されている。
- Ⅱ i 類 (27) 全体的に厚いつくりである。底部と体部の境いは明瞭で稜をなし、口縁部は直立気味に短かく立ち上がる。外底部は静止へラ削調整され、他は内外面とも横ナデにより仕上げられる。
- 高台付杯(36)小型でやや深い体部に、境B —類と同様の低い高台を有するものである。赤 褐色を呈し、胎土は密で、内外面に赤色顔料が認められる。

高台付埦 (第56図32~42)

底部を中心として破片が多く、杯・境の区別が困難なものもあるので、高台の形態による類別を試みた。

- A類 (33~35) 体部が丸味をもった浅い半球形状をなし、肉厚で高い高台を有している。外 底部は回転へラ切り離しされたまま無調整、体部内外面は横ナデ調整されている。赤褐色を呈 し、白色砂粒を多く含んでいる。
- B類 (37・38) いずれも底部付近の破片である。a 類に比較して体部が扁平で立ち上りがゆるやかである。高台は低く断面は三角形をなす。器面は内外面ともヘラ磨きされ、37は外面、38は外面及び外底部に赤色顔料が認められる。胎土は密で黄褐色を呈し、焼成良好である。

Ⅲ (第55図18、第56図44~48)

杯の場合と同様、手法上の差異によって2つに類別し、さらに形態・大きさにより4つに細分した

I類、全体的にていねいなつくりで、外底部は回転へラ削り調整し、体部内外面は横ナデで 仕上げられる。さらに口径10cm大の小型のもの(a類)と、口後16cmをこえる大型のもの(b類)とがある。

I 一 a 類 (18) 口径10.5cm、器高 2.0cmの小型の皿で、全体的に荒いつくりである。底部は回転へラ削りされ、外底部は不定方向のナデ、他は横ナデにより仕上げられる。

I − b 類 (44・45) いずれもていねいなつくりで、44は口径16.1cm、器高 2.3cm、45は口径 16.0cm、器高 3.1cmで大型の皿である。底部は回転へラ削り調整し、外底部は不定方向のナデ、他は横ナデ調整される。特に45では、口唇部内面を強く横ナデされ、稜を生じる。

■類(図46~48)口径は I — b 類とほぼ同程度の大型の皿である。外底部から体部にかけて静止へラ削り調整し、口縁部内外面および体部内面は横ナデ調整、内底部は不定方向のナデが認められる。概して荒いつくりであり、赤褐色を呈し、胎土も雲母・砂粒を多く含み、器面に光沢をもっている。

Ⅱ一c類(46) 口径16.0cm、器高 3.0cmである。体部から底部にかけて静止へラ削り(体部から左回りを反復し、中心部へ向う)される。口縁部は直立気味に短く立上る。

Ⅱ - d (47、48)体部から口縁部にかけては、丸味をもち、内弯気味に立ち上る。大型の皿で体部外面から底部は静止へラ削りで調整し、口縁部外面および体部内面は横ナデ調整、内底部は不定方向のナデが認められる。c 類同様荒いつくり である。

鉢 (第55図29~31)

5 ないし6個体分が出土しているが、復原図化できたものは3個体分である。全体に丸味をもち、口縁部は内弯しながら立ち上り、口径が体部の最大径より小さくなる。体部から底部にかけて静止へラ削りされるため、体部と底部の境は不明瞭である。形態・手法上の大きな差異は認められず類別はできない。なおこれらは、甕1・4・14および杯Ⅱ類、皿Ⅱ類と色調・胎土・焼成とも極めて類似する。

以上、II 区包含層中より一括して出土した土師器について類別を行ったが、器種では、甕・杯・高台付杯・高台付焼・皿・鉢の6器種が出土した。すべてII 区IV層から大量の瓦などと一括して出土したものである。くり返し述べたとおり、高台付杯・高台付埦をのぞく4器種には、手法・形態・色調・胎土の上から、大きく異なる二者があった。すなわち に表現すれば、精製(II 類)・粗製(II 類)のちがいであり、土器生産における原材料のちがいであり、生産過程における熟達度、さらに使用目的の差異としてとらえることができる。しかも両者が混在して出土するのは、どのような理由に基づくものであろうか。

黒色土器 (第**55**図26) 口径12.5cm、器高 2.4cmで、全体的に薄くていねいなつくりの皿である。黒色部分は内面のみ認められる。

(2) 井戸状遺構出土土器 (第56図49~52)

小型丸底土器(49)

井戸状遺構第5層から出土したものである。口縁部を欠失し、頸部から胴部の破片による復原で、胴部最大径 8.9cmを測る。体部は全体的に扁平で、肩が強く張る。口縁は体部側の頸部内側に接合され、荒いヘラ状の工具で調整されている。体部外面も荒いヘラ状の工具で調整され、内面には指圧痕がみられる。黒褐色を呈し、砂粒を多く含む。

須恵器坏蓋(50~52)

49と同様、井戸状遺構第5層より一括して出土したものである。いずれも蓋坏(蓋)で、復原図化したもので、各部の計測結果は次のとおりである。

番号	口径	器高	天井部径	天井部高	口縁部高
50	14.5	4.8	13.3	2.4	1.8
51	12.8	4.6	12.4	2.4	1.8
52	12.9	4.75	12.3	2.4	1.95

第27表 須恵器蓋坏(蓋)計測表

50、口縁部はやや外方へひらき、端部は丸くなるが、端部内面には段をもっている。口縁部と天井部の境には稜を有する。天井部やや丸くなっている。天井部外面は回転へラ削り、口縁部外面および内面はていねいな回転ナデ調整で仕上げる。ロクロは右回転である。色調は淡い青灰色を呈し、焼成良好である。胎土は密で白色砂粒を含む。

51・52は法量・形態と極めて類似している。口縁部はほぼ直立して下るが、52はやや外方に開いている。端部内面に内傾する凹線を有する。天井部と口縁部の境は明瞭な稜をなし、天井部は比較的平らである。天井部は回転へラ削りで、他は内外面横ナデ、天井部内面はていねいな、不定方向のナデにより仕上げられている。色調はいずれも淡灰色を呈し、器面に灰の付着をみる。焼成は極めて良好である。

以上、土師器 1、須恵器 3 点は井戸状遺構第 5 層から、馬歯・猪骨・鹿骨の自然遺物とともに一括して出土したもので、井戸状遺構の埋没時期を示す土器群である。特に須恵器坏 3 点は、これまで県内から出土したものの中でも最も古式に属するもので、等 1 型式に比定できる。

(3)須恵器

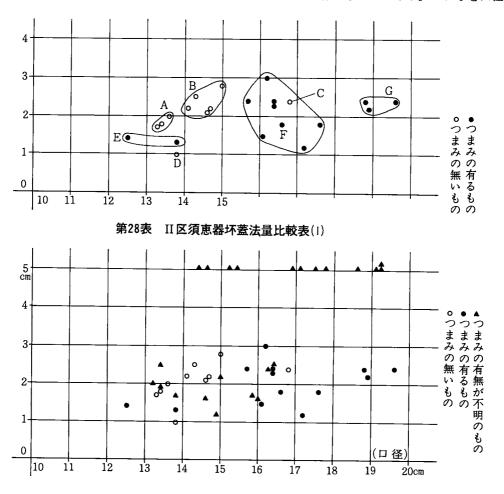
坏蓋 (第57図53~78、第58図79~109)

坏蓋は計57点図示した。つまみを持ち口径復原ができたもの13点、つまみを持たないもの10点、天井部が欠失しつまみの有無が判明しないもの23点、つまみ部分 7 点、輪状つまみを持つもの 4 点で、輪状つまみで全体の形状が明らかなのは 1 点のみであった。

蓋の製作技法は、天井部外面を回転へラ削りし、口縁部内外面を横ナデ、天井部内面を不定 方向のナデによって仕上げるという一定の手法が認められる。また天井部につまみを持つもの については、つまみを接合の際、その周辺部のみをナデつけているだけで、天井部の大半は回 転へラ削り調整のままである。

また色調・胎土・焼成は①青灰色を呈し全体的にていねいなつくりであり、胎土は密で焼成極めて良好なもの。②淡灰色ないし黄色味を帯びた灰色を呈し、胎土は比較的良く、焼成にややむらがあるもの。③灰白色を呈し、胎土は比較的密であるが焼成不良なもの。があり、これらの観察結果は各計測表の備考覧に示した。

蓋には天井部に、Ⅰ=つまみがないものと、Ⅱ=つまみが有るものとがある。これらを口径



第29表 II区須恵器坏蓋法量比較表(2)

によって法量を比較すると、口径15cmの小型のものから、口径19.2cmの大型のものまである。 そこでまず、つまみの有無が明確な個体を抽出し、その法量を比較したものが第 表である。 つまみの有無を法量との関係で比較すれば、つまみの無いものが小型に比較的多く、つまみ の有るものが大型のものに多いことがわかる。さらにこれらを法量によって類別すると次のよ うになる。

(1)つまみを持たないもの

A類口径13~14cm、器高2cm未満

B類口径14~15cm、器高2~3 cm

C類口径16∼17cm、器高2cm以上

D類1点のみで、土器成形後につぶれたもので、本来的にはA類に属す

T つまみのないもの

	No	口径	器高	端部	備考	出地
I-A	58	13.3	1.7	e	2	0 —15
	59	13.4	1.8	e	1	□ 層
	62	13.6	2.0	@	3	IV 層
I —B	56	14.7	2.2	@	3	IV 層
	60	14.1	2.2	e	1	□層
	69	15.0	2.8	e	3	IV 層
	71	14.6	2.1	(b)	1	L-15
	75	14.3	2.5	e	1	IV 層
I-c	84	16.8	2.4	e	2	IV 層
I —D	66	13.0	1.0	@	3	0-16

Ⅱつまみの有るもの

	No	口径	器高	端部	備考	出地
II — E	64	12.5	(1.4)	e	3	IV 層
	65	13.8	(1.3)	e	3	J —14
II-F	77	15.7	2.4	©	2	I層
	78	16.4	2.4	e	2	J —17
	79	16.2	3.0	(b)	1	J —14
	81	17.2	1.2	e	2	P-15
	83	17.6	1.8	e	1	IV 層
	85	16.6	1.8	e	3	IV 層
	86	16.1	1.5	e	1	IV 層
	87	16.4	2.3	©	2	H—11
Ⅱ-G	92	18.9	2.2	©	2	IV 層
	96	18.8	2.4	в	1	IV 層
	97	19.6	2.4	в	2	IV 屠

(2)つまみを有するもの

E類口径14cm以下、器高 2 ~ 3 cm

F類口径15~17cm、器高2~4 cm

(さらに個体数が増えることに

より、細分が可能である。)

G類口径18cm以上、器高 2 cm以上

Ⅳ口径のみわかるもの

△ 類 ▼□ □ 次 兜音 細郎 梅孝 山地						
分類	番号	口径	器高	端部	備考	出地
Ш	53	13.4	2.5	a	1	I 層
	54	15.8	(1.7)	a	1	IV 層
	55	15.0	(2.2)	a	1	IV 層
	57	14.6	(2.6)		1	Ⅱ層
	61	13.4	(1.9)	e e	1	IV 層
	63	13.2	2.0	©	3	IV 層
	67	13.8	1.7	(b)	3	IV 層
	72	16.0	1.65	(b)	1	I —15
	74	14.9	1.2	(b)	1	IV 層
	88	16.3	2.4	(9)	1	IV 層
	89	16.4	2.6	()	1	IV 層
Ш	68	14.4	-	@	3	IV 層
	70	15.2	-	e	1	IV 層
	73	14.6		_e	1	IV 層
	76	15.4	-	@	1	I 層
	80	17.1			1	IV 層
	82	16.9	_	Ъ	1	IV 層
	90	17.8		©	1	J —15
	91	17.5		e	1	IV 層
	93	19,2	_	e	3	IV 層
	94	18.6	_	e	3	K—17
	95	19.2	_	e	1	IV層
	98	19.1	_	@	3	IV 層

第30表 須恵器坏蓋計測表

また第29表は、前述のⅠ・Ⅱの蓋に、Ⅲ天井部の中心を欠失するためつまみの有無が判明しないものと、Ⅳ天井部を欠失するためつまみの有無および器高が判明せず、口径のみ判るものを加えて比較したものである。この場合にも、Ⅲ・Ⅳは本来Ⅰ・Ⅱいずれかに吸収されるものであろうが、第28表の場合と類似した点の集合がみられる。

また、口縁部とくに端部の形態には各種各様のものがあり、これ らを厳密に細分することは難しいが、おおむね7類に分けることが 可能である。

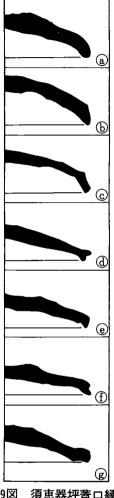
- ② 口縁部の屈曲はみられず、下方に内蛮気味にカーブを描き端部は丸くおわる。口縁部は肉厚である。天井部がややふくらむものに多くみられる。
- ⑤ 口縁部の屈曲はみられず、端部外面を強く横ナデされる ために明瞭な稜をなし、先端は尖り気味となる。
- 口縁部は屈曲して、下方向にやや外弯気味に長くのびる。外面に明瞭な段を有する。
- ④ 口縁部は一度外方へ突出したあと、内方より下方に短かく突出する端部をもつ。特殊な形態であり、出土例は1点のみである。
- ロ縁部が内方に屈曲し、内面に明瞭な段を有する。坏身口縁部との固定を強める効果を与えている。

口縁部は小さく屈曲するが、端部は外反無味に小さく突出する。

② 口縁部は端部近くで屈曲したのち外上方へのび端部が角ばっている。

つまみは各種の形態のものが出土しているが、蓋部との関連を 第49図 須恵器坪蓋口縁 部模式図 知ることのできるものは極めて少ない。これらを類別すると以下のようになる。

- (1)宝珠形で高く頂部が突出ないし突出気味のもの。 (77・99)
- (2)いわゆるボタン状の大きく扁平で、頂部が丸味をもつもの (100)
- (3)同じくボタン状であるが、(2)に比べて小型である。頂部の周縁部はやや下り、中央部が小さく突出するもの。またその場合、頂部の中心が周縁部より高くなるものと低くなるものとがある。 (78・86・101・102・103・104)
- (4)つまみの基部にくびれがなく、断面形が扁平な方形ないし逆台形をなすもの(79・85)
- (5)つまみの基部はくびれるが、頂部凹状をなすもの (105)
- (6)輪状のつまみを有するもの。なお、つまみの径は 0.5cm前後の小さいものと (106~



108) 0.75cmを超える大きいものとがある(109)

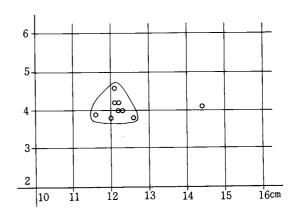
以上の類別結果を前述した口縁端部の形態と比較すれば、まず(1)のつまみは口縁端部②と結びつき(77)、(3)・(4)のつまみは口縁端部②と結びつき(78・79・85・86)、(6)の輪状つまみは口縁端部③と結びついている。(109)。言いかえれば、77では比較的古い形態を示すつまみ(1)をもち、口縁端部④との組み合せとなる、この傾向は78・81・85・86の蓋にもみられる。また109の輪状つまみの蓋は、比較的退化した口縁端部⑤と組み合せとなる。すなわち、つまみの形態変化と、口縁端部の形態変化には一定の法則らしきものが認められるのではなかろうか。

坏 (第59図110~118)

坏は計9点出土した。特に111では全体的に丸味を持つが、他はいずれも平底に直線的に外反する体部をもつもので、形態上に大きな差異は認められない。底部外面は回転へラ削りされ、体部内外面は横ナデ、底部内面は不定方向のナデが施される。これらの法量を比較したものが第表および表である。

分類	番号	口径	器高	底径	出土地点
	110	12.2	4.0	8.6	IV 層
	111	12.0	3.8	7.0	L-14(N層)
	112	11.6	3.9	7.4	1一層
I	113	12.3	4.0	8.2	I 層
	114	12.1	4.6	7.4	IV 層
	115	12.6	3.8	8.3	IV 層
	116	12.2	4.2	7.5	IV 層
	117	14.4	4.1	10.0	IV 層
II	118	_	_	9.5	IV 層

第32表 須恵器坏身計測表



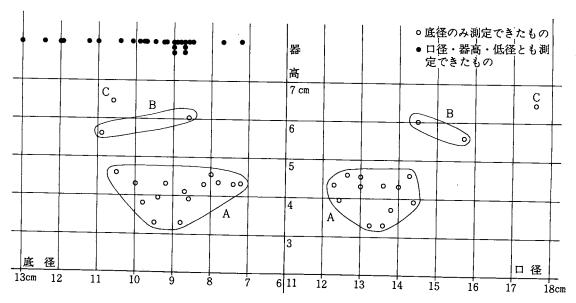
第31表 須恵器坏身法量比較表

個体数が少ないため速断はしかねるが、おおむね口径12cm前後、器高4cm以内の小型のものと、口径14cm以上、器高4cm以上の大型のものとがあり、前者を坏I類、後者を坏II類とした。 高台付坪第59図119~~130、第60図131~150、第61図151~162)

高台付坪(城)は各器種のうち最も多く出土 したが、図化可能なものを選び43点を図示した。 43点のうち、完形品を含め全体の復原ができた ものは15点で極めて少なく、他は底部のみの破

片で、復原したものである。まず、完形復原できたものと、底径復原できたものに分けて法量 の比較を行った。(第33表)

その結果、法量によって、A類=口径12~14.5cm、器高 $3 \sim 5$ cmの範囲内に入るもの、B類=口径14~16cm、器高 $5 \sim 6$ cmの範囲内に入るもの、C類=口径16cm以上で、器高 6 cm以上の 3 つのグループに大別することができる。しかし $A \cdot B$ 類では各個体にばらつきが目立ち、さらに底径と器高による比較では、その差をさらに増している のことは第33表に示した底径



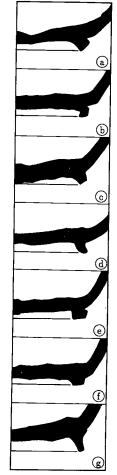
第33表 須恵器高台付坏・埦法量比較表

らに底径と器高による比較では、その差をさらに増している。このことは第33表に示した底径のみ復原できたものを加えることにより、その細分が可能であるが、この点については将来的な問題として、 大別にとどめておく。また法量によって、従来の器種名をあてはめれば、A類を高台付坏、B・C類を高台付境と呼称する。

次に高台の貼付け位置によって、①外底部周縁よりかなり内側に 貼付けるものと、②体部と底部にかけて丸味を持つために、やや不 明瞭であるが、周縁部よりやや内側に貼付けるもの、③外部周縁部 すなわち高台の外側が体部の延長上に位置するものとに分けること ができる

また高台は、断面形によって次の7類に細分することができる。

- 高台の基部は強くくびれ、外面に稜をなし、さらに下部は 内傾する。
- ⑤ 高台の基部はくびれ、外面に稜をなす。断面形はほぼ方形 に近いが、内面が内傾するもの。
- © 断面形は方形を呈し、角ばり、全体として外方に開くよう に貼付けられているもの。
- ② 全体に丸味をもち、外方に外弯するように貼付けられている。
- 断面形は扁平な方形であるが、高台基部が強くくびれるもの。断面形が扁平な方形ないし台形をなし、端部は角ばっている。
- ® 肉薄で高台は高く、やや外方に開くように貼付けられるもの。



第50図 須恵器坪高台 模式図

分;	類	番号	口径	器高	底径	高台の 貼り付 け位置	高台 の 形態	出地	土点	分	類	番号	口径	器高	底径	高台の 貼り付置	高台 の 形態	出地	土点
1-	A	119	13.6	4.35	7.8	1	a	J –	-15	1 -	- A	141	12.4	3.95	9.4	2	e	L-	-
		120		-	10.4	2	a	N	層	1 -	- A	141	12.3	4.35	7.2	3	Ø	P-	_
		121	_	_]	9.9	3	(a)	N	層			143	13.0	4.55	8.0	1	(D)	IV	層
		122	-	_	8.9	1	a	IV	層			144			9.4	1	Ø_	I	層
		123	_	_	7.2	1	a	I	層			145			8.7	2	(D)	Ш	層
1-	Α	124	14.4	3.9	8.6	1	a	IV	層			146			9.0	1	Ø	IV_	層
1-	Α	125	13.6	3.3	9.5	1	a	I	層			147			9.0	3	<u> </u>	IV	層
1-	Α	126	13.8	3.8	9.8	1	(b)	N	層			148			8.6	3	Ø	IV	層
		127	_	_	8.5	2	(b)	H-	- 7			149	L	_	8.8	3	(D)	IV	層
		128	_	•-	9.75	1	@	П	層			150	<u> </u>	_	9.0	2	Ø	I	層
		129	<u> </u>		9.25	2	0	IV	層	高城	台付 C	151	17.6	6.45	10.6	2	a	L-	-17 -
-		130	-	_	9.8	3	0	I	層	"	В	152	15.7	5.6	10.9	1	Ø	K-	- 16
1-	- A	131	12.3	4.3	8.2	1	©	IV	層	"	В	153	14.5	6.0	8.6	1	(D)	IV	層
1-	- A	132	12.65	4.1	8.7	1	@	IV	層			154	<u> </u>		11.2	2	@	J-	-18
1-	- A	133	13.5	3.3	8.8	2	@	J.	_ _15			155	_		12.0	3	0	I	層
1-	- A	134	13.0	4.3	9.2	2	a	K	-14			156	_	<u> </u>	12.4	2	Ø	E	-19
1-	- A	135	14.0	4.3	10.0	2	C	L	-14			157		_	9.5	1	(D)	IV	層
\vdash		136	<u> </u>	_	9.9	2	0	I	層			158			11.0	2	(D)	I	層
		137	1=	-	7.7	1	0	IV	層			159	_	_	13.0	2	D	I	層
	_	138	1-	1 -	8.7	2	©	IV	層			160	_	_	10.1	2	(D)	IV	層
T-	- A	139	14.3	4.6	10.0	2	0	IV	層			161			11.9	5 ②	D	IV	層
1	- A	140	13.0	4.3	7.4	1	e	0	- 15		_	162			8.2	2 3	1	P	15

第34表 須恵器坏蓋計測表

番号	口径	器高	出土地点
163	13.2	1.7	IV
164	_	_	IV
165	15.3	2.0	IV
166	15.6	2.5	IV
167	16.4	2.25	IV
168	16.8	2.45	IV
169	18.7	2.65	K—14
170	19.1	3.1	I —14
171	30.2	2.15	K—14

第35表 須恵器皿計測表

皿 (第61図163~171)

小破片を含めると約30個体以上が出土しているが、 うち復原図示できたのは計9点にすぎない。口径13.2 cmの小型の皿から、口径30cmを超える大型のものまで あるが、形態・技法上特筆すべき 差異はみられない。 体部は直線的に外反するものと、わずかに外弯気味に 立ちあがるものとがあるが、立上りの角度はおおむね 45°前後である。口縁部は内面より比較的強くナデつ けられるために、稜をもつもの(163・165・167・169・ 170)があるが、端部は例外なく丸味をもっておわる。

底部は回転へラ削りされ、体部内外面は横ナデ調整し、内底部は不定方向のていねいなナデを 施している。以上各個体の法量は第35表に示したとおりである。

3 Ⅲ区出土土器

(1)土師器

菱形土器 (第62図1~7)

出土量は極めて多いが、小破片で、全体のプロポーションがわかるもの皆無であった。いずれも口縁部破片により復原したものである。全体的にナデ肩のものが多く、頸部は「く」字状に屈曲するもの(1~4)と、さらに外弯気味に強く屈曲するもの(5~7)とがある。頸部から口縁部にかけて復原するものが多く、端部はやや角ばっている。外面の頸部以下は荒い刷毛目調整が施されるが、頸部外面から口縁部内外面にかけては横ナデ調整される。また頸部外面に指圧痕を残すもの(2・5)がある。内面はタテ方向ないしナナメ方向のヘラ削りが施されるが、頸部を細かにヘラ削りして調整したもの(7)も認められる。なお復原口径は最小で2の25.7cm、最大で7の29.2cmで最も多いのは26~27cm大のものであった。

番号	口径	出土地点
1	26.3	流路44層
2	25.7	"
3	27.5	"
4	26.2	"
5	27.2	"
6	27.5	"
7	29.2	"

第36表 土師器甕計測表

坏 (第63図8~17)

先にⅢ区において坏の類別を試みた。その結果をふまえれば、Ⅲ区流路内出土の坏はいずれもⅠ類の精製土器であり、Ⅲ類の底部を静止へラ削りする粗製のものは出土していない。口径は a 類に比べやや大きいが、器高 2.8cmでかなり浅い坏である。体部は大きく外反して立ちあがる。

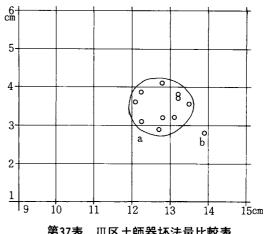
体部と底部の境が明瞭で、体部がやや内弯気味に立ち上がる。底部はていねいな回転へラ削り調整し、体部内外面もていねいな横ナデにより仕上げている。なお12~17のホストは内外面赤色顔料が認められる。また16・17では内面にていねいなヨコ方向のヘラ磨きが施されたあと赤色顔料を塗布している。

高台付坏(第63図24)

24は口径11.1cm、器高 4.2cmで やや小型である。坏部は半球形状 で、外底部周辺部よりやや内側に 高台が貼付けられる。黄褐色を呈 し、調整はていねいでシャープで ある。

高台付城 (第63図18・19・25)

出土数が少なく、形態の全容を



第37表 III 区土師器坏法量比較表

知ることが出来るものは少ない。18・19は底部の破片、やや肉薄で高い高台を有するものであ る。高台は18がほぼ垂直に、19ではやや外反気味に貼付けられている。外底部は回転ヘラ切離 しのあと無調整で、他は横ナデ調整で仕上げている。なおこの高台はⅠ・Ⅱ区では出土してお らず、それらとは一線を画する一群であろう。ここではこの一群の埦をⅡ区出土のA・B類に ひきつづき埦C 類と呼ぶことにする。

25は底部破片である。高台は高く、やや内弯気味に開き、端部は丸くおわる。埦A 類(第 図33~35) と類似する。

	番号	口径	器高	底径
坏	8	12.25	3.1	6.2
	9	12.25	3.85	5.5
	10	12.8	4.1	6.5
	11	13.1	3.2	7.3
	12	12.1	3.6	5.8
	13	13.9	2.8	8.1
	14	13.5	3.55	9.3
	15	13.2	3.7	7.7
	16	12.7	2.9	8.0
	17	12.8	3.2	8.5
	18			8.9
高台付埦	19			8.4
	20	14.9	6.55	8.5
	21	16.35	7.15	8.8

Ш	22	15.5	2.05	
	23	13.8	1.9	
台付小皿	26	12.7	3.7	6.9
黒色土器	28			6.9
	29			8.0
高台坏	24	11.1	4.2	3.8
	25			8.8
	27			9.3

第38表 III区土師器計測表

皿(第**63**図 22・23)

全体的に肉厚で口縁部は外弯気味に短かく立 上る。内底部は回転ヘラ削り調整し、外底部は 不定方向のナデ、口縁部は横方向のていねいな 横ナデで仕上げている。23は内外面とも赤色顔 料の途布が認められる。

高台付小皿 (第63図26)

体部は大きくラッパ状に開き、口径12.7cm、器高 3.7cm、底径 6.9cmを測る。高台は外弯気味に開き、高さ 1.1cmでこの器種としては低い。黄褐色を呈し、器面は荒い横ナデ調整で仕上げている。

黒色土器 (第63図28・29)

いずれも底部の約½の破片で、内面のみ黒色が認められる。高台は低く断面形は逆台形をなすもの (28) と、小さく外弯するもの (29) とがある。器面の調整は粗雑で、黒色部分のヘラ磨きも認められない。

(2) 須恵器

1不蓋 (第64図30~39)

蓋にはつまみを持たないもの、(I)ともつもの(I)とがあるが、小破片が多く半数以上のものは、天井部の中央を欠失しているためⅠ・Ⅱ類の分類は困難である。

まず法量によって類別すると∏区出土例と同様に3ないし4つのグループがある。

A類 口径13~14cm、器高2cm未満(30~31)

B類 口径14~15cm、器高2~3 cm (32・34・37・38)

C類 口径16cm以上、器高 2 cm以上(33)

つまみを有する II 類の蓋では E 類口径14cm以下のもの(36)、 F 類口径15~17cmのもの(39)、 G 類口径18cm以上のもの(35)がある。またつまみは宝珠形の高いもの(35)と、ボタン状の 扁平なつまみで中央部がやや高くなるもの(36)とがある。口縁端部の形態(第49図)では、 (b)・(c)・(e)類があり、(e)類が最も多い。

調整技法はいずれも天井部を回転ヘラ削り、天井部内面を不定方向のナデを、口縁部内外面 は横ナデして仕上げる。なお30では天井部もていねいな横ナデを施している。

坏 (第64図40~51、第65図52~63)

計23個体図示した。いずれも法量・形態・技法上の差異は認められない。まず法量では口径 11.6cmのものが最少で、13.0cmのものが最大である。器高は 3~4 cm以内にすべておさまる。 これらを比較した第 表では、点の集合にばらつきがなく、ほぼ円形にまとまっている。

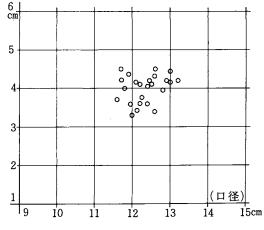
形態上では、体部が直線的に外反して立上るもの(43・52~56)と、外弯気味に立上るもの などの細かい変化がみられるが、類別できるほどの大きな変化は認められない。

技法上は底部を回転ヘラ削り、内底部を不定方向のナデ調整を施したあと、体部内外面を横

ナデ調整により仕上げる。なお44 ・50・52・57・60・63は灰白色を 呈し焼成不良であるが、他はすべ て青灰色ないし暗灰色で焼成良好 である。

高台付坏・塊 (第**65**図64~70 第**66**図71~87)

高台付坏(埦)は最も多く出土 している。うち31点を図示した。



第39表 III区須恵器坏比較表

これらはまず法量によってA類—口径13~14cm、器高 5 cm以下のもの、B類—口径14~15cm、器高 5 cm以上のもの、C類—口径16cm以上のもの、またさらにD類—口径12.8cm、器高 5.7cm の各グループに分けることができる。 II 区の場合と同様、A類は高台付坏、B・C・D類は高台付埦と呼ぶことができる。

64~66は、やや丸味をもった体部に高台②を有するものである。法量は3点とも口径13.5cm 前後、器高 4.7cmおよび 4.8cmでほぼ一致している。体部は内弯気味に立上り口縁部は小さく 外弯するもの (64) とストレートのもの (65・66) がある。外底部は回転へラ削りのあと高台を貼付け、高台の内面を強くナデつけているために内弯気味になっている。体部は内外面とも 横ナデ、内底部は不定方向のナデを施している。3点とも青灰色を呈し、焼成良好である。

67~70はA類(高台付环)高台①を有するものである。体部は底部から急に屈曲して直線的に立上る。高台は低く底辺周縁よりやや内側に貼付けられる。外底部は回転ヘラ削りされ、内底部は不定方向のていねいなナデ調整を施し、体部内外面から底部にかけて横ナデにより仕上げている。67・69は灰白色を呈し、砂粒を多く含み焼成不良であり、68・70は青灰色で焼成良好である。

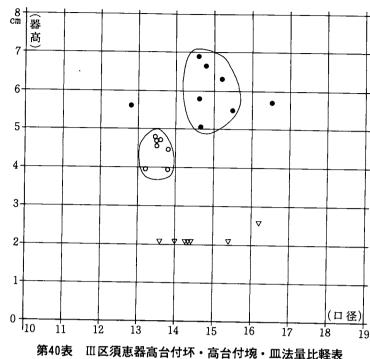
71はD類高台付埦であり、高台は①類である。復原口径12.8cm、口径 5.6cmで埦としては小型である。黄灰色を呈し、体部内外面を横ナデ調整で仕上げる。

72~75、77、78はB類高台付埦で、高台は72が①類、他はすべて①類である。口径15cm前後、器高 6 cm以上であるが器高においてややバラつきがみられる。体部は直線的に立上るものと、わずかに内弯(77)外弯(72)気味に立上るものとがある。高台は底部周縁に貼付するもの(72~73)と、やや内方に貼付けるもの(74~78)とがある。底部は回転へラ削りのあと未調整。体部はやや荒い横ナデを施している。なお高台はすべて①類である。

76はC類高台付埦で口径16.45cm、器高5.7cmで、B類に比べると、口径がさらに大きくやや 浅いものである。体部は直線的に大きく開きながら立上る。高台はやはり①類である。

79~87はBない しC類の高台付埦 であるが口縁部を 欠失するため詳細 は判明しない。高 台はff)類ないしそ の範疇に入るもの が多く、底部周縁 に沿ってあるいは 周縁近くに貼付け られる。これらの 法量は第 表に示 した。

95~100、高台付 坏(埦)の外底部



破片である。96・97は高台で類、98~100は高台で類である。

101は高台@類を有する高台付坏(埦)である。

皿 (第67図88~94)

計 9 点出土した。口縁部は底部との境が不明瞭で内弯気味に立上るもの(90・93・94)と、 屈曲して立上るもの(88・91・92)とがある。底部はほぼ水平面を保つが、88・90・94ではや やふくらみをもち、91では底部の中央が周縁より高くなり、また底部と体部の境が屈曲し、さ らに屈曲して外弯気味に外反している。口縁部はいずれも丸くおわっている。底部は回転ヘラ 削り、体部内外面は横ナデ調整で仕上げられる。

突帯付壺 (第67図102)

流路4A層から出土したものである。全体的に厚いつくりで肩部は強く屈曲し、頸部は強くく びれる。口縁部を欠失するが、ラッパ状に開くものと思われる。肩部および肩部と頸部との中 問に突帯を貼付けている。2条の突帯のうち肩部の突帯は断面三角形を呈し、上部の突帯はや や小さめである。底部は平底で、周縁部に沿って高台を貼付ける。高台は外弯気味に下り、端 部は角ばっている。底部は回転ヘラ削りを施し、胴部中位以下では回転を利用した横方向のヘ ラ削りによって調整する。他部は内外とも横ナデ調整により仕上げている。青灰色を呈し、焼 成は極めて良好である。

鉢(第**67**図 103~ 105)

いずれも流路IV層出土したものがある。体部はやや内弯気味に立上り、口縁部では内傾気味となる。 103は黄褐色を呈し、口縁部外面に「V」字状のシャープな沈線を2本めぐらす。その間隔は 0.9cmを測る。さらにその下部では回転を利用したタテ方向(上→下)のヘラ削りにより調整している。他は内外面ともていねいな横ナデ調整で仕上げられるが、口縁端部内面はやや内傾している。 104は青灰色を呈する。口径19.5cm、器高11.8cmを測る。全体として厚いつくりである。外底部および体部外面下部にかけては回転を利用したヘラ削りを施し、他は内外とも横ナデ調整であるが、とくに外面ではていねいに仕上げている。

105 は把手付鉢である。口径17.5cm、器高 14.55cm、底径 8.3cmを測る。口縁端部より 4 cm のところに小型の把手を貼付けているが、その数は判明しない。体部中位以下から底部は回転を利用したヘラ削り、他は横ナデ調整により仕上げる。

(3) その他の遺物

須恵質土器 (第68図1~5)

前節で述べた土器類の他に、形態上は須恵器に類似し、土師器にみられる手法が認められる もの、あるいは、通常須恵器にみられる手法と土師器にみられる手法が併されている一群の土 器を、ここでは「須恵質土器」と呼び一括して述べる。計 5 点出土しているが、いずれも小破 片である。4 は I 区A − I 層で他はすべてⅢ区流路 3 層から出土したものである。

- 1. 甕形土器口縁部破片により復原したものである。撫肩で口縁部は外弯気味に開き、端部はやや肥厚し角ばっている。肩部は横ナデするが、この場合、格子目タタキの側端部を利用したものであろう。さらに体部外面は格子目タタキにより整形し、口縁部内外面は横ナデ、肩部内面はナデ調整している。黄白色を呈し、大小石粒を多く含んでいる。色調・胎土・焼成とも土師器の場合と極めて類似している。
- 2. 甕口縁部破片である。頸部は強くくびれる。口縁部は外弯気味に立上り、端部は外面に段を有し、さらに小さく突出している。胴部外面は格子目タタキ、内面を同心円タタキにより整形したのち、口縁部内外面を横ナデ調整している。格子目の単位は1の場合と同じである。 黄褐色を呈し、砂粒を多く含む、焼成は不良である。
- 3~5は、甕の胴部破片である。外面を格子目タタキ、内面をタテおよびナナメ方向のヘラ削りが認められる。3は黄褐色で外面は黒味を帯びている。4は灰白色、5は黄白色で外面に赤色顔料が認められる。

文字ある土器 (第68図4)

器面にヘラで文字を刻んだ土器が2点出土した。一つは前述した須恵系土器に刻まれたもの

で、「衆」と読むことができる、衆は衆であり、衆の俗字である。古代にあっては、寺院の中枢機構に付属する施設として、厨房・窯屋や各種の倉庫・雑舎があって、日常生活全般をまかなう機関であった。こうした機関を食堂および大衆院と呼んでいる。また「大衆」を僧侶の総称としても使用していた。もう1点は、土師器高台付坏の外底部に施されたもので、「寺」と読める。昭和30年の調査において、丸瓦凹面にも「寺」と刻まれたものが出土している。文字ある土器の中でも、ヘラ描き土器は墨書土器と基本的に目的を異にしている。すなわち、ヘラ描き土器は、土器製作のある段階で生産者によって施されるのに対し、墨書土器は需要者側で施される場合が考えられる。したがって前者では、土器製作集団が、特定需要者に対して一種の「目じるし」として刻む場合が想定され、後者はその土器の使用場所・目的を記すのではなかろうか。

弥生式土器・越州窯青磁(第69図1~3)

1は弥生式土器でI-D区II層から出土したものである。胴部下半を欠失する壺で、口縁部はやや内弯気味に立上り、端部は角ばっている。頸部外面に粘土ひもを用いた貼り付け凸帯がめぐらされている。いわゆる「成川式土器」との関連をうかがわせる。

2は越州窯青磁皿でⅠ—D区Ⅱ層より出土したものである。復原底径11.1cmである。いわゆる蛇目高台で、全面に施釉され、見込みとたたみつき部分に目痕が残っている。色調は緑灰色で露胎部分は灰白色を呈している。3は越州窯青磁塊でⅠ—D区Ⅱ層から出土したものである。幅の広い高台はやや上げ底気味に削り出されている。施釉は内面にのみみられ、黄緑色を呈している。みこみの部分に目痕がみられ、露胎部分は灰白色を呈している。

瓦器・陶磁器

1は瓦器釜で体部は強く張り、口縁部は肉厚で直立するが、内面はやや内傾している。頸部 に稜を有し、押捺花文帯となっている。灰褐色を呈し砂粒を多く含む。

2~4は瓦器鍋の破片である。2は口縁下に突帯を貼り付け、口縁部がやや肥厚し、端部は水平面となる。口縁端と突帯との中間に押捺五葉文がめぐる。3は2条の突帯で区切り、この間を連結するタテ方向の沈線を施している。4は口縁部を欠失するが、突帯の上部に刻印花文が連続する。5は瀬戸おろし皿である。口径14.1cm、器高4.0cmを測る。内底部に縦横の荒い溝を刻む。外底部は回転糸切り離しのまま無調整、やはりロクロ水びきで仕上げる。内面および外面の一部に灰褐色の釉が認められる。灰褐色を呈し胎土密である。

6 · 7 は摺鉢底部破片である。底部は肉厚で体部に移行するに従い薄くなる。内面は方射状のクシ目(6)、不定方向のクシ目(7)が認められる。底部は両者とも回転糸切り離し、無調整である。赤灰色を呈し、胎土は密で焼成良好である。

瓦製円盤(第71図)

出土遺物の中で特異なものとして、瓦製円盤があり、あわせて12点出土した。 3 · 5 · 7 · 12の 4 点は I 区、 4 · 9 · 10の 3 点は II 区、 1 · 2 · 6 · 8 · 11の 5 点は II 区から出土したものである。以上のうち出土層位が明らかなものは 2 · 7 · 11が II 区流路 3 層、 4 が II 区 II 層、 5 が I 区 (I − D) II 層で、他は各調査区の表土から出土したものか採集したものである。

5 は瓦器質土器を再加工したもので、他はすべて平瓦を再加工したものである。瓦を用いたものでは、平行タタキ目、格子タタキ目、無文の 3 種があるが、他のタタキを使用した瓦を利用したものは発見されていない。加工方法は交互に打ち欠いたままのものと、さらに周辺を研磨して丸味を持たせたものがあり、前者の方が圧倒的に多い。大きさは直径 7 cm前後の小型品と、直径 $9\sim11$ cmの大型のものとがある。

	加工材	加工方法	大きさ(単位cm)	厚さ	重量	出土地点
1 5	平瓦(平行タタキ)	交互剝離	7.7×7.0	2.4	160	Ш
2 5	平瓦 (平行タタキ)	交互剝離→研磨	7.2×7.2	2.4	139	Ⅲ区流路3層
3 2	平瓦(格子タタキ)	交互剝離	7.7×6.9	1.8	115	I
4 5	平瓦(格子タタキ)	"_	6.7×6.3	1.8	82	Ⅱ区Ⅲ層
5)	瓦質土器	交互剝離→研磨	6.5×6.3	1.3	60	I区(I-D) Ⅱ慢
6 5	平瓦 (平行タタキ)	交互剝離	7.0×6.7	2.5	134	
7 5	平瓦 (無文)	4	7.4×7.0	2.1	121	Ⅲ区流路3層
8 2	平瓦(無文)	"	8.2×7.0	2.0	132	Ш
9 2	平瓦(格子タタキ)	"	7.0×6.7	2.1	105	П
10 5	平瓦 (無文)	"	10.2×8.2	2.5	261	П
11 3	平瓦(格子タタキ)	"	11.1×9.5	2.0	275	Ⅲ区流路3層
12 3	平瓦(格子タタキ)	"	9.0×7.5	2.1	198	I

第41表 瓦製円盤一覧表

いずれにせよ、後世の2次的加工であることは確実であるが、どのような用途であるかは不明である。遺物の年代については、5の瓦質土器にこの上限を求めることもできるのではなかろうか。

古 銭

Ⅲ区流路3層から古銭1点が出土した。表面が腐蝕している ものの「嘉祐通宝」と読める。「嘉祐通宝」の鋳造初年は北宋 の嘉祐元年(1056年)である。

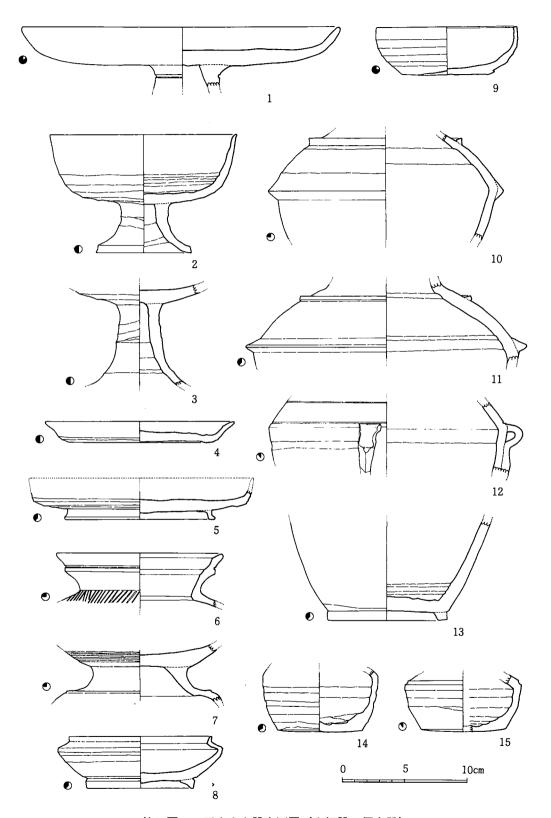


		Nα	口径	器高		高台付坏・埦	No.	口径	器高	低 径
蓋	A	30	13.0	1.3	e	高台付坏・埦	64	13.6	4.7	9.4
	A	31	13.1	_	e		65	13.45	4.8	8.1
	В	32	15.1	2.0	e		66	13.5	4.55	9.1
	С	33	16.4	2.6	e		67	13.8	4.45	8.7
	В	34	15.5	1.7	e		68	13.2	3.95	9.7
	ッ	35	21.6	2.0	e		69	13.8	3.95	8.2
	ッ	36	14.7	2.2	с		70	13.5	4.7	8.5
	В	37	14.9	2.55	с	埦	71	12.8	5.6	8.1
	В	38	15.8	2.15	ь		72	14.6	5.8	10.3
	ツ	39	16.6	1.45	с		73	15.2	6.3	8.5
							74	14.8	6.65	8.9
		No.	口径	器高	低径		75	14.6	6.9	8.45
坏		40	12.6	3.4			76	16.45	5.7	8.9
		41	12.4	3.6			77	14.65	5.1	8.5
		42	12.1	3.4		-	78	15.5	5.5	8.1
		43	11.95	3.6			79	_	_	9.5
		44	12.0	3.3			80	_	_	8.7
		45	11.6	3.7			81	_	_	9.85
		46	12.2	3.6	·		82	-	_	11.2
		47	12.4	4.05			83	_	_	11.0
		48	12.45	4.2	-		84	_	_	9.35
		49	12.8	3.95			85			9.0
		50	11.7	4.2			86	_	_	8.2
		51	11.8	4.0			87	_	_	8.5
		52	11.7	4.5			95	_	_	10.1
		53	12.25	3.75			96	_	_	9.1
		54	12.2	4.1			97	_	_	8.4
		55	12.1	4.15			98		_	9.2
		56	12.5	4.1			99	_	_	8.0
		57	13.0	4.15			100	. –	_	7.8
		58	12.6	4.5			101	_	_	6.8
		59	12.6	4.25						
		60	13.2	4.2			88	14.4	2.1	
		61	12.9	4.25			89	14.35	2.1	
		62	13.0	4.45			90	13.6	2.1	
		63	11.9	4.35			91	14.0	2.1	
盤ねつ書		マ海ョ	怎器計測 著	±			92	14.3	2.1	
新44 茶	< 111 I	△ 須見	以奋计测剂	R.			93	15.4	2.1	
							94	16.2	2.6	

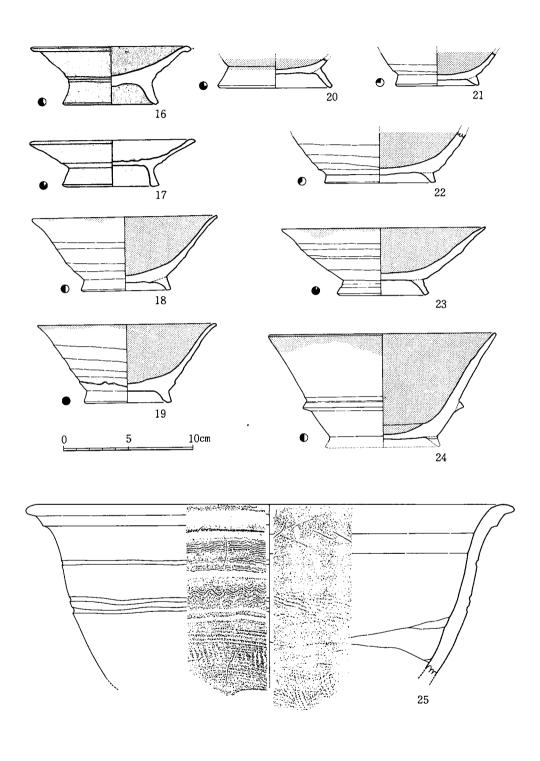
出土土器集成

凡 例

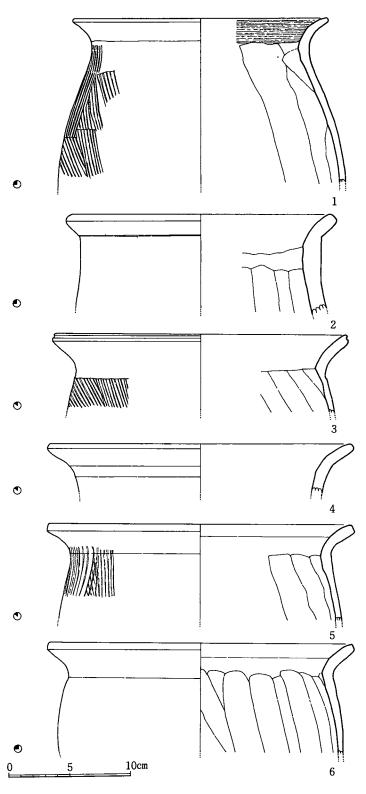
- (1) 出土土器は原則として、実物の3分の1の大きさに統一するようつとめたが、例外的に2分の1のもの(第69図)がある。
- (2) 出土土器の番号は、調査地区ごとに、1・2 ・3の順に通し番号を用いた。またこの番号は 図版(写真)中の番号に一致する。
- (3) 実測図の左端に印した●あるいは●等の記号は、その遺物の残存度合を表わしたものである。たとえば、●は完形および完形に復原できたもの、●は全体の2分の1を残す破片から復原図化したものであることとを示している。したがってこれらの記号の本来的な目的は、遺物の残存度合を明らかにするとともに、破片による復原の場合、その法量の信頼度をも明確にしようとしたものである。
- (4) 名図版の構成に際して、各地区とも土師器、 黒色土器等を前半に、須恵器を後半に配置した。 したがって、同一図版中に両者が混在する場合 がある。



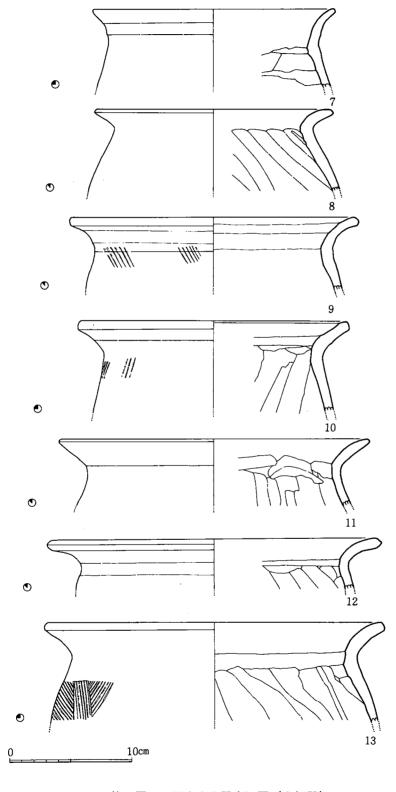
第51図 I 区出土土器実測図(土師器・須恵器)



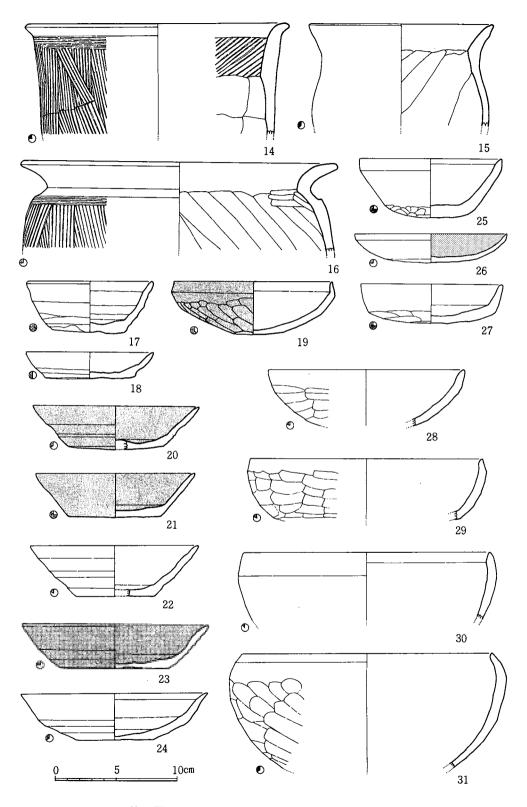
第52図 I区出土土器実測図(土師器・須恵器・黒色土器)



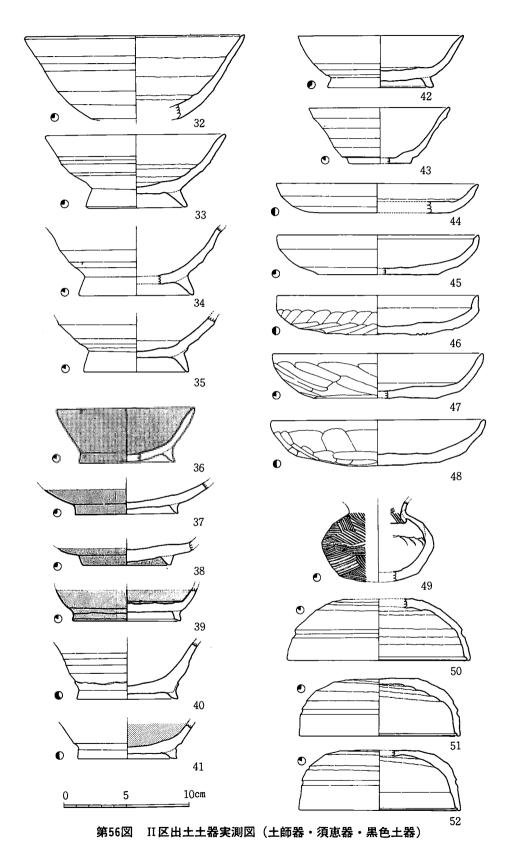
第53図 II区出土土器実測図(土師器)

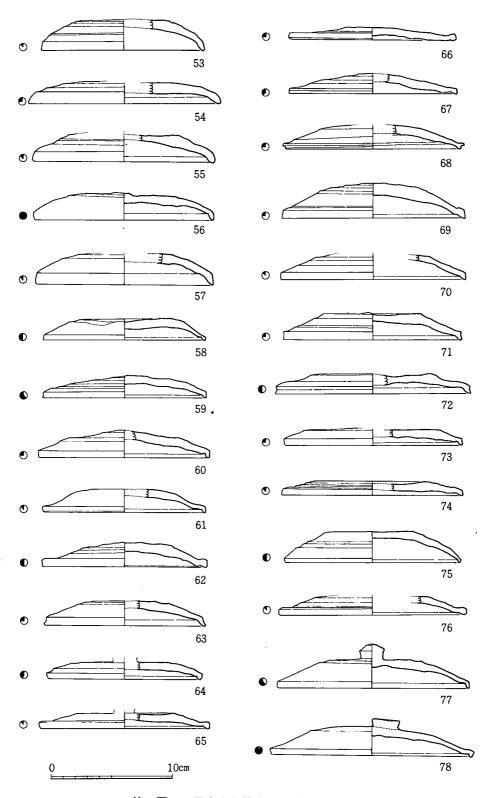


第54図 II区出土土器実測図(土師器)

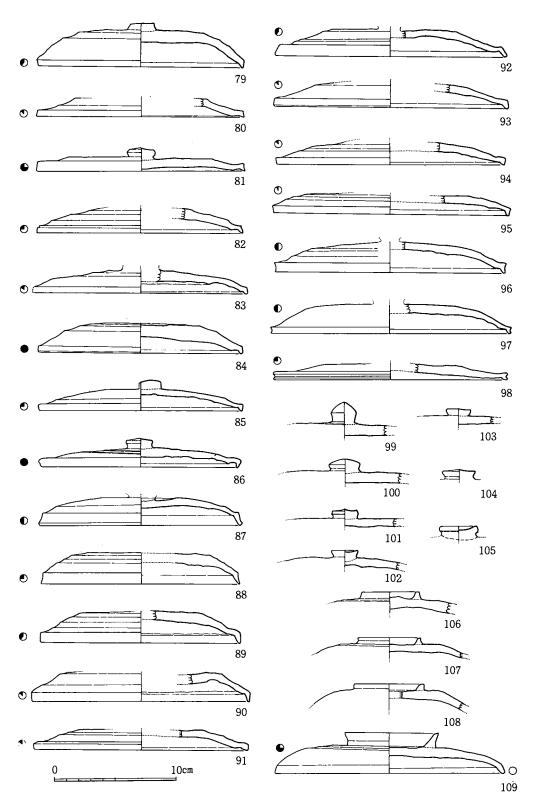


第55図 II区出土土器実測図(土師器・黒色土器)

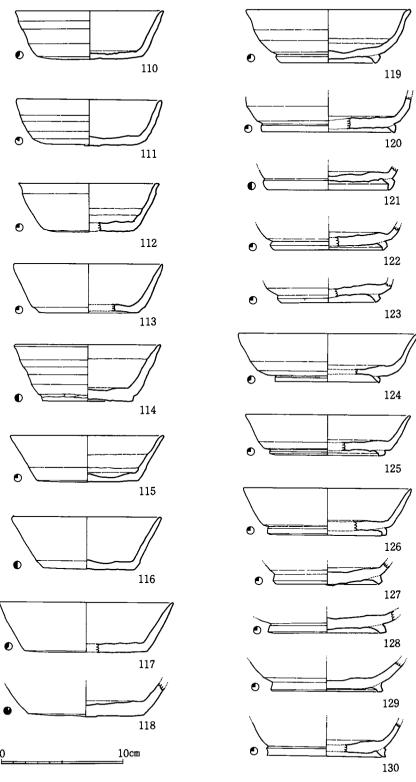




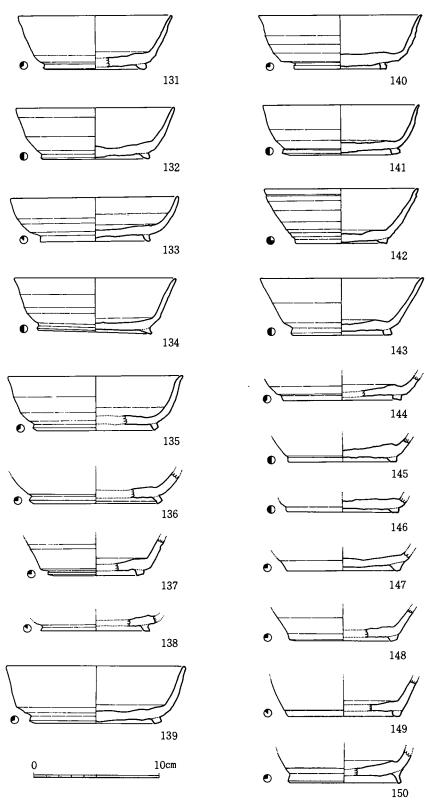
第57図 II区出土土器実測図 (須恵器)



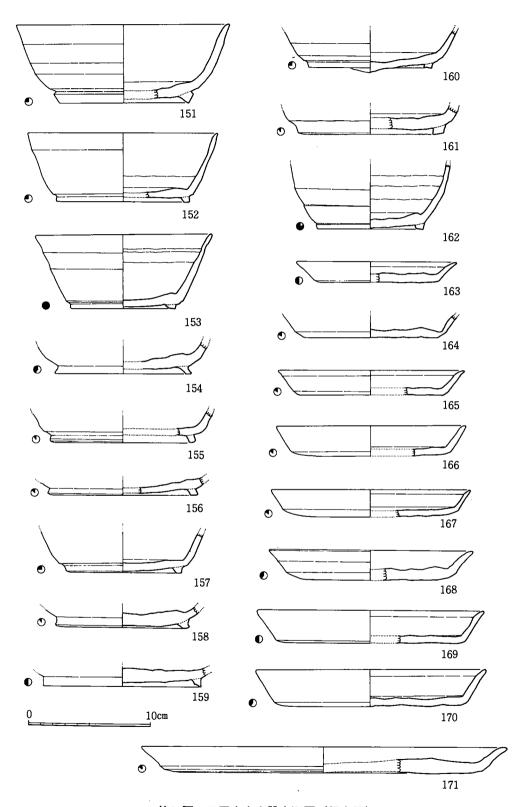
第58図 II区出土土器実測図(須恵器)



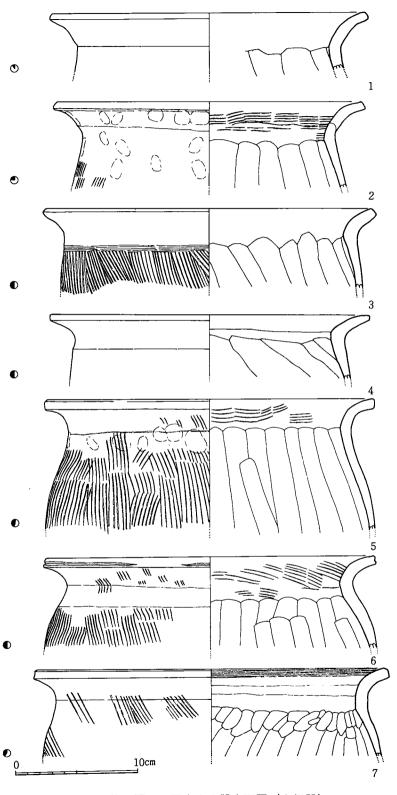
第59図 II区出土土器実測図 (須恵器)



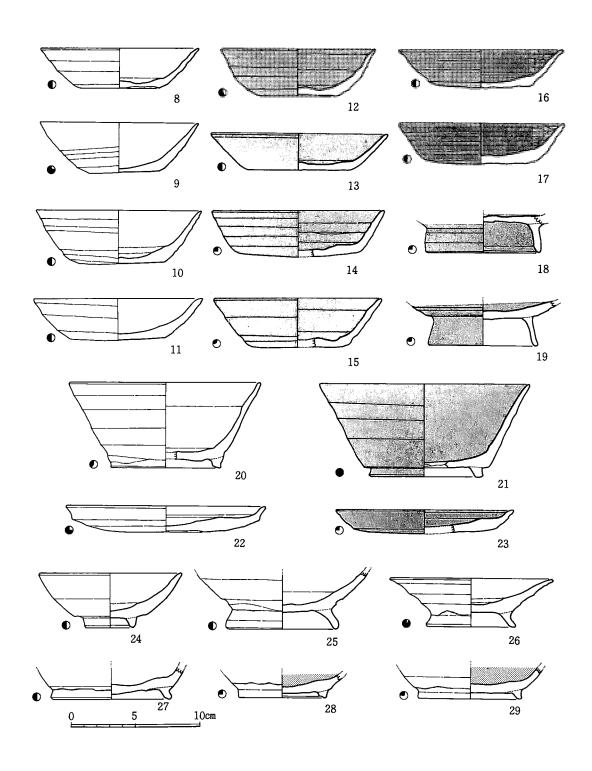
第60図 II区出土土器実測図(須恵器)



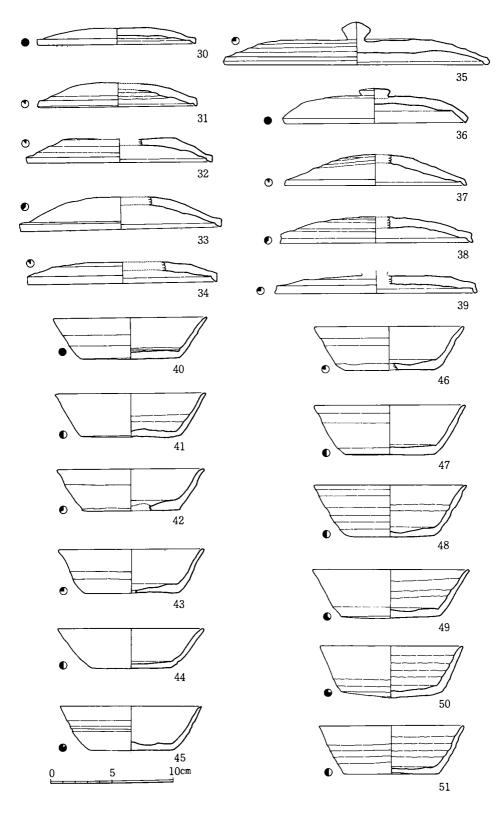
第61図 II区出土土器実測図 (須恵器)



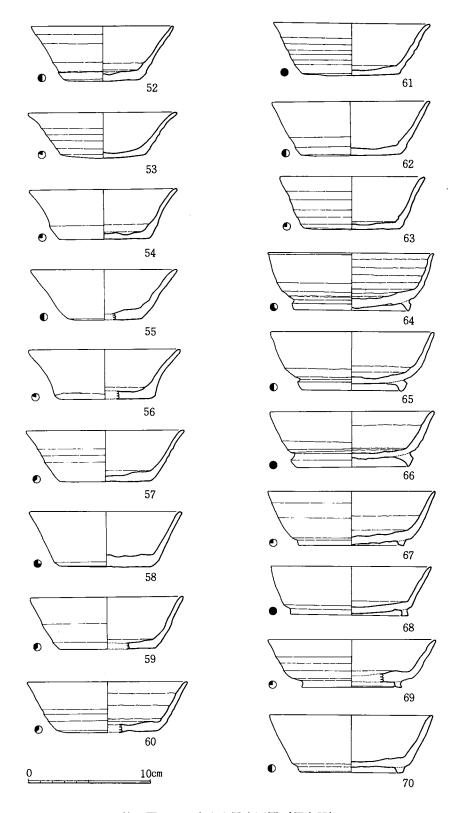
.第62図 III区出土土器実測図(土師器)



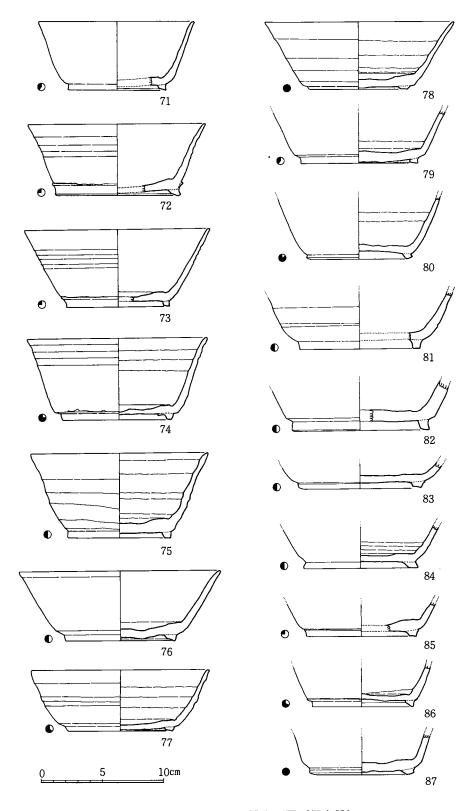
第63図 Ⅲ区出土土器実測図 (土師器・黒色土器)



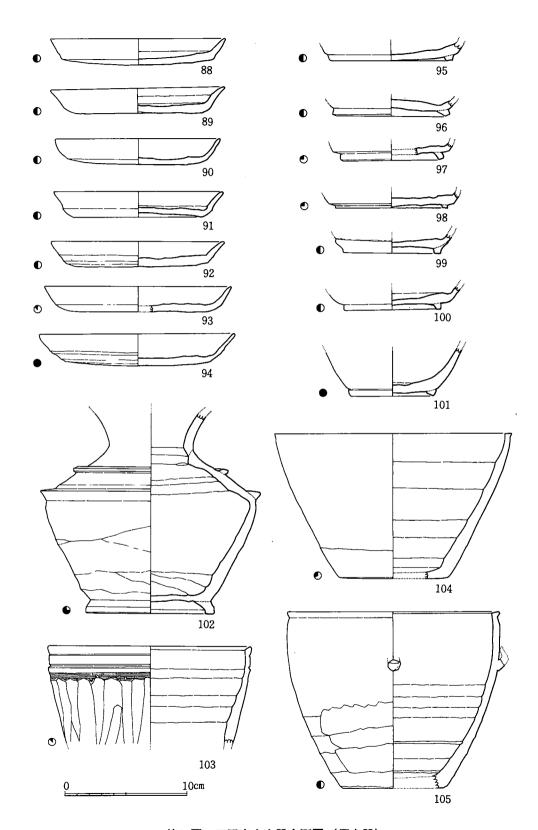
第64図 Ⅲ区出土土器実測図(須恵器) ・



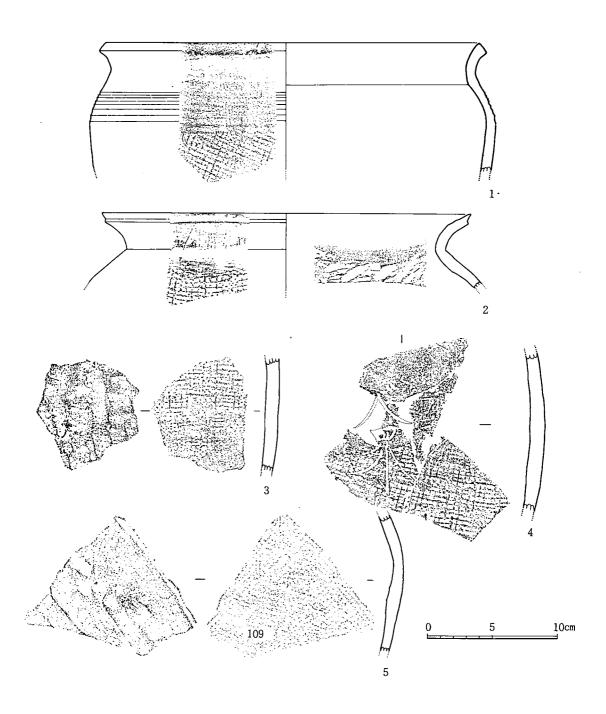
第65回 III区出土土器実測図(須恵器)



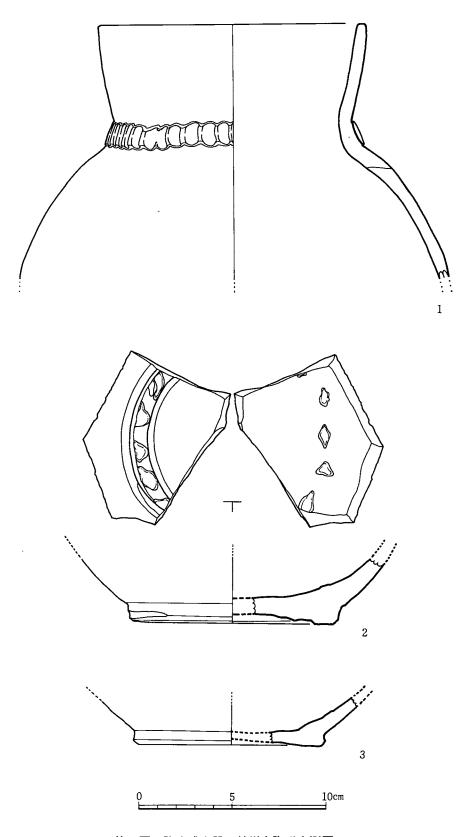
第66図 III区出土土器実測図(須恵器)



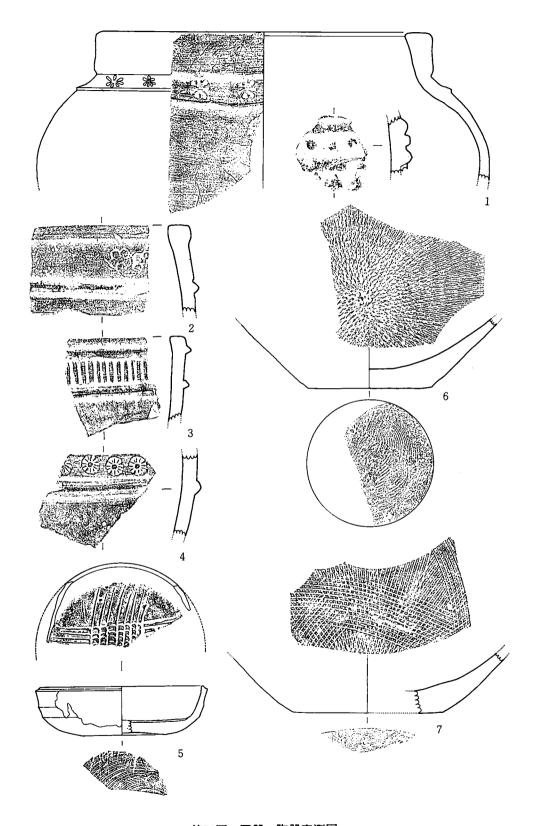
第67図 III区出土土器実測図 (須恵器)



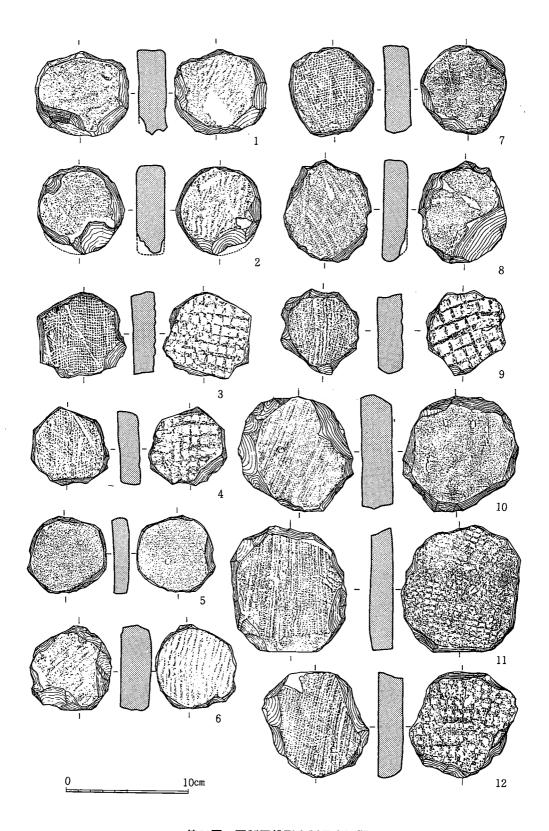
第68図 Ⅲ区出土土器実測図 (須恵質器)



第69図 弥生式土器・越州窯陶磁実測図



第70図 瓦器・陶器実測図



第71図 瓦製円盤形土製品実測図

第4章 調査の成果と問題点

今回の調査は、興善寺跡の伽藍中枢部に直接手を加えるものではなかったが、検出した遺構 と遺物から、寺院の輪郭と細部の問題に関して、新たな事実と、いくつかの問題点とを生む結 果となった。ここでは、そうしたいくつかの問題についてふれ、まとめとしたい。

(1) 寺院の建立まで

寺院がこの地に造営される前段階においても、当然のことながら、各時代の足跡が残っていたはずである。しかしそれらの多くは、寺院の建立に際して破壊されたことが想像される。山地が海岸線にせまる古代の八代平野においては、極一般的な現象であった。

今回の調査では、古墳時代土器群を伴う井戸状遺構を検出した。それらの年代は5世紀の後半に位置づけられ、この時代の集落の存在が考えられる。また遺構は全く検出できなかったが、6世紀~7世紀の土師器・須恵器等もかなりの数が出土している。本遺跡の北、竜峰山山麓一帯は八代平野における古墳群の密集地点であり、そのほとんどが6世紀代以降の後期古墳である。また遺跡の南の水田地帯には、さらに年代的にはさかのぼる5世紀代の古墳群が連綿と続(註1) き、南端は球磨川河口付近まで達している。こうした古墳群の分布を見ると、特に本遺跡を中心とする一帯は、いわば古墳の空白地帯となっているのである。このことは前述したように、寺院の存在と必ずしも無関係とは言えず、むしろ寺院の建立に伴ってその多くが破壊されたことを物語るものではなかろうか。

また出土量としてはわずかであるが、弥生時代後期の土器が出土している。最近八代市岡町境遺跡からは、やはり弥生時代後期の竪穴住居址が検出されている点などを考えれば、八代平野における弥生時代遺跡の実体については不明点が多いものの、平野に沿った丘陵斜面から一部平野部の微高地にかけては、まだ多くの弥生遺跡が埋れているにちがいない。今後の調査を待ちたい。

(2) 寺域について

興善寺跡については、昭和35年の調査によって、寺域および伽藍配置についての復原がなされている。これについては、第1章においてその概要を紹介したが、今回の調査によって、従(註3) 来推定されていた寺域とはやや異なることが明らかとなった。

すなわちII区南側一帯からIII区流路にかけて出土したおびただしい量の瓦や土器群は、直接的に寺院に結びつくもので、遺物とその出土状態から興善寺の造営時期の遺構であることは確定してよいであろう。したがってII区築地状遺構と仮称した土塁は、寺院を区画したところの

「築地」と考えられる。

築地を確認した長さはわずか6m余りであるが、II区南側に隣接したIII区で東西方向に流路が走り、ここを境として南側には遺物の分布も途絶え、何ら遺構らしきものを検出できなかった。したがって、築地南北線は流路の南側に及ぶとは考えられず、すくなくとも確認した南端よりさらに南側2~3mの地点にコーナー部分が当るものと推定された。なおこのコーナー部分から東へ走る遺構については、調査地区が後世の建物掘形により攪乱を受けていたために、明瞭な遺構を確認することが出来なかった。

今回確認した築地線と、従来の推定とを机上で重ねると、従来の推定線よりさらに西に約22mのところにあたり、山側を走ることになる。また主軸方位では、今回がS−21°-Eで従来の推定より東へ2~3度ふれていることが明らかになった。

したがって伽藍中枢部の各建物間の位置関係からの対比はできないが、寺域そのものがさら に西側に広がっていった可能性も考えられる。

また、築地確認面よりさらに3~6m高い位置にあるI区や、本遺跡に隣接した興善寺志水遺跡においても、同種の瓦や土器等がかなりの量出土している。両地区とも寺域外にあり、こ(註4)れらの瓦は人為的に運ばないかぎり、自然的要因により移動することはとうてい考えられない位置関係にある。これらの問題をも含めて、寺域の確定には、さらに解決されなければならない問題が残されている。

註1. この地域における近年の古墳調査例として、以下のものがある。

- ○村井真輝、丸山武水「境古墳群・境遺跡」熊本県文化財調査報告第42集、熊本県教育委員会 1980
- ○松村道博・村井真輝・勢田広行他「清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓」 熊本県文化財調査報告第41 集 熊本県教育委員会 1980
- ○桑原憲章・勢田広行・広瀬正照「玉泉寺古墳群」 熊本県文化財調査報告第44集 熊本県教育委員会 1980

註2. 村井真輝・丸山武水 「境古墳群・境遺跡」熊本県文化財調査報告第42集 熊本県教育委員会 1980 註3. 松本雅昭 「興喜寺廃寺調査報告」『熊本県の文化財』 熊本県文化財調査報告第1集 熊本県教育 委員会 1961

註4. 江本直 「興善寺志水遺跡」『興善寺 II』 熊本県文化財調査報告第45集 熊本県教育委員会 1980

(3) 出土遺物における二・三の問題

今回出土した遺物の中に、とうてい使用に耐えないほど、焼きひずみのある須恵器や瓦が認められた。その量は少なくない。こうした状態は本遺跡に南側の興善寺志水遺跡の出土遺物、特に須恵器の中に多く認められる。「使用に耐えない」と考えた須恵器や瓦についての判定については、当然異論があるものと思われる。しかし、通常の生活遺跡の出土遺物の中には、例外的に混入することはあっても、両遺跡の出土量から見た場合には、「例外的現象」として片

付けられない問題であり、興善寺を背景とした生産機構、すなわち窯跡の存在を想定せざるを えないのである。

興善寺跡に最も近い瓦窯址は、八代郡宮原町平原瓦窯址であり、従来両者の需給関係を考える見解が出されたこともあったが、本遺跡と同様に九州縦貫道建設に伴う平原瓦窯址の調査成果によっても、両遺跡出土の瓦を結びつける要因はほとんど見当たらない。むしろ現状では、(註2) 両者の需給関係は存在しなかったと見るべきであろう。

また須恵器生産窯址としては、八代市敷川内町丸山窯址が最も近い位置にあるが、その操業年代は7世紀後半と考えられ、本遺跡出土の須恵器より先行するものである。最近の調査所見(註4)では、松橋町大狭尾窯址群出土の須恵器と、本遺跡出土の須恵器の一部に、手法上極めて特徴(註5) (註6) 的な共通性を有するものが認められ、両者に需給関係が存在したことが明らかにされつつある。これらの須恵器の年代は8世紀後半代に位置付けられる。

以上のようなことから、興善寺址とその生産遺跡に関して列記すれば次のようなものと思われる。①興善寺を背景として窯址が存在した可能性があること。②窯址は須恵窯・瓦窯の両者の存在が想定される。焼きひずみのある瓦は、すべて格子タタキ文瓦に限られ、同じような須恵器との年代がほぼ一致していることから、その操業期間は限られていた可能性が強い。また、須恵窯と瓦窯とが併設されていたのか、あるいはいわゆる瓦陶兼業的な性格のものであったかについては、今後の課題となるだろう。③興善寺に伴う須恵窯の存在と、須恵器の中には、大狭尾窯址群において生産されたものが含まれている点などを考慮すれば、複数の生産址との需給関係が想定される。

また「衆」という文字が刻まれた須恵質土器と、「寺」と刻まれた土師坏が出土した。両者の年代は、いずれも9世紀前半代に位置付けられる。「粂」は「衆」であり、「衆」の俗字である。古代にあっては「衆」あるいは「大衆」は、僧侶の総称として使用されたが、また一方で、寺院の中枢機構に伴い、厨房や窯屋さらに倉庫や雑舎が付属設備として設けられていた。こうした施設の中に、日常生活の全般をまかなう機関として、食堂および大衆院が設置されていた。「衆」と刻まれた土器は甕形土器の胴部破片であり、必ずしも「衆」の一字のみに終らない可能性があることを前提とすれば、「衆」は「衆」・「大衆」・「大衆院」のいずれかに相当するものであろう。

「寺」については、昭和30年の調査において丸瓦凸面に、やはり「寺」と刻まれたものが出 土しているので、2 例目となる。「寺」はすなわち興善寺を指すものである。

こうした文字ある土器の中でもへラで刻まれたものは、生産段階で刻まれるものであり、墨 書土器の場合とはやや性格がことなっている。いわば供給者を区別するための一種の記号とみ なされる。したがって、「衆」・「寺」の両者も、供給者を刻んだものであり、「寺」は寺院の中 枢機構、「衆」は寺院に付属した機関あるいは特定の施設を記したものと考えられる。

- 註1. 江本直他、「興善寺志水遺跡」、『興善寺Ⅱ』所収、熊本県文化財調査報告第45集、熊本県教育委員会 1980
- 註2. 島津義照他、「平原瓦窯址」 能本県文化財報告第40集 1980
- 註3. 松本健郎 「生産遺跡基本調査報告II」 熊本県文化財調査報告第48集 1980
- 計4. 計3に同じ
- 註5. 註3に同じ
- 註6. 特に須恵器高台付坏、および鉢形土器に顕著に認められる。高台は坏では、高台を貼り付けた後、端 部外面を強くナデられる。この種の高台付坏については、第59図119~126および第65図64~66がこれに 相当する。

(4) 軒丸瓦製作技法

今回出土した各種の軒丸瓦について、製作技法の観察を行った結果、その手順の上において、 著しく異なるものがあることが明らかとなった。本遺跡におけるそうした軒丸瓦の製作技法を 技法Ⅰ~Ⅲと呼ぶことにした。

技法 I

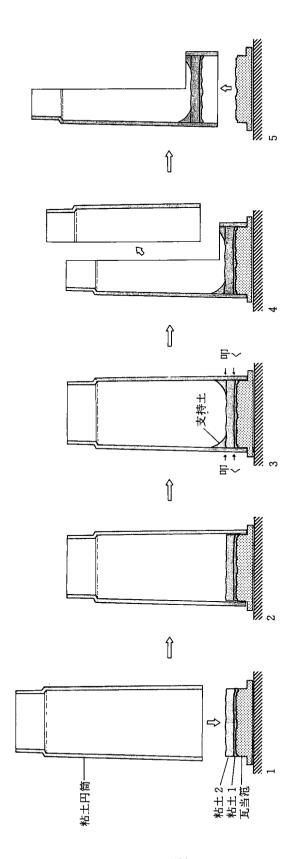
鬼面文軒丸瓦に認められる他、単弁8葉蓮花文軒丸瓦もその可能性が強い。いわゆる「一本造り」によるものである。その製作手順は次のとおりである。(第72図)

- 1. 瓦当窓にうすく粘土をつめて文様を抽出する。さらに瓦当内区に相当する厚い粘土塊を のせて圧着し、窓にあわせて余分な粘土を取り除く。
- 2. あらかじめ作っておいた生乾きの粘土円筒(未分割の丸瓦)を瓦当裏面よりはめこむ。
- 3. 円筒の下部をタタキ板でたたいて、円筒と瓦当部を接合するとともに、内面に支持土を加えて、両者の接合をさらに強める。 (註1)
- (胜4)
 5. 窓から取りはずして、瓦当周縁部の内面すなわち円筒と瓦当内面の接合面を指先等でナデて接合をさらに強める。また瓦当周縁部をヘラ等の工具でケズって面を整え、「V」字状ないし「凵」および「U」字状の溝を刻んで軒丸瓦を完成する。

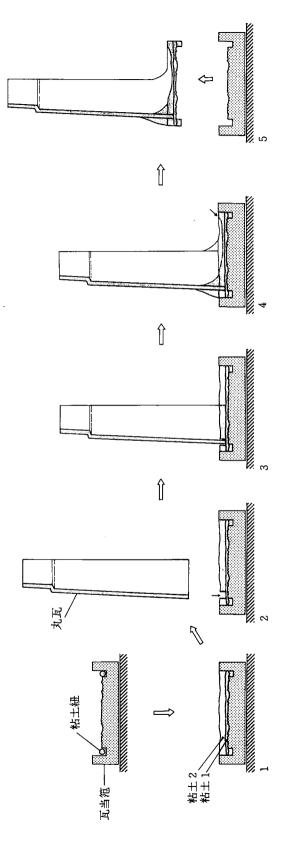
以上の手順は、各個体ごとにわずかに異なる場合があるが、基本的には1~5の順序によって製作されている。前述したように、出土例としては、鬼面文軒丸瓦はすべてこの方式がとられている。他に単弁8葉連花文軒丸瓦はいずれも小破片であるが、同じ方法が取られた可能性が強い。

技法II

複弁8葉文軒丸瓦に認められる手法である。この場合、技法Iによる軒丸瓦と同様に、瓦当 裏面の周縁部が高く残され、技法Iからの形態上の模倣が認められ、いわば「擬似一本造り」



第72図 軒丸瓦製作技法模式図(技法 I)



第73図 軒丸瓦製作技法模式図(技法II)

とも呼べるものである。その手順は次のとおりである。

- 1. 瓦当笵の周縁部に当る凹みに粘土をつめる。この場合粘土紐を用いたものと思われる。 さらにうすい粘土をつめ文様を抽出し、その上に粘土塊をのせる。
- 2. 裏面に丸瓦を差し込むための溝をつくる。

あらかじめ半截した丸瓦を差し込む。この場合、丸瓦の先端は、文様抽出のためのうす

- い粘土帯の面で止まっている場合が多い。
- 4. 瓦当の内外面に支持土を加えて、接合を強める。さらに裏面の中央部の粘土をえぐり取 る。これは瓦当部を軽くすることにより、瓦当部と丸瓦の離脱を防ぐための効果をねらった ものと思われる。
- (註7) 5. 笵から取りはずす。

技法Ⅲ

単弁6葉軒丸瓦に認められる手法である。本来は技法Ⅱ範疇に入るものであるが、手順の上 で若干異なる部分があり、あえてⅢ類とした。その手順は次のとおりである。

- 1. 瓦当笵にうすい粘土をつめて文様を抽出する。その上に一気に笵いっぱいに相当する粘 土塊をのせる。
- 2. 裏面に丸瓦を差し込むための溝を掘る。
- 3. あらかじめ半截した丸瓦を差し込む。
- 4. 内外面に支持土を加えて接合を強める。
- 5. 笵から取りはずす。

以上の各手順である。

- 註1. ここで使用されるタタキ板はすべて格子目文のものに限られ、他の平行タタ キ、繩目タタキのものは認められない。
- 註2. 本来の手順からすれば、瓦部の切り取り後にした方が、裏面が直視でき、 作業も容易である。出土例のうち軒丸10では丸瓦部を切り取る前段階に支持土を 加えて瓦当裏面を調整していることが確かめられた。



- 註3. この場合、裏面のかなり手前で切り取るために、裏面周縁部が高く残り、この種の瓦の大きな特色とな っている。また軒丸10では半截の「目安」となる分割線が円筒部に残り、さらに瓦当周縁部におよんでいる。
- 註4. 瓦当離面の接合部の補強・調整は、2段階でも行われるが、ここでは仕上げのための調整に主眼を置いた ものであろう。なお出土例のうち軒丸19では、離面周縁端部をタタキ板で調整している。
- 註5. 溝巾は一定せず、かなり粗雑に刻んだものが多く、瓦を静止状態で、ヘラ状の工具で使用したものと思わ れる。

付 論

興善寺馬場遺跡

---能本県八代市興善寺町所左興善寺馬場遺跡の調査---

熊本県文化財調査報告第45集 能本県教育委員会1980年3月

付論 能本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨

長崎大学医学部解剖学第二教室 松 下 孝 幸

はじめに

熊本県八代郡興善寺町にある馬場遺跡の土址から、人骨が合計3体出土した。

この出土人骨は別項で述べられているように、孝古学的所見より、いずれも中世に属するものである。

人骨の保存状態は比較的良い方で、体数は少ないが、中世人骨の貴重な資料となるものと考えられるので、計測や観察を行なった。その結果を報告したい。

資 料

1号人骨

保存状態は比較的良く、頭蓋は前頭骨、後頭骨および側頭骨の残りが良い。しかし頭頂骨は これらに比べると欠損が多い。顔面頭蓋は破損しており、右頰骨を完全に欠いているほか上顎 骨の一部も欠損している。

四肢骨は比較的骨質がしっかりしており、保存も良く、上肢骨については、鎖骨の中部が左右共残存しており、上腕骨では左右共骨体近位部を欠いている他はほぼ残っていた。焼骨は左側が、尺骨は左右共遺残していた。下肢骨については、大腿骨と脛骨が左右 共保 存状態が比較的良好である。膝蓋骨は左が完全であるが、右は全く欠けており、腓骨は左右共骨体の一部が残っていたにすぎない。また寛骨については左側のみが残っていた。

その他、手根骨、中手骨および指骨の一部が残存していたが、椎骨は全く残っていなかった。 性別、年齢は下記の所見より熟年女性骨と推定される。

2号人骨

骨質はしっかりしているが、残存量は1号人骨よりやや劣っている。

頭蓋は脳頭蓋の後半分が良く残っているが、顔面頭蓋は前頭骨の左右の眼窩部が残存しているだけである。また下顎骨は下顎体と左の下顎枝が残っているが、右下顎体は歯槽部を欠いて

いる。

四肢骨のうち、上肢骨は右肩甲骨の関節窩と左側の肩甲棘が、鎖骨は右側のみが残存していた。上腕骨は右側の保存が良く、部分的には欠損はあるものの、ほぼ完全である。しかし左側は遠位半のみしか残存していなかった。また橈骨は骨体の一部が、尺骨は遠位端を欠く以外の大部分が残っていた。

下肢骨は、寛骨の腸骨体と坐骨体が両側共残っていたが、左側の方が比較的保存が良い。大腿骨は左側が遠位端を欠いている他は良く残っていたが、右側は骨体のみ残存していた。脛骨は左側は骨体が、右側はごく一部が残存するだけである。

その他、足根骨、手根骨の一部が残存していた。

性別、年齢については下記の所見より、熟年男性骨と推定される。

3号人骨

頭蓋の保存状態は3体のなかで最も良い。脳頭蓋は右側頭骨の一部と左頭頂骨の一部が欠損 している他は良く残っていた。しかし、顔面頭蓋の遺存状態は悪くて、前頭骨と鼻骨および上 顎骨の一部が残っていたにすぎない。また下顎骨は下顎体の左半分と左の筋突起が残存してい た。

四肢骨の残りは3体のなかでは最も悪く、上肢骨は、肩甲骨については左の関節窩と右の肩甲棘が、上腕骨は左の骨体が残っているだけで、下肢骨は左大腿骨の骨体と右大腿骨の骨体の一部および脛骨と腓骨のそれぞれ骨体の一部が残存していた。

性別、年齢については、下記の所見より、壮年女性骨と推定される。

所 見

1号人骨

(1) 頭 蓋

1. 脳頭蓋

後頭骨と側頭骨とが比較的保存が良い。後頭骨の外後頭隆起の発達はあまり強くない。また 側頭骨は左右共錐体が残存していたが、乳様突起は小さい。

2. 顔面頭蓋

前頭骨の保存が良く、眉上弓の隆起はあまり強いものではなく、前頭鱗の膨隆も豊かである。 上顎骨は歯槽突起の部分が破損しており、明確ではないが、弱い突顎がうかがえる。顔面の計 測は最少前頭幅のみしか行なえず、その計測値は 101mmである。

3. 下顎骨

下顎体は左右が非対称で、左側の骨体に著明な変形が認められる。オトガイ隆起の左側に異常な骨隆起が存在し、左側骨体に骨萎縮が認められ、歯槽部の高さが左右で著しく異なり、左側の残存歯は浮き上がっている。また顎舌骨筋線の発達は左側の方が良好である。

4. 歯

上顎骨の歯槽突起ならびに下顎骨の歯槽部が残存していたので、歯も比較的良く保存されていた。下顎体の左側に変形が認められ、左側は中切歯から第1臼歯まで欠除しているので、右側の中切歯から犬歯の3歯が大きく左側へ傾斜している。

歯式は次の通りである。

咬合型式については、上顎の切歯群の保存が悪く、明らかにはできない。しかし、歯によって咬 耗度が異なることや下顎の項でも記したように、左側の下顎体に異常が認められることから、 咬合型式にも異常があったものと考えられる。

咬耗度は小臼歯と犬歯はBroca の2度、それ以外の歯は3度である。

- (2) 四肢骨
- 1) 上肢骨
 - 1. 鎖骨

両側共中間部の一部のみが残存しているが、細くてきゃしゃである。

2. 上腕骨

左右共に近位部を欠損しているが、保存は比較的良好で、骨質もしっかりしている。径は大きくなくて、やや細く、三角筋粗面の発達も悪い。

計測値は推定中央位での径は、最大径が(19mm、右)、(20mm、左)、最小径が(14mm、右)、(16mm、左)で骨体断面示数は(73.68、右)、(80.00、左)となり、右側の方がやや扁平である。また骨体最小周は54mm(右)、56mm(左)、で、中央周は(58mm、右)、(59mm、左)でやや細い。

3. 榛 骨

左側のみが残存しており、遠位部を欠いているが、その他の部分は良く残っていた。諸径は 小さく、細い。

4. 尺骨

両側共遠位端を欠失しているが、その他の保存は良好である。諸径は小さくて細く、尺骨粗 面の発達も悪い。

2) 下肢骨

1. 寬 骨

左側の坐骨体と腸骨体が残存しており、諸径は大きくない。大坐骨切痕が残っており、その

角度は大きい。

2. 大腿骨

左右共骨体が残っており、その径はやや小さく、粗線の発達も余り良くないが、骨体上部に は弱い扁平性が認められる。

計測値は推定中央位での矢状径が(26mm、右)、(25mm、左)、横径が(26mm、左右)、中央周が(82mm、右)、(78mm、左)で、中央断面示数は(100.00、右)、(96.15、左)となり、柱状形成の像も認められない。また左側の上骨体断面示数は 77.78となり、弱い扁平性がうかがえる。

3. 脛骨

左右共に両端を欠損しており、骨体のみが残存していた。両側共諸径は大きいものではないが、下図の様に特異的な形をしている。前縁は両側共強いS状に彎曲しており、また共に後面には一稜を形成しているが、その程度は左側の方がはなはだしく、外側面が骨間縁へかけてやや陥没しており、縄文人のなかにもこの様に一稜形成が著しいものはまれである。ヒラメ筋線の発達は著しく弱いが、骨体は扁平で、特に左側の方が著しい。



計測値は推定中央位での最大径が(27mm、右)、(29mm、左)横径が(20mm、右)、(19mm、左)で、中央周は(74mm、右)、(77mm、左)で、中央断面示数は(74.07、右)、(65.52、左)となり、左側には特に強い扁平性が認められる。また中央断面型は両側共へリチカのⅣ型を呈しているが、前述したように左側の方が後面の稜形成が顕著である。

4. 腓 骨

両側共骨体の一部が残存しているにすぎないが、その大きさは大きいものではなく、また溝 形成も強いものではない。

性別については、寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいことや前頭骨が豊かに膨隆していること から女性と考えられ、年齢については歯の咬耗度より熟年と推定される。

2号入骨

(1) 頭 蓋

1. 脳頭蓋

骨質はしっかりしているが、厚くはない。脳頭蓋の後半分が残存しているだけなので、計測

は不可能であるが、径は大きい傾向がうかがえる。また乳様突起は大きく、外後頭隆起の発達 も良好である。

2. 顔面頭蓋

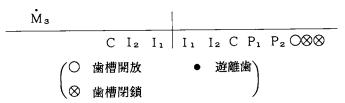
前頭骨の眼窩部が残っているが、眉間の膨隆も強く、眉上弓も強く隆起している。

3. 下顎骨

下顎体と左下顎枝が存在しており、下顎体は高くて厚く、また大きい。オトガイ隆起の発達 も良く、左下顎枝の後方への傾斜は大きい。

4. 歯

下顎左歯槽部と遊離歯とが残っていたが、それを歯式で示すと次の通りである。



咬耗度はBrocaの3度である。

(2) 四 肢 骨

1) 上肢骨

1. 肩甲骨

右側は関節窩が残っており、その大きさは大きい。また肩甲棘もよく発達しており大きい。

2 銷骨

右中部が残存しているが、あまり太くなく、やや長い傾向が認められる。

3. 上腕骨

右側はほぼ完全である。細長く、三角筋粗面の発達は良い方ではない。

計測値は、最大長が 314mm (右) でやや長く、中央最大径は22mm (右)、(23mm、左)、中央最小径は17mm (右)、(17mm、左)、で、骨体断面示数は 77.27 (右)、(73.91左)、となり扁平性が認められる。中央周は64mm (右)、(64mm、左)、最小周は61mm (右)、59mm (左) で、長厚示数は19.43 (右) となり、細長い傾向が認められる。

また左側には滑車上孔が認められる。

次いで同じ九州出土の中世人骨のうち、上腕骨の計測が可能であった立石人との比較を行なった。計測ができた男性上腕骨は1体で、その右最大長は282mmを示し、馬場2号人骨の方が長い。中央最大径は立石人1号の21mm(右)と大差ないが、中央最小径は立石1号人の15mm

(右) よりは大きく、従って骨体断面示数は立石1号人の 71.43よりも大きくなり、扁平性は立石1号人よりは弱い。また最小周は立石人の58mm(右)より大きいが、長径が長いので長厚示数は立石1号人骨の 20.57よりは小さい示数値である。

4. 棒 骨

左側の近位半分が残っており、やや大きく、橈骨粗面や骨間縁は良く発達しているが、骨体 は扁平ではない。

5. 尺 骨

両側共遠位端を欠いているが、その他は保存が良い。大きくて、尺骨粗面や骨間縁の発達は 良好である。

2) 下肢骨

1. 實 骨

保存状態は良くなく、左側の寛骨臼と大坐骨切痕が残っているだけである。大坐骨切痕は下 後腸骨棘が欠損しているので、切痕の形態を明らかにすることはできない。

2. 大腿骨

左側の保存が良く、右側は保存不良である。骨質はあまり厚くなく、また骨体も大きいものではないが、骨頭は大きい。知線の発達もあまり良い方ではないが、骨体上部は扁平である。

計測値は推定中央位での矢状径が(24mm、右)、(25mm、左)、横径が(27mm、右)、(29mm、左)で左右共に横径が矢状径よりも大きい。従って中央断面示数は(88.89、右)、(86.21、左)となり、柱状形成の像は全く認められず、断面形は横広の楕円形を呈している。また上骨体断面示数は 71.88となり、骨体上部には扁平性が認められる。

3. 脛骨

左側骨体が残存しているが、諸径はあまり大きくないし、ヒラメ筋線の発達も良くない。 計測値は、推定中央位での最大径が(28mm)、横径が(22mm)で、中央断面示数は(78.57) となり、扁平性は認められない。中央周は(78mm)、最小周は67mmでやや細い。また中央断面形 はヘリチカのII型である。

(3) 推定身長値

右上腕骨最大長からPearsonの公式を用いて身長値を算出すると、161.51cmとなる。また藤井の式を用いて算出すると160.85cmとなる。

次いで立石1号人の上腕骨からの推定身長値と比較してみると、馬場2号人は立石1号の推定身長値152.25cm (Pearson)、148.42cm (藤井) よりも高く、また尾窪中世人と鎌倉材木座中世人の大腿骨最大長からの推定身長値のそれぞれ158.44cm (5例)、159.72cm (右) よりもやや高い値である。

性別については、外後頭隆起や乳様突起の発達が良いことや、四肢骨がやや大きいことから 男性と考えられ、年齢については、歯の咬耗度から熟年と推定される。

3号人骨

(1) 頭 蓋

1. 脳頭蓋

側頭骨の一部と左頭頂骨の一部とを欠いている他は保存状態は良好で、3体の中では頭型を知り得る唯一の資料である。前頭骨の眉間の部分が破損しているので、復元して計測してみると、頭骨最大長が(189mm)、頭骨最大幅は133mmなので、頭骨長幅示数は(70.37)となり、頭型は長頭(dolichokran)に属しており、中世人の特徴の一つを示している。縫合は内板は癒着しているが、外板には癒合がみられない。

次いで頭骨長幅示数を他の中世人と比較してみると、尾窪中世人の 72.85 (女性、4例)、立石中世人の 74.2(女性、57例) よりやや小さい示数値である。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋の保存は悪く、前頭骨の他、鼻骨と上顎骨の一部が残存するのみである。前頭骨の 膨隆は豊かで眉上弓の隆起は弱い。鼻骨は幅広く扁平で、鼻根部の陥凹がみられる。上顎骨は 破損がひどくて計測はできないが、強い歯槽性の突顎が認められる。

3. 下顎骨

下顎体の左半分が残っているだけであるが、下顎体はあまり高くない。

4. 歯

歯は遊離歯を含めて14本が残っており、歯式で示すと次のとおりである。



(2) 四肢骨

1) 上肢骨

1. 上腕骨

左側の骨体が残っており、その諸径は大きくなく、三角筋粗面の発達も著明ではないが、骨体の前後径が大きく前縁の発達が非常に良い。従って断面形は高径の高い三角形を呈している。

計測値は推定中央位での最大径が (22mm)、最小径が (15mm) で、骨体断面示数は (68.18) となり強い扁平性が認められる。また骨体最小周は58mm、中央周は (62mm) である。

2) 下肢骨

1. 大腿骨

左骨体の内側半が残っていたが、径は小さく、粗線の発達は悪い。計測は不可能であるが、

骨体は矢状径よりも横径が大きく、断面形は横広の楕円形である。

2. 脛骨

骨体の一部だけが残っているにすぎない。径は非常に小さい。

3. 腓 骨

骨体の一部が残っているが、諸径が小さく、稜の発達も良くない。

性別については、前頭骨が膨隆していることや眉上弓の隆起が弱いこと、および四肢骨が小さいことから女性と考えられ、年令は歯の咬耗度から壮年と推定される。

総 括

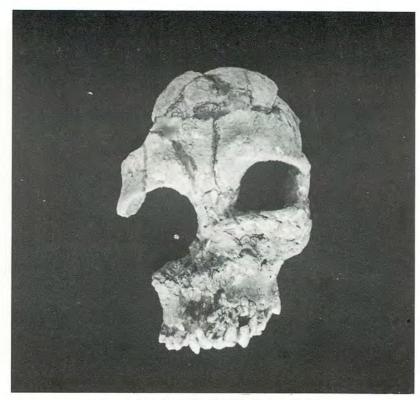
馬場遺跡の中世土拡より比較的保存の良い3体の人骨が出土したので、観察および計測を行なった。その結果を要約すると次の通りである。

- 1. 出土人骨 3 体のうち、男性が 1 体で残りの 2 体は女性であり、年齢は熟年が 2 体で壮年が 1 体である。
- 2. 頭型を知り得たのは1体だけであるが、その頭骨長幅示数は(70.37)となり、長頭型に属している。
- 3. 男性 (2号人骨) の上腕骨最大長は 314 mm (右) で長くて細く、三角筋粗面の発達は良くないが、やや扁平である。
- 4. 大腿骨は男女共に諸径が大きくなく、粗線の発達も悪くて骨体は矢状径よりも横径の方がやや大きく、柱状形成の像はみられないが、骨体上部には扁平性がうかがえる。
 - 5. 脛骨は男女共あまり大きいものではなく、ヒラメ筋線の発達は悪い。
- 6. 1号人骨の脛骨は特異的で、前縁が強く彎曲し、後面には一稜が形成されており、左側の稜は鋭く突出している。
- 7. 男性の右上腕骨最大長から Pearson の式および藤井の式を用いて推定身長置を算出するとそれぞれ、161.51cm、160.85cmであった。
- 8. 中世人に関しては鈴木(1956)が鎌倉材木座出土の人骨について報告し、日本人の形質変化について考察を行ない、中世人の特徴を明らかにしている。その特徴は、長頭、低顔、突顎の三つに要約できる。九州でも熊本県の尾窪、塚原、杉谷、大分県の立石で中世人骨が出土し、これらの詳細な研究を行なった内藤は長頭、低顔、突顎の三つの特徴は九州の中世人骨にも認められることを明らかにしている。この馬場中世人骨は顔面の計測はできなかったが長頭と突顎の傾向を認めることができ、中世人の特徴を強く表わしている。また身長については、男性はやや高身である。

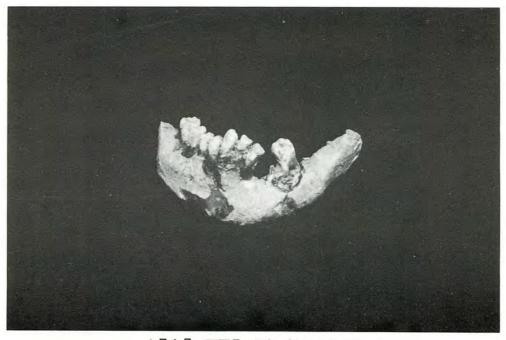
(擱筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課、ならびにご指導 いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。)

参考文献

- 1. 牛島陽一、仙波輝彦、1960:山口県阿武郡見島村出土の中世時代の人骨について、人類学研究、7 (3~4) :52-56
- 2. 鈴木 尚、1956:鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨、岩波、東京、75-170
- 3. 鈴木 尚、1963:日本人の骨、岩波、東京、1-52
- 4. 内藤芳篤、1973:人骨、尾窪:62-78
- 5. 内藤芳篤、1974: 人骨、立石貝塚: 39-45
- 6. 内藤芳篤、1975:塚原中世墳墓・丸尾5号墳出土の人骨について、塚原: 317-322
- 7. 内藤芳篤、松下孝幸、1978:杉谷遺跡出土の中世人骨、大園山・杉谷遺跡: 116-122
- 8. 内藤芳篤、他、1979: 九州の中世人骨について、人類誌、87:171
- 9. 永井昌文、1965: 荒尾市浄業寺中世人骨について、浄行寺と小代氏: 51-53
- 10. Martin Saller, 1953: Lehrbuch der Anthropologie Bd. I. Gustar Fischer Verlag, stuttgart.
- 11. 故松野 茂、北條暉幸、他、1970: 熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について、熊本医会誌、44(10): 999—1016。

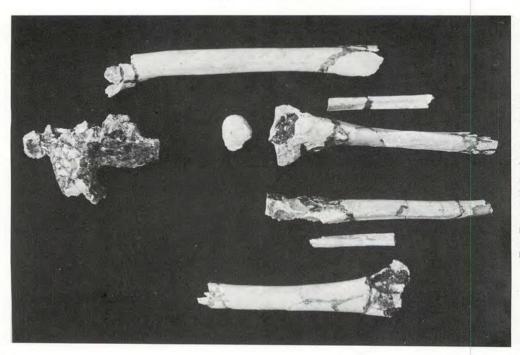


1号人骨・頭蓋正面観(女性・熟年)

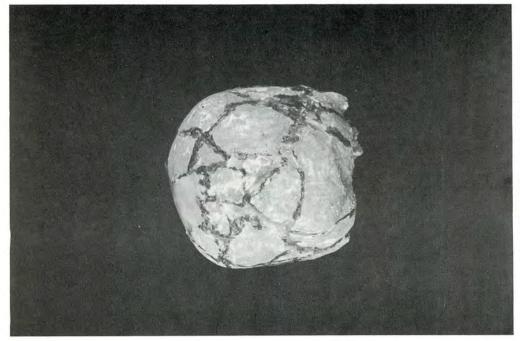


1号人骨・下顎骨正面観(女性・熟年)

1号人骨・上肢骨 (女性・熟年)



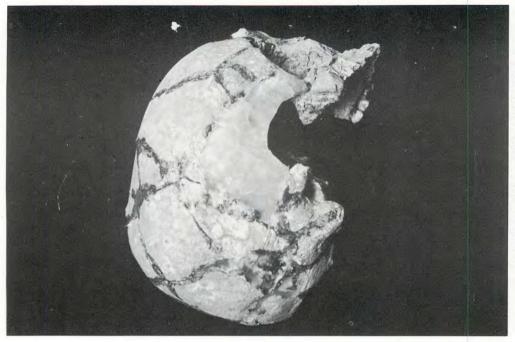
1号人骨・下肢骨(女性・熟年)



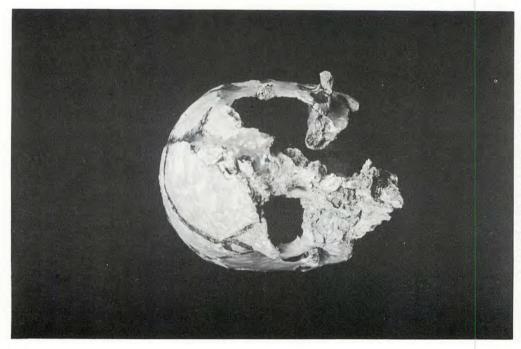
3号人骨・頭蓋・上面観(女性・壮年)



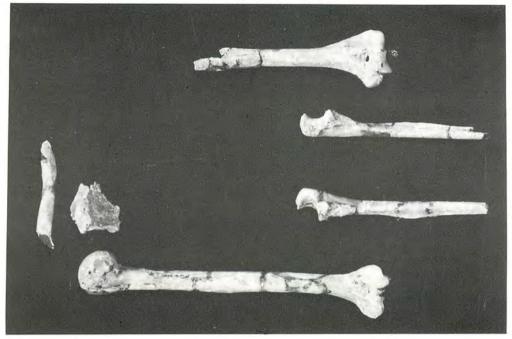
3号人骨・頭蓋・後面観(女性・壮年)



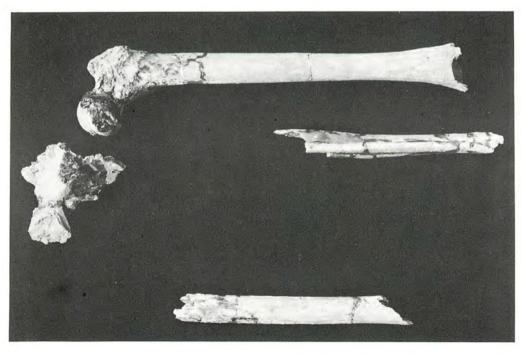
3号人骨・頭蓋・正面観(女性・壮年)



3号人骨・頭蓋・側面観(女性・壮年)



2号人骨・下肢骨 (男性・熟年)



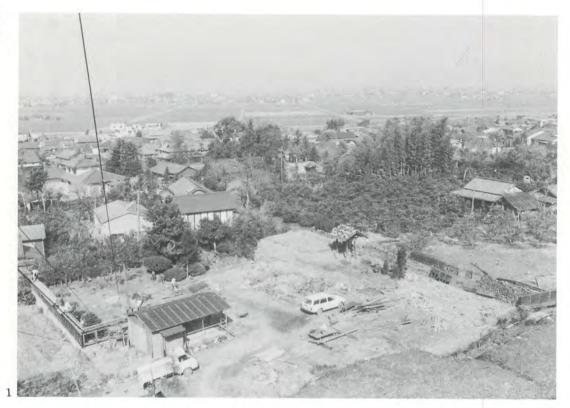
2号人骨・上肢骨 (男性・熟年)

図 版





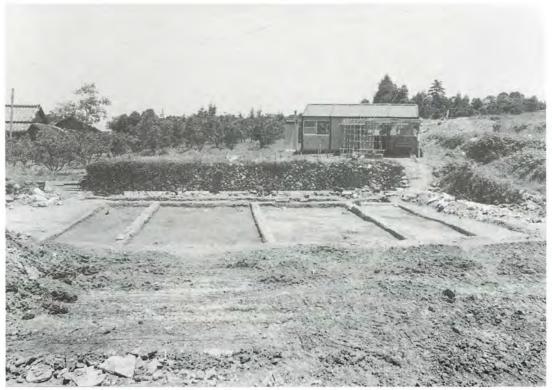
1.興善寺馬場遺跡遠景(東から) 2.興善寺馬場遺跡 I 区全景(南から)





1.興善寺馬場遺跡II区全景(南から) 2.興善寺馬場遺跡II区調査風景(南から)



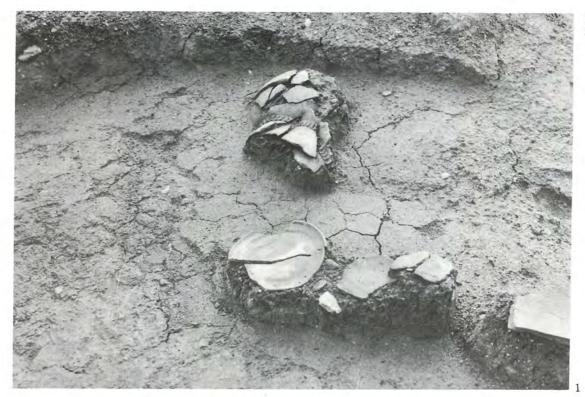


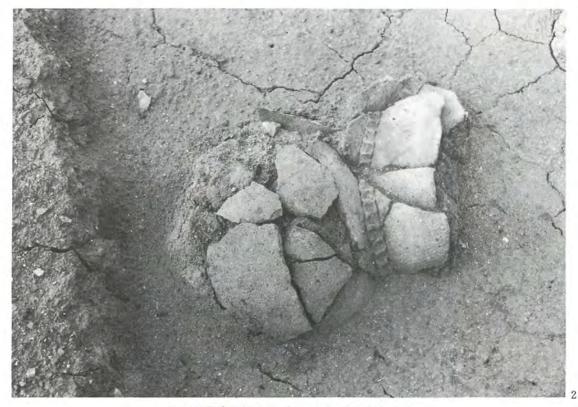
1.興善寺馬場遺跡II区五輪塔 2.興善寺馬場遺跡II区全景(南西より)



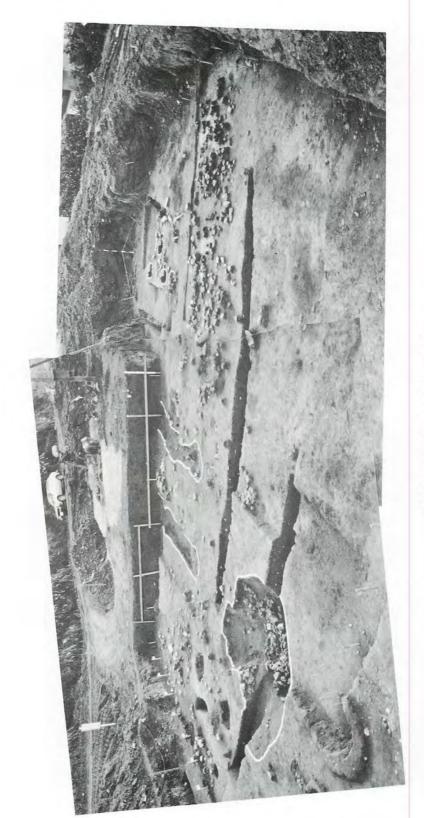


1.興善寺馬場遺跡Ⅰ区調査風景(東から) 2.興善寺馬場遺跡Ⅲ区調査風景(北から)





1.2.興善寺馬場 I 区 (I-5) 遺物出土状態



興善寺馬場遺跡II区全景(北から)



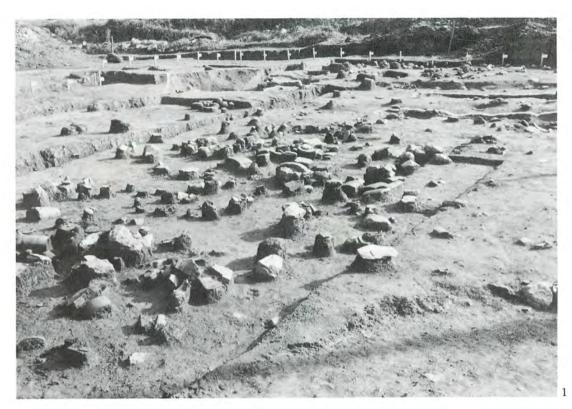


1. II 区遠景(北から) 2. II 区遺物出土状態





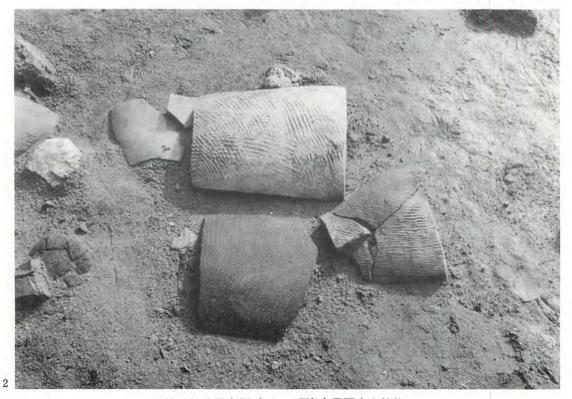
1. II 区築地状遺構 2. II 区築地状遺構周辺の遺物出土状態(北から)





1. II 区築地状遺構周辺の遺物出土状態(西から) 2. II 区築地状遺構周辺の遺物出土状態 (北から)



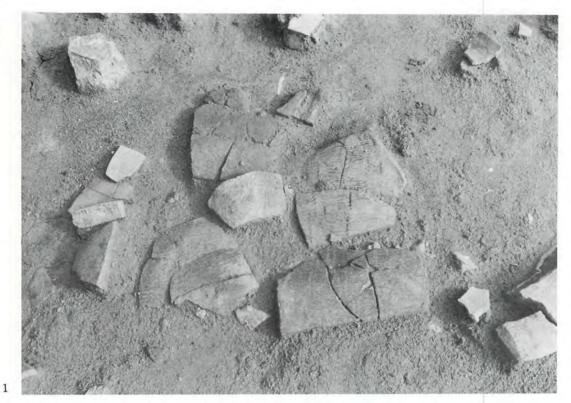


1·2. II 区築地状遺構東側 (J-4区) 布目瓦出土状態





1・2. II区 (J-5・I-5) 布目瓦出土状態





1·2. II区布目瓦出土状態





1. II 区調査業風景 2. II 区近景





1.II区 (J-12) 布目瓦出土状態 2.II区 (M-9) 布目瓦出土状態



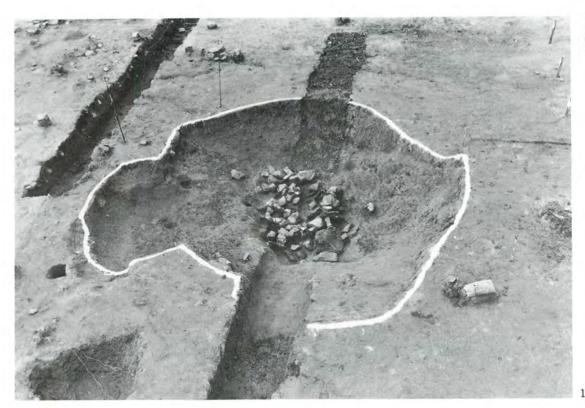


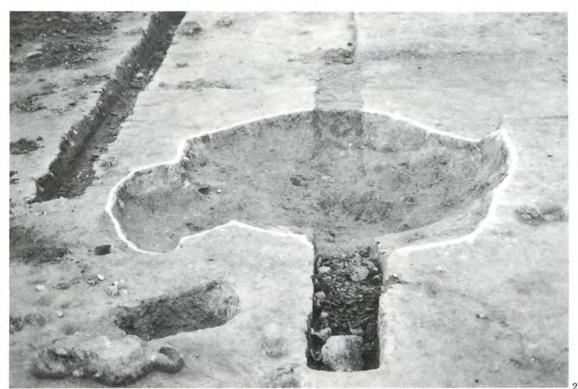
1. II 区井戸状遺構調査風景 2. II 区井戸状遺構① (西から)





1.II区井戸状遺構断面(A-A') 2.II区井戸状遺構内礫群





1. II 区井戸状遺構② 2. II 区井戸状遺構③



1. II 区井戸状遺構遺物出土状態① 2. II 区井戸状遺構遺物出土状態②





1. II 区井戸状遺構遺物出土状態③ 2. II 区井戸状遺構遺物出土状態④





1. II 区井戸状遺構遺物出土状態(猪牙)⑤ 2. II 区井戸状遺構遺物出土状態(馬歯)⑥





1. II 区井戸状遺構遺物出土状態(猪下顎骨) ⑦ 2. II 区井戸状遺構遺物出土状態(猪下顎骨) ⑧





1. II 区中世墳墓 1 号墓人骨出土状態 2. II 区中世墳墓 2 ・ 3 号墓人骨出土状態





1. II 区中世墳墓 2 号墓人骨出土状態 2. II 区中世墳墓 2 号墓遺物出土状態

1





1. II 区中世墳墓 3 号墓人骨出土状態 2. II 区中世墳墓 3 号墓人骨及び遺物出土状態





1.Ⅲ区全景(西から)① 2.Ⅲ区流路内遺物出土状態





1.Ⅲ区調査風景 2.Ⅲ区全景(北から)②



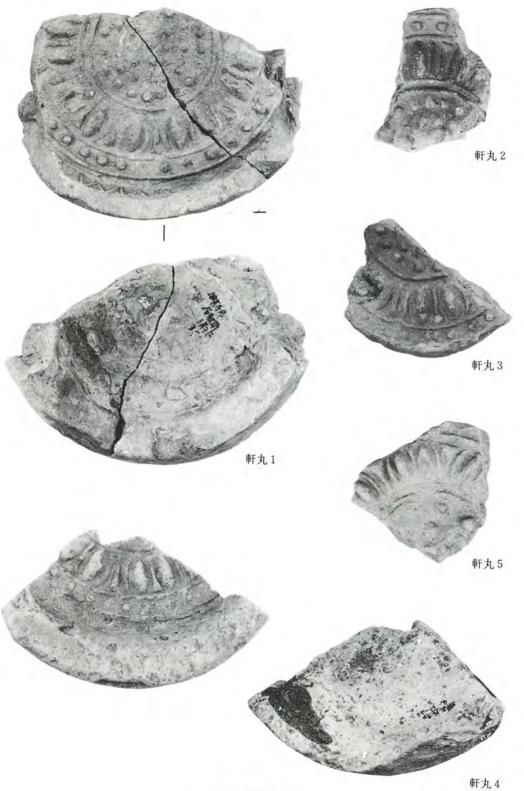


1.Ⅲ区遺物出土状態 2.Ⅲ区全景(東から)③

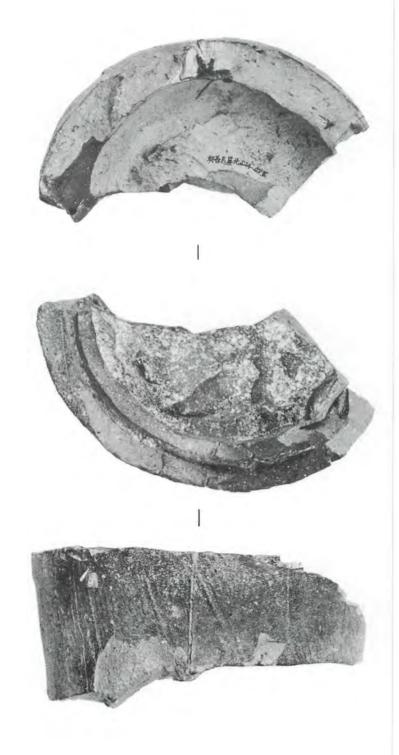




1、2、Ⅲ区流路内遺物出土状態



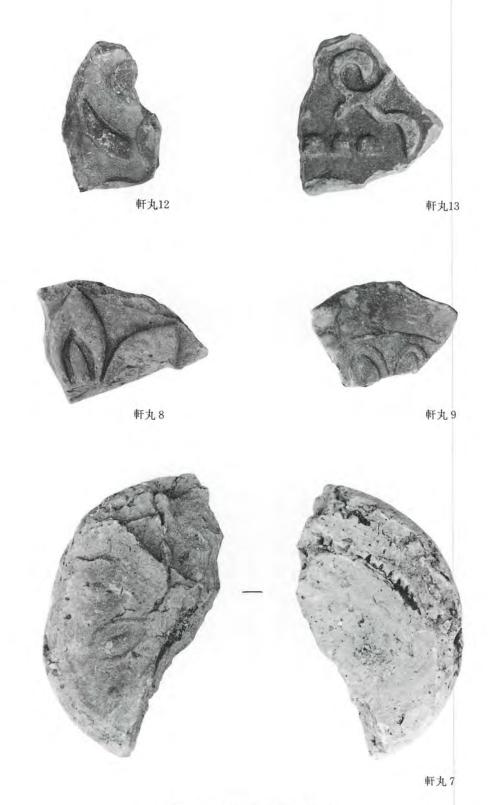
複弁蓮花文軒丸瓦



鬼面文軒丸瓦 (軒丸10)



鬼面文軒丸瓦(軒丸11)

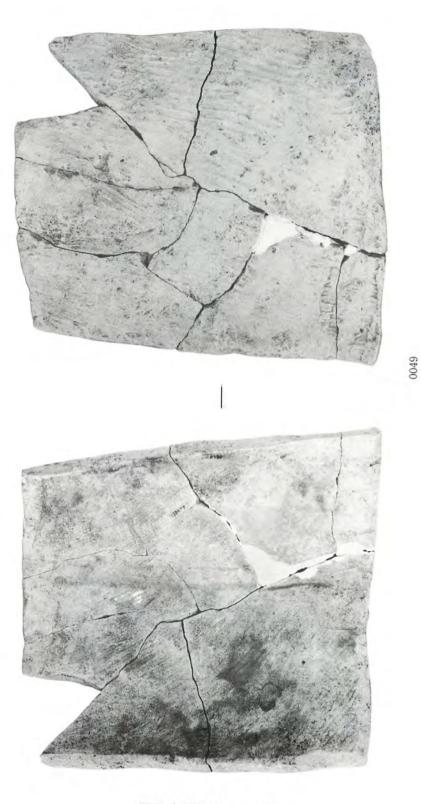


鬼面文軒丸瓦・単弁蓮花文軒丸瓦

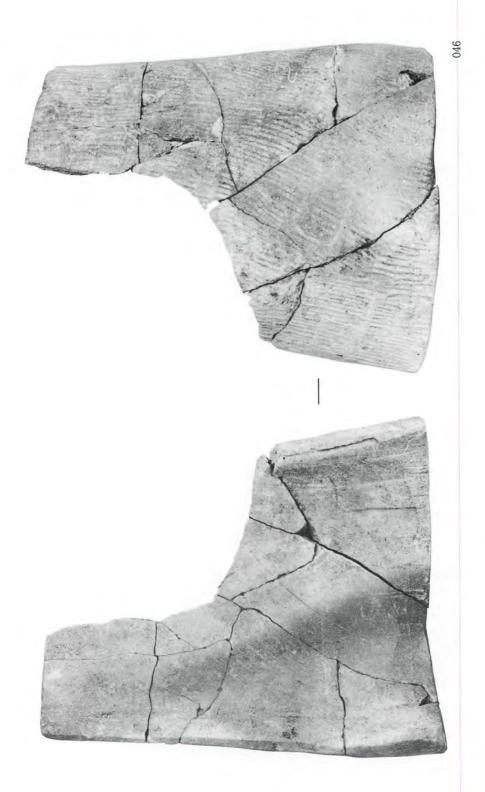




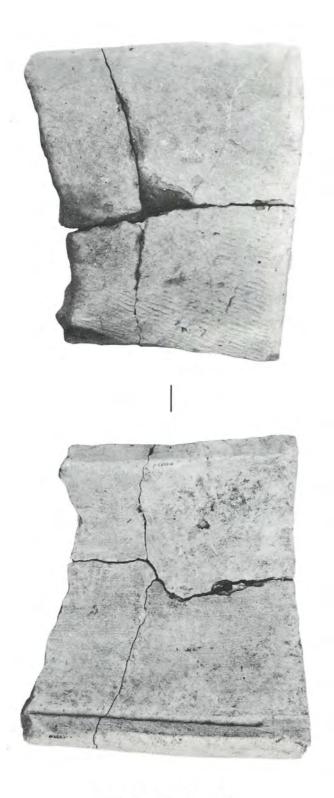
平瓦・丸瓦 (平行叩き文 Ⅰ類)



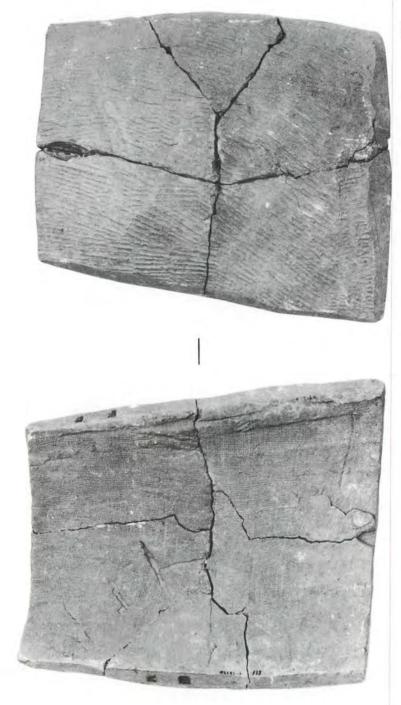
平瓦(平行叩き文 I類)



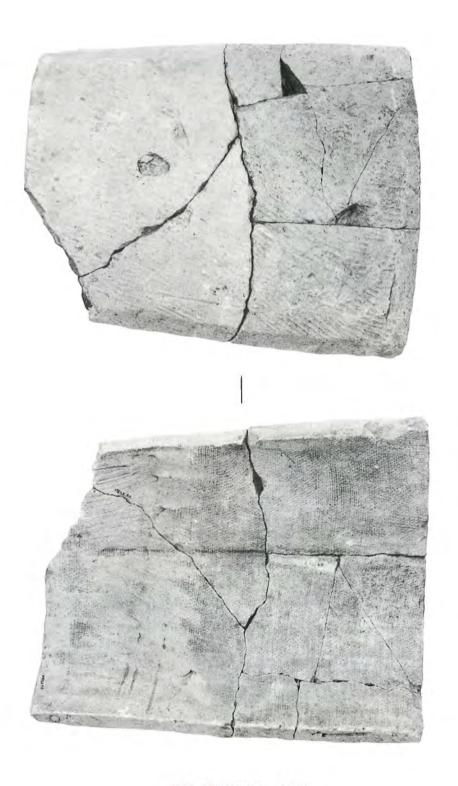
平瓦 (平行叩き文Ⅲ類)



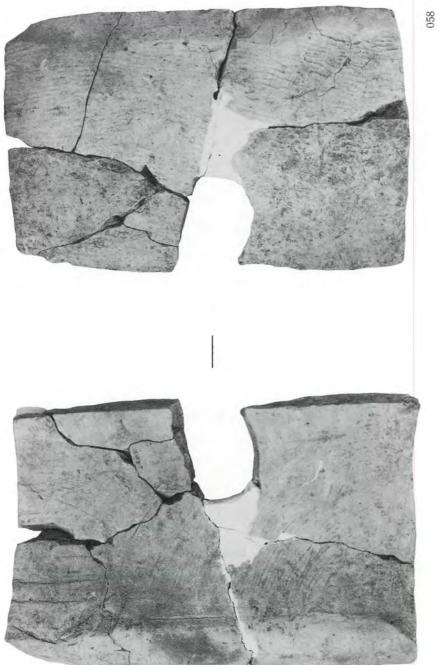
平瓦 (平行叩き文 III類)



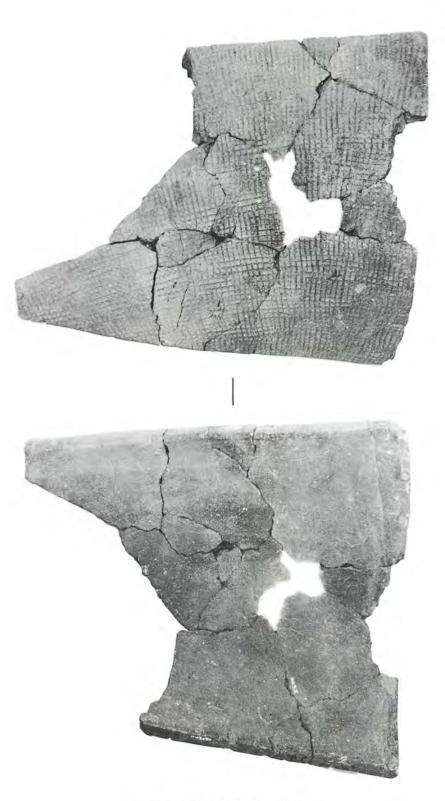
平瓦 (平行叩き文 IV類)



平瓦(平行叩き文 IV類)



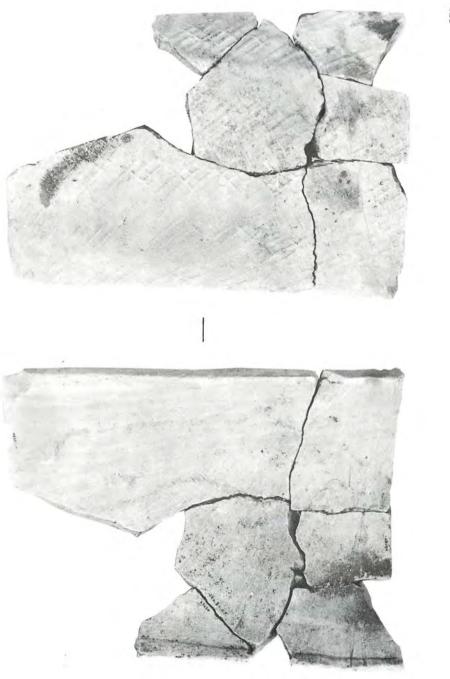
平瓦(平行叩き文 Ⅳ 類)



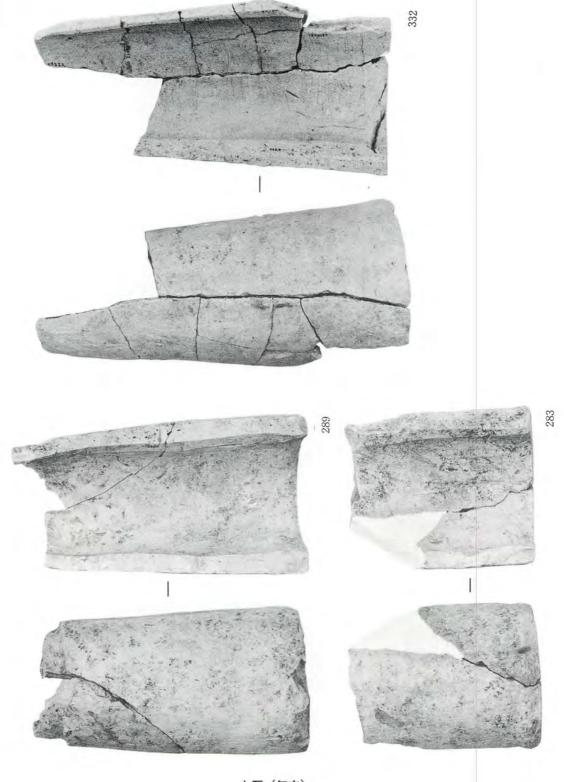
平瓦(格子目叩き文 III類)



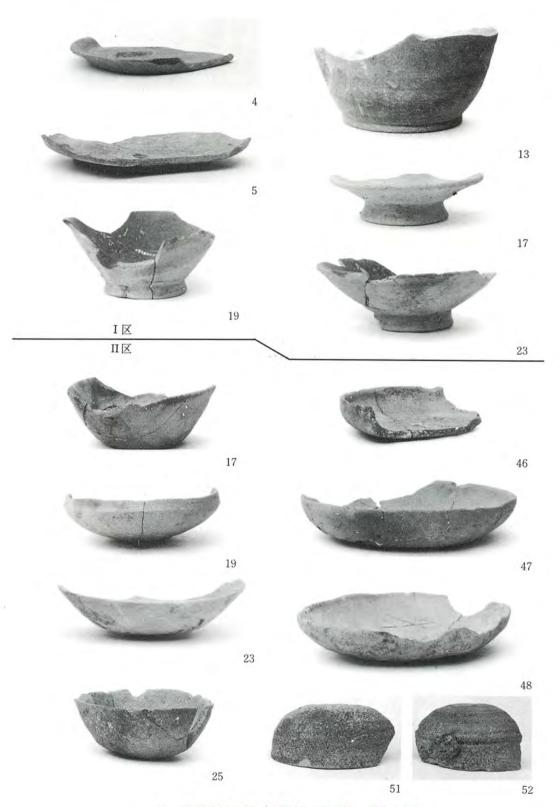
平瓦(格子目叩き文 III類)



平瓦(部分格子目叩き文)



丸瓦 (無文)



I・II 区出土土器(土師器・須恵器・黒色土器)



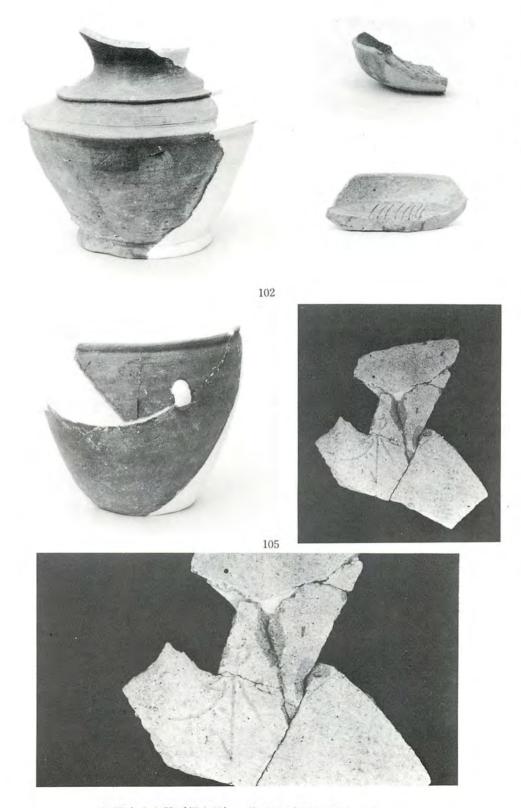
II 区出土土器(須恵器)



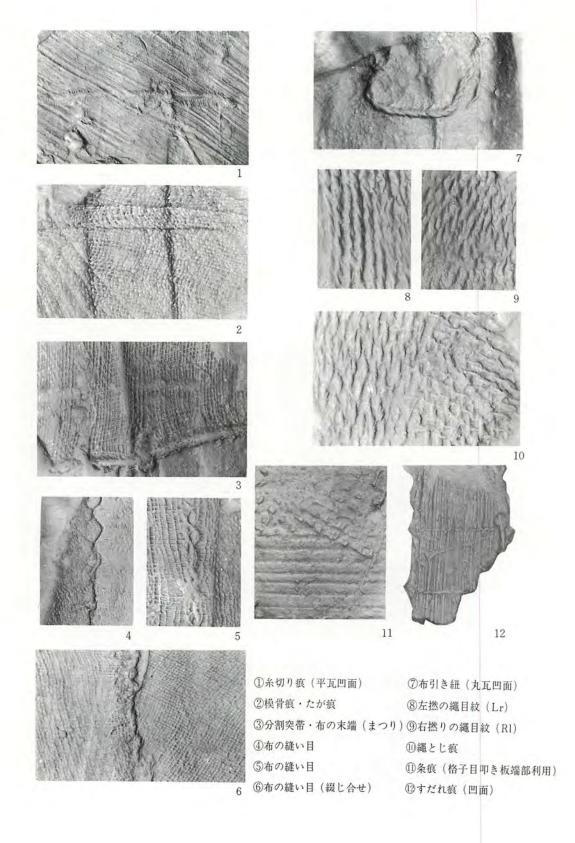
49 III区出土土器(土師器・須恵器)



III区出土土器(須恵器)



Ⅲ区出土土器(須恵器)・陶磁器(瀬戸おろし皿)



熊本県文化財調査報告 第45集

興 善寺 I

昭和55年3月31日

編集 熊本県教育委員会 © 発行 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 コ ロ ニ ー 印 刷 〒860 熊本市二本木3丁目12-37 この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 45 集を底本として作成しました。 閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用 してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用 方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名:興善寺

発行:熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話: 096-383-1111

URL: http://www.pref.kumamoto.jp/

電子書籍制作日:2016年3月31日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しく は熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL: http://www.kumamoto-bunho.jp/